平成２３年度

第２回
こどもみらい館研究プロジェクト報告書

― 平成２２年度～２３年度 ―

保幼小連携研究プロジェクト

子育て支援研究プロジェクト

京都市子育て支援総合センター
こどもみらい館

ご あ い さ つ

こどもみらい館に隣接する竹間公園の櫻が満開になる頃，この冊子をお手元にお届けできることとなり，この上ない喜びと思っております。

日頃から京都市子育て支援総合センターこどもみらい館の様々な事業等に深いご理解と多大なご支援を賜りまして誠に有難うございます。開館以来，毎年約４０万人のご利用を頂き，１３年目となります本年５月にはまさに５００万人目の来館者をお迎えしようとしております。

国の動きにつきましては，現在まだ不透明なところはあるものの「こども園」構想にやっと小さな一歩を踏み出したと言ったところでしょうか。

第２回「こどもみらい館研究プロジェクト」報告会は平成２４年１月２７日に，遠くは東北からの参加者も含め１２４名もの参加者を得，滞りなく開催させていただきました。発表者にとりましても，また研究に携わった全ての方々にとりましても多くのご参加は有り難く，会場やアンケートでの質問やご意見は今後の励みとなり，心から御礼申し上げます。

今回の二つの研究プロジェクトは，第１回と比べて設定期間が短かったこと，人事異動，初めての研究フィールドの立ち上げの調整等々，困難な条件の中で，中間報告，報告会を経て一定の成果を挙げ，今後への継続する課題等を抽出しながらの業績となりました。関わりのありました全ての方々に感謝致します。

「保幼小連携研究プロジェクト」は，市内二つの地域を選定し，それぞれの特色ある地域の保育園(所)，幼稚園，小学校の相互理解のもとにそれぞれの立場で子どもや親のために何ができるかを考えながら研究を進め，また「子育て支援研究プロジェクト」は保育園(所)・幼稚園での子育て事業やエピソード記述を共有することを起点に今後を模索しながら研究を深めました。

本研究プロジェクトは，こどもみらい館の特色である共同機構ならではの構成員で研究が進められており，研究そのものの内容のみならず，日常の保育内容の充実も図られながらであることも特徴の一つです。

「子育て支援」は「親育ち支援」の視点は，京都市の「子どもを共に育む京都市民憲章」，「親支援プログラム～ほっこり子育てひろば～」の普及・展開にも重要な底流となっております。今後の研究を時宜に即した方向性を過たずに進められますよう，それぞれのお立場でのご意見，またご支援ご協力をこれからもよろしくお願い申し上げます。

平成２４年３月

京都市子育て支援総合センターこどもみらい館
館長　　浅　野　　明　美

目　次

第１　研究プロジェクトの発足……1

第２　各研究プロジェクトの取組とまとめ……3

【保幼小連携研究プロジェクト】

―京都市御池保育所・京都市立中京もえぎ幼稚園・京都市立御所南小学校グループ―　……4

Ⅰ　研究主題と設定理由……4

Ⅱ　研究内容と研究方法……4

Ⅲ　これまでの取組の概要……5

Ⅳ　2 年間の成果……26

Ⅴ　考察と今後の課題……26

Ⅵ　保幼小連携研究プロジェクトに参加して……28

〔参考〕研究プロジェクト報告会配布資料……30

―京都市錦林保育所・コドモのイエ幼稚園・京都市立第三錦林小学校グループ―　….36

Ⅰ　研究主題と設定理由……36

Ⅱ　研究内容と研究方法……37

Ⅲ　これまでの取組の概要……37

Ⅳ　2 年間の成果……55

Ⅴ　考察と今後の課題……56

Ⅵ　保幼小連携研究プロジェクトに参加して……57

〔参考〕研究プロジェクト報告会配布資料……60

保幼小連携研究プロジェクトへのコメント

（研究プロジェクトアドバイザー鯨岡峻先生）　……65

【子育て支援研究プロジェクト】……67

Ⅰ　研究主題と設定理由……67

Ⅱ　研究内容と研究方法……67

Ⅲ　これまでの取組の概要……68

Ⅳ　研究の成果……84

Ⅴ　考察と今後の課題……84

Ⅵ　子育て支援連携研究プロジェクトに参加して……85

〔参考〕研究プロジェクト報告会配布資料……90

子育て支援研究プロジェクトへのコメント

（研究プロジェクトアドバイザー鯨岡峻先生）　……95

第３　研究プロジェクトのまとめ……97

１　研究プロジェクト報告会の総括……98

２　研究プロジェクトの総括……99

第１　研究プロジェクトの発足

第１　研究プロジェクトの発足

こどもみらい館は，少子化，核家族化，地域のコミュニティの希薄化など子どもたちを取り巻く環境が著しく変化する中，乳幼児の子育て支援を総合的に推進するため，保育園(所)・幼稚園，私立・市立・国立の垣根を越えた「共同機構」としての取組を行う全国に類のない子育て支援の中核施設として，平成 11 年 12 月に元竹間小学校・竹間幼稚園の跡地に京都市子育て支援総合センターとして開館しました。

相談，研修，研究，情報発信の四つの機能を柱とし，また，親同士の交流，ボランティアの養成等の多彩な事業を展開する中で，家庭・地域の教育力の向上，保育士・幼稚園教諭の資質向上，乳幼児の子育て支援，更には関係機関相互のネットワークの形成に大きな役割を果たしています。

こどもみらい館が子育て支援の道標としての役割を果たすため，開館 5 周年を機に，平成 16 年度から第二創業期と位置付け，基本方針である「子育て支援の輪を地域・社会全体に広めていく」という取組として「就学前教育研究プロジェクト」「地域と結ばれた事例研究プロジェクト」「乳幼児子育て支援研究プロジェクト」を立ち上げました。

「就学前教育研究プロジェクト」においては，保育園(所)・幼稚園の保育者による共同研究が，「知り合う」「認め合う」「刺激し合う」「学び合う」ことを通して，「子ども理解」と「保育者としての資質の向上・保育の充実」に大きく寄与することを明らかにすることができました。

「乳幼児子育て支援研究プロジェクト」においては，今後の子育て支援の課題を明らかにしましたが，その中でも「子育て当事者の価値観の尊重」や「子育て当事者が子育て支援者になり得るための支援の重要性」の視点は，保育者が日々の保護者との関わりの中で常に堅持していかねばならない視点であることを確認しました。

「地域と結ばれた事例研究プロジェクト」では，小学校や地域諸団体，地域の施設等との具体的な連携事例だけでなく，年間保育計画への位置付けや連携機関との成果・課題の確認等，園(所)が今後，地域との連携を深めていくための羅針盤ともいえる視点を明らかにすることができました。

この三つのプロジェクトの 5 年間にわたる取組と研究成果を取りまとめて発表する報告会を平成 20 年 12 月に実施するとともに，平成 21 年 3 月には報告会の内容を含めた研究プロジェクト報告書も発行して研究の成果を広く発信してまいりました。

こうした研究の成果と今日的な課題を踏まえ，こどもみらい館企画推進会議及び同会議研究・研修部会で検討，協議を重ね，保育内容の更なる充実・発展や子育て支援を目指した研究事業を推進することを目的に，保育園(所)保育士・幼稚園教諭・小学校教諭が共にお互いの保育・教育を理解し合い，子どもの発達の連続性を見通した保育・教育について考察する「保育園(所)及び幼稚園並びに小学校との連携」，また，「保育園(所)・幼稚園における子育て支援」について研究を進めることとし，「共同機構」の新たな研究事業として，平成 22 年度に「保幼小連携研究プロジェクト」，「子育て支援研究プロジェクト」の二つの研究プロジェクトは発足しました。

第2　各研究プロジェクトの取組とまとめ

【保幼小連携研究プロジェクト】P.4～P.64

［目的と経過］

「保育園(所)保育士・幼稚園教諭・小学校教諭が共にお互いの保育・教育を理解し合い，子どもの育ちの連続性を見通した保育・教育について考察する」ことを目的とし，平成 22 年 5 月に発足しました。

研究は，地域で子どもの育ちを見守るという観点から，同一小学校区にある近隣の保育園(所)・幼稚園と小学校の保育士及び教諭等で行うこととし，全市で 2 グループが実施してきました。

［合同研究会］

各グループの進捗状況を報告し合い，互いの研究テーマや方法，内容などを参考に，自グループの研究内容を再考し，研究に活かすことを目的に，平成 23 年 3 月に「合同研究会」を，平成 23 年 8 月に「第 2 回合同研究会」を実施しました。

【子育て支援研究プロジェクト】P.67～P.93

［目的と経過］

「保育園(所)・幼稚園を核とした地域の子育て支援のあるべき姿について研究する」ことを目的とし，平成 23 年 1 月に発足しました。

研究は，共同機構各団体から，個人での参画を募り，地域での子育て支援を実施している園(所)だけに限定せず，現在実施していない園(所)にも参画を促し 7 名の研究メンバーが決定しました。

［中間報告会］

研究プロジェクトの立ち上げから平成 23 年 7 月までの取組内容をこどもみらい館企画推進会議研究・研修部会委員に報告し，研究の方向性を見直すことを目的とし，平成 23 年 9 月に「中間報告会」を実施しました。

【研究プロジェクトアドバイザー】

本研究プロジェクトでは，アドバイザーである中京大学教授 鯨岡 峻先生から，研究に対する指導・助言を受け，研究を進め，各研究プロジェクトについての講評をいただきました。

保幼小連携研究プロジェクトへのコメント　P.65～P.66

子育て支援研究プロジェクトへのコメント　P.94～P.95

【保幼小連携研究プロジェクト】

―京都市御池保育所・京都市立中京もえぎ幼稚園・京都市立御所南小学校グループ―

Ⅰ　研究主題と設定理由

１　研究主題

主体性を育み，つなぐために

～「知る」から「理解」へ　ともに進める連携を通して～

２　設定理由

(1)　地域の状況等

御所南小学校と中京もえぎ幼稚園は，市中心部の人口減少に伴い，中京区内の複数の小学校，幼稚園の統合により，平成７年度及び 12 年度に創立しました。また，御池保育所は，近年，この地域で都市型マンションの建設が進み，子どもの数が増加していることに対応し，教育や福祉の複合施設である京都御池創生館の一角に，公設民営保育所として平成 18 年度に誕生しました。小学校と幼稚園は，近隣にある公立の教育施設として交流活動を始めて久しいものの，各々の時間的な制約もあり，交流のめあてや事後討議の確保，互恵性のある内容の工夫等，連携に向けての課題がありました。また，これまで保育所を交えた交流の機会はありませんでした。

(2)　主題設定までの経過と理由

しかし，近年の子どもの育ちや社会の変化をみると，発達の連続する幼児や児童が通う同一地域にある施設同士としての保幼小三者が，互いの子どもの発達や課題，保育や教育のあり方や考えを知り理解を進める中で，めざす子ども像を共有し，発達や学びをつなぐという側面からそれぞれの立場で大切にすべきことを明らかにすることが不可欠です。

平成 20 年３月に実施された学習指導要領等の改訂においては，引き続き「生きる力」を育むという理念が引き継がれることとなりました。本グループでも生きる力の基盤となる「自分で考え行動する力」「友達や教師と共に，主体的に生活や遊び，学習を進める力」の育成を共に願っていることが分りました。そこで本研究では「主体性」に着目し，参観，交流等の場面やエピソードを通して幼児や児童の姿を共有しその発達を学ぶとともに，保幼小における主体性の捉え方，保育や指導のあり方の共通点や違いを探りながら三者で改めて「主体性」を見直し，それを育むための段階的な指導や援助，環境，連携のあり方を考察したいと考えました。

Ⅱ　研究内容と研究方法

１　平成 22 年度研究内容

(1)　保幼を中心として保幼小の相互理解を図る。

(2)　保幼小の交流を通して子どもの育ちを探る。

(3)　保幼での主体性の育ちを探る―エピソード検討会を通して―

２　平成 23 年度研究内容

(1)　交流保育を通して見える子どもの主体性と交流の意義について考察する。

(2)　エピソード検討会を通して，保幼小での主体性の育ちの過程を探る。

(3)　保幼で育った主体性が小学校へどのような姿でつながっているか考察する。

３　研究方法（平成 22 年度・平成 23 年度共通）

(1)　保育士，教員間交流を通して(実態，課題，めざす子ども像，研究主題等についての協議)

(2)　施設見学，保育，授業，行事の参観及び参観後の研究討議

(3)　保幼小の子どものエピソード検討会

(4)　幼児・児童の交流活動と事前打合せ・事後討議

Ⅲ　これまでの取組の概要

１　日程・内容（◎印：交流　・印：保育士，教員での研究）

(1)　平成 22 年度の取組―保幼を中心として保幼小の連携を図る―

・ 5/13(木)　第１回会合　新メンバー顔合わせ，本研究の目的，情報交換
・ 5/21(金)　御池保育所見学
・ 6/ 4(金)　中京もえぎ幼稚園見学
・ 8/ 4(水)　御池保育所見学，討議
・ 9/ 7(火)　御所南小学校授業参観，討議
・ 9/ 9(木)　第２回会合　研究テーマ，目標，方法について
・10/ 2(土)　中京もえぎ幼稚園運動会参観
・10/14(木)　保幼交流事前打合せ（10/18(月)の実施について）
・10/16(土)　御池保育所運動まつり参観
◎10/18(月)　保幼交流（京都御苑において），事後討議
・11/15(月)　11/24(水)の研究保育について事前討議
・11/24(水)　中京もえぎ幼稚園研究保育
・12 /4(土)　御池保育所造形まつり見学（～10(金)まで）
・12/13(月)　保幼小交流事前打合せ（12/20(月)の実施について）
◎12/20(月)　保幼小交流（御所南小学校において）
・12/21(火)　保幼小交流事後討議（12/20(月)の実施について）
・12/28(火)　エピソード検討会（中京もえぎ幼稚園の３，４，５歳児のエピソードから）
・ 1/12(水)　エピソード検討会（御池保育所の０，１，２，３，４，５歳児のエピソードから）
・ 1/20(木)　中京もえぎ幼稚園園内展見学（～22(土)まで）
・ 1/21(金)　第３回会合　小学校の視点を加えた「主体性」と「保幼小連携」について
・ 2/ 7(月)　第４回会合　合同研究会に向けて
・ 2/14(月)　アドバイザーからのまとめのポイント提示
・ 2/17(木)　第５回会合　合同研究会に向けて
・ 3/ 3(木)　合同研究会

・ 3/24(木)　第６回会合　平成 23 年度の年間計画について

(2)　平成 23 年度の取組―保幼の連携を基盤に小学校が参画して研究主題に迫る―

・ 4/12(火)　保幼交流事前打合せ（4/28(木)の実施について）
◎ 4/28(木)　保幼交流（御池保育所が中京もえぎ幼稚園へ），事後討議
・ 5/10(火)　御所南小学校の授業参観と教員・保育士間の討議
・ 5/16(月)　保幼交流事前打合せ（5/20(金)と 5/24(火)実施について）
◎ 5/20(金)　保幼交流（中京もえぎ幼稚園ゆり組が御池保育所へ）
◎ 5/24(火)　保幼交流（中京もえぎ幼稚園すみれ組が御池保育所へ）
・ 5/25(水)　保幼交流事後討議（5/20(金)と 5/24(火)実施について）
・ 6/30(木)　第７回会合　第２回合同研究会に向けて
・ 7/ 4(月)　保幼交流事前打合せ（7/11(月)実施について）
◎ 7/11(月)　保幼交流（中京もえぎ幼稚園において）
・ 7/13(水)　保幼交流事後討議（7/11(月)実施について）
・ 8/ 1(月)　第２回合同研究会
・ 8/17(水)　第２回合同研究会後の研究の再考と保幼 3,4,5 歳児のエピソード検討会
・ 8/31(水)　第８回会合　エピソードから主体性を捉える
・ 9/ 8(木)　小学校のエピソード検討会と三者が考える主体性について
・ 9/12(月)　第９回会合　主体性の捉えについて
・ 9/21(水)　第 10 回会合　主体性の捉えについて
・10/26(水)　御所南小学校の授業参観と抽出児についてのエピソード
・11/ 1(火)　小学校の抽出児のエピソード検討会
・11/10(木)　第 11 回会合　報告会に向けて
・11/14(月)　第 12 回会合　報告会に向けて
・11/21(月)　保幼小交流事前打合せ（11/25(金)実施について）
◎11/25(金)　保幼小交流（京都御苑において），事後討議
・12/ 1(木)　保幼小交流のエピソード検討会と報告会資料の検討
・12/15(木)　保幼小交流事前打合せ（12/19(月)実施について）
◎12/19(月)　保幼小交流「秋のお店屋さん」（保幼の 4，5 歳児が御所南小学校へ）
事後討議と今年度の反省と次年度への課題

２　取組内容

(1)　保幼を中心として保幼小の相互理解を図る

互いの保育や授業の参観・施設の見学を通して，互いの共通点や相違点に気付き，それぞれの保育・教育の中で主体性を大事にしたいという思いを持って取り組んでいることを知りました。

・　保幼の保育参観，施設見学等を通して，幼稚園は保育所の保育を見て，生活環境構成の

丁寧さに気付いたり，遊びの場がコーナーではっきりと決まっていることや，子育て支援が充実していることなどに違いを感じました。保育所は，幼稚園の子どもたちが自分のしたいことをしたい場所でしていると感じたり，保護者と共に野菜を育てたりすることなどに驚きを感じていました。それぞれに違うところがあり，自園の保育を振り返り，保育内容を向上したいとの思いにもつながりました。また，子どもたちの主体性や主体的に遊び込む姿を大切にしていることは共通であることを理解しました。

・　幼稚園は，今回初めて小学校の授業を参観しました。オープンスペースの教室でも落ち着いて授業していることや，子どもたちの中に司会者がおり，子ども同士で話し合いを進めていく授業形態に驚きを感じていました。

⑵　保幼小の交流を通して子どもの育ちを探る

交流を通して，子どもたちの現状や育ちについて話し合い，保育者の子どもの姿の捉え方の大切さや，小学校の教員に保幼での子どもの成長を伝えることの大切さに気付きました。

保幼の交流

日　時　　平成 22 年 10 月 18 日（月）9 時 15 分～11 時 15 分
場　所　　京都御苑
内　容　　一緒に遊ぼう
対象児　　保育所の 5 歳児と幼稚園の 5 歳児
（事後討議から）

主体性を保育者がどのように捉え，関わるのかが大切であると分かりました。

・　10 人ほどのグループになって，グループごとに色を決めてグループ意識を持ったうえで，好きな遊びを楽しみました。色を決めるときには，「じゃんけんにしよう」「にらめっこは？」など意見を出し合い，それぞれが歩み寄っていく姿が見られ，自分たちなりに折り合いを付け，工夫していました。
・　初めは不安だった保育所の子どもが保育者に「縄跳び一緒にしたら？」と誘われたことで，幼稚園の子どもと意気投合しました。自分の好きな遊びを楽しむうちに安心感を持ち，自分の思いが出せるようになり，仲良くなっていく，これも主体性ではないかと思います。主体的な姿を教師がどのように捉えるかが大切です。

保幼小の交流

日　時　　平成 22 年 12 月 20 日（月）10 時 15 分～11 時 30 分
場　所　　御所南小学校体育館
内　容　　秋のお店屋さん
対象児　　保育所 4・5 歳児，幼稚園 4・5 歳児，小学校 1 年生 6 クラス
（事後討議から）

互恵性のある交流について考えることや，保幼が幼児期の発達をどのように伸ばしてきたのかを小学校の教員が知り，それをいかに小学校が引き継ぎ伸ばしていくのかの話し合いが重要だと気付きました。

- 半数の１年生はお店の担当をし，半数は園児と一緒に行動しました。園児とともに行動することで１年生はどう話したら分かりやすいか考えるなどしていました。
- 園児にとって小学校の様子を知る意味で保幼小の交流はとても大切です。しかし，それだけでなく，幼稚園教育要領，保育所保育指針が変わり学びの連続性を考えていくことが言われています。交流をどのように活かしていくのか考えたいと思います。１年生と５歳児は互いにその姿を見て刺激を受けたり,模範になろうと意識したりしていましたが,イベント的に終わるのではなく,互いが学べる交流になるにはどうしたらよいのかが課題です。
- 小学校としては，保幼小交流の事後討議で，保育所・幼稚園での子どもたちの育ちの重要性に気付きました。個々の子どもについては入学前の連絡会で引継ぎをしていましたが，保幼として幼児期の発達をどのように伸ばしてきたのかを知り，それをいかに小学校が引き継ぎ伸ばしていくのかの話し合いが重要だと感じました。
- 保幼小連携については，行事が増えることだけに目がいってしまいがちです。小学校の先生方に保幼小連携の重要性を感じてもらうためには，年度当初の話し合いが大切だと感じました。小学校側には「1 年生は一からはじめる」というような考えもあるので，保幼で育ててきたものを提示して話し合いを積み重ねることがよいと思います。

(3)　保幼での主体性の育ちを探る―エピソード検討会を通して―

保幼のエピソードから，保幼が考える主体性について話し合い，表にまとめました。

＜幼稚園からのエピソード＞

たこ焼き屋さんごっこ　５歳児

＜主体性の捉え＞

主体的に行動するには，まず園生活において安心・安定して生活していることが大切である。安心・安定した生活の中から，周りに目を向けたり，興味を持って見たり，やってみたい・面白そうだなど心を動かしていくようになる。経験が少ない子どもたちは，経験することで，その楽しさを知っていくこともある。そのため，教師から環境を示したり誘いかけたりして導く援助も必要であると考える。自分の気持ちが動き，その思いから実際に行動に移り，思いが実現していく喜びや経験の積み重なりが，自分から周りのものや人等の環境に関わっていく力につながっていくと考える。そして，自分のイメージや考えを伝えたり，友達の思いや言動を認めたりしながら，主体的に共に遊びを広げていく楽しさを感じていくと考える。

＜背景＞

年中児の思いに保育者が共感したことから，刺激を受け，10 月下旬に自分たちでたこ焼き屋の遊びが始まった。自分で材料を選んで看板を作ったり，生活経験からタイムセールをしたりして自分の考えや友達の考えをうまく折り合いを付けながら遊びを進めていた。その後かなり長い間，遊びが続い

たエピソードである。

＜エピソード＞

10 月初めから始まったたこ焼き屋の遊びだが，たこ焼き屋の子どもたちは，お店が自分たちの拠点となり登園するとお店に集まっていた。「タイムセールには音楽が必要やねん」とＣ児は，保育室のカセットデッキをお店に持っていき，音楽を鳴らしていた。たこ焼き屋はお店で待っているだけではお客さんが来てくれず，自分から売り込みにも出掛けていくことを考えた。Ｆ児，Ｇ児は，箱にひもを付け，必要な物(たこ焼き・たこ焼きを入れる箱・お金を入れたレジ)をつくり箱にのせて「たこ焼きいりませんか～」と出掛けていた。

たこ焼き屋という思いは継続して持っているが，しばらくすると，たこ焼きが売れなくなってきた。そこで，11 月 19 日(金)にクラスの子どもたちと相談することになった。クラスの子どもから「大きな声で言うたら？」「新しいメニュー考えたら？」「子ども用とかつくったら？」などの案が出たが，どれもすでにたこ焼き屋の子どもたちが考えてしてきたことだった。

クラスの子ども「たんぽぽ組の前とかに紙，貼ったら？だって，2 階にしか(たこ焼き屋の)紙貼ってないやん」Ｆ「あ～。地図とか書いたらいいんや」Ｃ「チラシ作るってことか！」と話し，その後，たこ焼き屋の子どもたちはチラシを作ろうと，Ｆ児，Ｇ児は園内の地図を作り始め，Ｆ「こっち書いとくからそっちお願い！」とＣ児にもお願いし，同じ一つのめあてにむかい役割を分担して作る姿も見られた。

12 月になっても遊びは続き，自分たちで注文を聞きに行くというスタイルを考え出した。たこ焼き屋の遊びの場に行くとＣ児がいない。保育者「今日はＣ君はいないの？」Ｂ「今，注文聞きに行ってはる」と答えた。そこへＣ児がメモとペンをもち，戻ってきた。Ｃ「たこあり 2 個！」Ｆ「はい！」とＣ児から注文を聞いてたこ焼きを用意していた。お店にいるだけでは，売れなくなったので，Ｃ児は「たこ焼きいる？」「何個いる？」と友達や保育者，一人ひとりに声をかけ，名前と順番を書いた券を渡し，自分のメモにも注文をした人の名前や順番を書いていた。

＜考察＞

子ども自身が保育室のどこに何があるかを知っていて，自由に使え，自分が考えたことを自分の力で実現していけるような環境が，主体性の育ちにつながっていくのではないかと思う。

たこ焼き屋という共通のイメージがあり，自分たちで始めた遊びだから，自分たちで遊びをどんどん創っていける楽しさがあったのではないか。たこ焼き屋を繁盛させたいという共通の思いをもって，友達と考えや思いを出し合い，遊びを進めていくことで，一人では思いつかない考えや刺激・アイデア等が生まれ，より楽しいものとなるのだろう。また，その楽しさを仲間と伝え合い共有・共感することでその楽しさは増すのではないかと思う。

たこ焼き屋ができてから１ヵ月以上が経つ。「お弁当食べたら，またやろう」「また後で続きしよう」「明日もやろう」「先，たこ焼き屋いってるし」などという声がよく聞かれていた。“楽しい”という経験が「またやりたい」「もっとやりたい」「続きがやりたい」などという気持ちを引き出していくのだと思う。また，そこには友達との仲間関係が大切であり，認め合う関係を築いていくことも主体性に大きなつながりがあると感じた。

年中組の時にお店ごっこの遊びの経験があったり，家庭での豊かな経験をしていたりすることがこ

の遊びにつながった。一人ひとりの子どもが，これまでに経験してため込んだことが遊びに発揮されていく。子どもたちは，これまでの経験から自分たちで実現していく力を持っている。保育者は，遊びの様子を見守り必要な時にタイミングを逃さず援助していくことが大切である。

自分が“やってみよう，やりたい”と思ったことが一つひとつ実現していく喜びや，友達と工夫し合い認め合って実現していく喜びが，次はこうしてみよう，こうしたいという意欲につながっていくことを感じた。この経験の積み重ねが，自分から周りの環境(もの・人等)に進んで関わっていく力となり，主体性につながっていくのではないかと考える。教師は，子どものやろうとしていることが実現していけるような援助や環境構成をしていくことが大事であると思う。

＜保育所からのエピソード＞

「お手伝いのまねっこを楽しむ子どもたち」　１歳児

＜背景＞

甘える子どもが多く，自分だけを見てほしいという思いを強く出している。物の取り合い，場所の取り合い，正義感から保育士の代わりに他児を怒る等，1 歳児クラス特有のトラブルやけんかがよく起こっている。

＜エピソード＞

11 月の終わり頃，お部屋で遊んでいた時に部屋に置いてある観葉植物が気になったＡ児が鉢から植物を引き抜いてしまった。鉢の周りには土が散乱し周りにいた子が鉢の側に寄ってきていた。保育士の 1 人が雑巾を持ってきて土を集めながら床を拭き始めると，Ｂ児，Ｃ児の 2 人がティッシュケースからティッシュを取って来て保育士と一緒にティッシュで床を拭き始めた。するとそれを見ていた他の子もティッシュを持ってきて床を拭き始めた。保育士が「ありがとう。きれいになったわ。もういいよ」と声をかけると満足そうに笑ってティッシュを捨てに行く子，まだまだという様子で床を拭き続けようとする子がいて，子どもたちは真剣な様子だった。

その翌日，朝一番で保育士 1 人と 5 人の子どもたちが園庭に遊びに出た。園庭では主任保育士が園庭内にたくさん落ちていた葉っぱを集めて落ち葉の掃除をしていた。大きなゴミ箱を横に置いてほうきを持って葉っぱを集めているのを見た 5 人の子どもたちは全員一斉に主任の方に走り出し，主任の周りに落ちているたくさんの落ち葉を手で一つひとつ拾っては大きなゴミ箱の中に入れ始めた。大人は何も声をかけていないのに，自分たちから動きだし(“楽しそう”，“面白そう”と思ったのか)拾うことに一生懸命になっていた。

＜考察＞

大人が何も言葉をかけなくても，子どもたちが自分から動いていく姿を見て本当に頼もしいと思った。まだまだ「手伝う，助けたい」という気持ちで動いたわけではなく「大人の真似をすることが楽しい」「何だか面白そう」という気持ちから動いている子がほとんどだと思う。しかし，子どもの「やりたい」「何だか楽しい」「面白い」という意欲は，この先，「こんなことやってみたい」「こうしたらどうなのか」など，考える力や主体性につながっていくのではないかと感じている。

子どもたちの意欲をこれからも大切にするためには，保育者は子どもたちとどう関わり，どのような言葉をかけていけばいいのかを考えなければならない。また，子どもたちが自らの意欲をどう育てていくのか，この純粋な気持ちをこの先どうつなげていくのか，これらのことをしっかりと考えて保育をしていきたい。

（エピソード検討会から）

愛着関係が安心・安定の基であり，そこから，自分の思いを出して遊んだり生活したりしていくということを確かめ合いました。

- 幼稚園では，子どもたちがしたい遊びを継続していくためには間接的に，環境を整えたり，教師が子どもの思いに寄り添ったりするなど，子どもたちがしたいことが実現できるように援助をしています。
- 安心・安定していないと自分の思いを出して遊ぶことができないと思います。また，自分を認めてくれる友達の存在も大切ではないでしょうか。
- 愛着関係が基本になり，落ち葉を拾うこと自体が楽しかったり，大人の真似をすることが楽しかったりして，自分で行動していくのだと思いました。
- 保幼が考える主体性の捉えについて

こうしたエピソード検討会の中から保育所，幼稚園の考える主体性について話し合い，それぞれの考える主体性の芽生えに関することや，主体性の捉えを表にまとめました。

保育所	幼稚園
・ 好奇心が原点 ・ 安心できる関係作りが大切 ・ 見本になる大人を真似たいという気持ちや遊びへの意欲から自発的に動く。	・ 自分なりにめあてを持って行動すること ・ 友達と協力して一つのものに向かって遊ぶ。 ・ 安心，安定が基盤 ・ 認め合える仲間関係 ・ 子どもの思いが実現できる環境，援助 ・ やってみたいという気持ちを持つ。

(4)　次年度への課題

- 子ども同士の交流は，指導案を書き，めあてを明確にする等して目的を持った交流としましょう。
- 保幼で育ててきた主体性をどのように小学校に引き継ぐのかを探りましょう。
- 今年度，担当の小学校教諭には保幼小で話し合う大切さを気付いてもらえました。組織的に保幼小連携を進めていくためには，どうするのかが課題です。
- 次年度の課題は小学校との相互理解を深めることと，１年生の担任の先生に保幼の保育の様子を見ていただき，保幼で育てていることを知ってもらうことです。

(5)　交流保育を通して見える主体性と交流の意義

昨年の反省から，事前事後の話し合いとエピソード検討会を通して，子どもたちの姿から主体性と交流の意義について再考しました。

保幼の交流

日　時　　平成 23 年 5 月 20 日(金)　5 月 24 日（火）10 時 00 分～11 時 30 分

場　所　　御池保育所

内　容　　御池保育所に遊びに行こう

対象児　　平成 23 年 5 月 20 日（金）幼稚園の 5 歳児（ゆり組）と保育所の 5 歳児

　　平成 23 年 5 月 24 日（火）幼稚園の 5 歳児（すみれ組）と保育所の 5 歳児

（交流事前打合せから）

交流のねらいや具体的な配慮について話し合い，指導案を共通で作り，保幼の保育者がねらいを意識し，同じ思いで子どもたちに関われるようにしました。

・　ねらいについては，幼稚園は，保育所はどんなところなのか，保育所の子どもたちや先生を知って親しみを感じてほしいということです。保育所は，幼稚園の友達に保育所のことを自信を持って伝えることをねらいとします。

・　主体性については，まだ 2 回目の交流なので主体性の発揮までは行かないのではないかと思います。4 月の交流で作ったグループでの関わりができるようにしましょう。

平成 23 年度保育園（所）・幼稚園交流保育指導案（日案）

<table>
<tr><td>対象児</td><td>5 歳児</td><td>ねらい</td><td colspan="3">幼稚園や保育所の友達と遊びを通して関わりを深めていく。
幼稚園→保育所の生活や遊びを知る。
保育所→幼稚園の友達に保育所のことを自信を持って伝える。</td></tr>
<tr><td>日時</td><td colspan="5">5 月 20 日（金）　5 月 24 日（火）</td></tr>
<tr><td>場所</td><td colspan="5">御池保育所</td></tr>
<tr><td>引率</td><td colspan="5">幼稚園：教頭　担任　こどもみらい館主任主事</td></tr>
<tr><td>準備物</td><td colspan="5">幼稚園：園児名簿，救急用品，着替え，グループの色のシール
(幼稚園児)水筒，ハンカチ，ティシュ　　保育所：特になし</td></tr>
<tr><td>展開</td><td>保育士の援助</td><td colspan="2">予想される園児の活動</td><td colspan="2">教師の援助</td></tr>
<tr><td></td><td>・幼稚園の友達と遊ぶことを楽しみにし，期待を膨らませる。
・幼稚園の友達を迎える気持ちを高めていく。
・幼稚園の人に，普段している遊びや保育所内の場所等を教えたり，遊びに誘いかけたりして，一人ひとりが生き生きと遊び自信が持てるように関わっていく。
・幼稚園の子どもたちが安心して過ごせるよう保育士も一緒に遊び，誘いかけていく。
・楽しかった思いを受け止めながら，また一緒に遊べることへの期待を膨らませられるようにする。</td><td>10:00

11:15

11:30</td><td>・もえぎ幼稚園児が御池保育所に着く。
・ホールに集まる。
・挨拶をする。
・グループごとに仲良し遊びをする。
・グループごとに保育所探検をする。
・やりたい遊びを楽しむ。
知育ブロック，アイロンビーズ，折り紙，小型積み木等
ままごと
園庭遊び等

・ホールに集まる。
・楽しかったことを話し合う。
・さようならをする</td><td colspan="2">・事前に御池保育所の写真を見せたり，一緒に遊んだことを振り返ることで期待を膨らませる。
・御池保育所でどんなことをしたいか話す機会を設ける。
・御池保育所の友達や先生に出会えた喜びを共感する。
・初めての保育所の様子に興味を持って見たり，友達の話を聞いたりしている姿を受け止め返す。
・好きな遊びを見つけ保育所の友達と一緒に関わりながら遊ぶ姿を見守る。
・不安を感じている子どもの側にいて一緒に遊んだり，保育所の友達に思いが伝えられるようしたりして橋渡しをする。
・楽しかったことや面白かったことが伝えられるように，必要に応じて支えていく。
・また一緒に遊びたいと思う気持ちを受け止め，次回を楽しみにしながらさよならができるように声をかける。</td></tr>
</table>

＜保幼の交流後の保育所からのエピソード＞

保幼交流―「早すぎた…」　５歳児

＜エピソードを取りあげた理由＞

Ａ児は，まだまだ自信が持てず恥ずかしさはあるものの，保育所の友達以外の友達と関わり合うことで，誰かに何かを教えたいという思いを持ち，相手のことを考え意識し始める姿が見えてきた。その姿が主体性につながっていくのではないかと感じた。

＜背景＞

Ａ児は，憧れだったひまわり組(年長)になり年下の子に優しく接したり，リードしようとしたりしている。友達関係も広がり，自分の思いを出しながら遊ぶ姿がある。4 月の幼稚園の友達との交流後「楽しかった～！」「次，保育園に来てくれた時スピード（トランプ）しようかなぁ」と，次に会えることに期待を持ち，楽しみにしていた。そして，5 月 20 日，24 日に幼稚園の子どもたちが保育所に来ることになり，「保育園のことを教えてあげたい，サッカーを一緒にしたい」と楽しみにしていた。

＜エピソード＞

5 月 20 日に幼稚園のゆり組の友達が保育所に来た。ホールで集まり，到着を待っていた時，子どもたちの表情や会話から楽しみにしながらも少し緊張している様子がうかがえた。ゆり組の友達の姿が見えると同じグループのＥ児，Ｆ児とギュッと手をつなぎ隅の方へ座るＡ児。嬉しい気持ちや遊びたい思いはあるものの恥ずかしかったのだろう。

4 月の交流で決めた 10 名ほどのグループで園内を案内することになりＡ児はＥ児，Ｆ児と一緒に案内していた。恥ずかしい気持ちのあまり，嬉しそうにしながらも早口で説明していた。後ろのことも気になりながらも自分たちのペースで足早にどんどん進んでいって，グループはバラバラになっていった。保育所のことを教えようとするＡ児の気持ちを感じ取ることができたが，気持ちが先走り周りを見ることなく進んでいったのではと感じた。

その後，Ａ児は園庭に出てＥ児，Ｆ児達とサッカーを始めた。途中，幼稚園のＧ児も入り関わり合う姿が見られた。ゆり組の友達が帰るときには「また来てね～!!」と門の所で手を振って見送り「楽しかった～!!」と次に会えることを楽しみにする姿が見られていた。

次に会えることを期待する気持ちを大切にしたいという思いと，Ａ児のグループだけでなく案内の時に他にもバラバラになっているグループもあったので，相手のことを意識できるように子どもたちと考えていけたらと思い，後日，働きかけてみた。

「案内してみてどうやった？」と聞いてみると，Ａ「案内が早すぎた…。」Ｈ「バラバラになった」Ｂ「うまくいかなかった」とそれぞれの思いを話しだした。1 回目の交流後，乳児の保育士から「Ｃちゃん上手に説明してくれていたよ」と聞いていたことを思い出し，ヒントになればと思い「Ｃちゃんはどうやって案内したの？」と聞いてみた。するとＣ児は立って，「ここは赤ちゃんの部屋です。静かにしてください」と手をつけて実際やった時のことを再現し見せた。その様子を見てＡ「ゆっくり伝えてあげる」Ｉ「次の所行く時は“～グループさんこっちですよ～！” って言ったら？」Ｊ「手を

あげるようにしたら？」など，どんどん意見が出てきた。どうしたら相手に伝わるだろう？とみんなで意見を出し合い考えていく姿を嬉しく思った。

そんなやり取りがあり 24 日の幼稚園のすみれ組との交流の日を迎えた。この日も恥ずかしがるA児の姿は変わらなかったが「ここはかぜ組です」「ここは絵本コーナーで絵本がいっぱいあります」と手を挙げながらその部屋の前で止まり説明していた。また，同じグループの子がいるかを確認し，意識する姿もあり，幼稚園の友達とバラバラになることなく，よく話を聞いて興味を持っていろいろな部屋を見ている様子が見えた。

その後，自分たちのやりたい遊びを決め園庭に出たA児は，こおり鬼を楽しんでいた。どちらも知っている共通の遊びということもあり自然と保育所，幼稚園の子が交じり合い楽しむ姿が見られた。また，幼稚園のK児やN児がフープを上手に何回も回す姿を見て，「すご～い!!」と相手を認め，Ｉ児やC児は「やりたい！」とチャレンジする姿が見られていた。K児やN児も嬉しそうで得意げに見せていた。

＜考察＞

今回の交流を通して誰かに何かをしたいという思いや，どうしたら相手に伝わるのかA児なりに考えやってみようとする姿など相手のことを考え周りを意識する姿が見えた。相手の気持ちを考え行動することが主体性へとつながっていくのではないだろうか。

１回目の交流を終え，“案内がうまくできなかった”という思いを共感し合いどうしたら伝わるだろう？と考えたことで，A児を含め他の子どもたちの姿にも変化が見えたのだと思う。

保育所や自分の知っていることを教えることでA児にとって自信になったのではと感じる。いろいろな力を持っているものの自信がなく恥ずかしさがあり，十分に力を発揮できていないところもある。今のA児の姿を認め自信につながっていくよう引き続き見守っていく一方で，幼稚園や小学校との交流を通して今後どのような姿や気持ちの変化が見えていくのか見守っていきたいと思う。

また，遊びの中で「フープ，めっちゃ上手～」「走りが早くてすぐ捕まっちゃた～」など，相手を認める姿が見られていた。交流をすることでいろいろな角度から子どもたちの姿を見ることができ，園とは違う一面に気づくことができた。

１回目の交流の子どもたちの姿から 2 回目は“交わり”を課題に遊びを明確にすることや共通の遊びできっかけを作る等，工夫することで自然と関わり合う姿も見え始めた。保育者のきっかけ作りの大切さを改めて感じた。

（事後討議とエピソード検討会から）

事前の打合せをし，保育者が交流のめあてを意識して子どもたちと関わったことで，子どもたちもめあてを持って交流できました。また，相手がより安心して楽しめるように工夫するなど，園の子どもたちとの関わりとは違う新たな姿が見られました。そのことが子どもたちの主体性にもつながっていくと思います。

・　お互いに事前に子どもたちと交流について話をしていたことで，一人ひとりがめあてを持って交流に臨んだように思います。

・　幼稚園との 2 回の交流を通して，幼稚園の友達に保育所のことを教えたいという思いを持ち相手のことを意識し始める姿が見えてきました。この姿が主体性につながるのではないかと思

います。

保幼小の交流

日　時　　平成 23 年 11 月 25 日（金）10 時 00 分～11 時 30 分

場　所　　京都御苑

内　容　　あきとなかよし

対象児　　保育所５歳児，幼稚園５歳児，小学校１年生６クラス

＜保幼小の交流後の保育所からのエピソード＞

保幼小交流―御苑「あきとなかよし」　５歳児

＜背景＞

幼稚園の友達とは夏の交流以来，会える機会がなかった。前日，幼稚園の友達と御苑に行くという話を聞いてA児は「G君に会えるんや!!」ととても楽しみにしていた。同じ場所には，小学校の１年生も生活科の授業で，秋を見つけにくることになっており，小学生とは偶然に出会うことにしていた。小学校にも昨年の卒園児がおり，知り合いがいることで，安心して同じ場所で関わり合いながら遊ぶことができたエピソードである。

＜エピソード＞

御苑に行く準備もいつもより手際よく済ませ「G君，いるかなあ？」と照れながらニコニコする姿があり，その表情から久しぶりに会える期待で胸がいっぱいなのが伝わってきた。

幼稚園の友達より５分程早く到着したので期待が膨らむように「もえぎ幼稚園には誰がいたっけ？」と子どもたちに尋ねるとA児とB児が一番に「G君!!」と言い，仲良しになった友達がいるよと誇らしげな表情だった。他の皆も次々に「D君」「E君」と声が上がっていた。幼稚園の友達の姿を見つけると，一気に表情が明るくなり，「おーい，G君。」と照れながらも元気に名前を呼んで再会を喜んでいた。

グループごとに集まり，手をつないで目的地の「母と子の森」に行くことになり，A児のグループは自分たちで幼稚園の友達と手をつなごうと考え，だれがG児と手をつなぐのかでA児とB児は“どちらにしようかな”で決めている姿があった。A児は負けてしまい残念そうだったがB児とG児が手をつないだすぐ後ろに並び，母と子の森に向かった。

会話はなかったが，A児はG児の方を恥ずかしそうな顔でチラチラ見ていた。“きっと話しかけたいが恥ずかしい気持ちの方が大きいのだろうな”と感じた。目的地に近づいてきた頃，「なあ，ＤＳ持ってる?」とG児が話しかけてきた。「持ってないけど知ってる」とB児，「持ってないよ」とA児，そこからゲームの話になり３人で少しずつ話が弾み，G児が松葉を拾ってA児の頬にチクッとしたり，じゃれ合って遊ぶ姿見られ徐々に距離が近づいて来ているようだった。

そして，小学生の姿が見えてくると，「あっ，Ｆ君がいる。」と卒園児を見つけて喜ぶA児，G児も幼稚園の卒園児を見つけて喜んでいた。いつもと違う場所に興味津々のA児とG児だった。卒園児のH児を見つけ「あっ，H君や!」と久しぶりの再会を喜び，追いかけっこをしたり，トンネルの中をくぐりにいったり，卒園児との関わりを楽しんでいた。

＜考察＞

目的地の「母と子の森」に近づくにつれ子どもたちの距離が縮まっていたようなので，グループごとに遊ぶ等の交流の持ち方を考えても良かったと反省する。交流を始めたころは一緒に遊びたくてもなかなかうまく声がかけられず，保育所の友達と遊ぶ姿が多かったが，今回は自ら「G君」と声をかけたり手をつなぎに行ったり積極的に関わろうとするA児の姿が見られた。そう思うと大きな成長であり，自信があるからこそ他の友達とどんどん関わる姿が増えてきたのではと感じる。保幼で交流を重ねてきたからこその姿だと思う。また，自園では，年長になりリーダーとしてみんなをまとめたり，サッカーや組体操，竹馬等，皆で協力して作り上げてきたことや自ら頑張って乗り越えられたことなど，一つひとつがA児の自信へとつながったように思う。

その後，1年生に出会えたことで嬉しさが増し，1年生への憧れの気持ちもより一層強まった。また，様々なことに興味関心を持てるよいきっかけになり，異年齢で過ごすことの大切さや人とつながる楽しさを子どもたちは感じ取ったのではないだろうか。A児が恥ずかしいながらもG児と話をしたり，卒園児の1年生と久しぶりの再会を喜んだりしているように，就学前にこのような関わりがあることで就学への期待もより一層強まり，そこから，友達同士の関わりが広がっていくと考える。

（事後の討議とエピソード検討会から）

保幼小の交流から，知っている子どもがいることで安心し，自分を発揮できると思いました。1年生への憧れや親しみも感じていました。このような機会を持つことで，子どもの人間関係や経験の広がりを感じることができました。

- ４月から同じグループでつながるようにしてきたことで，グループの友達の顔と名前が分かり昨年よりも親しみを感じていました。
- １年生に御苑の自然（松ぼっくりから生えたきのこ，いい香りの桂の葉など）をいろいろ教えてもらって，御苑への思いも１年生への思いも広がったように思います。
- １年生は，もっと幼稚園，保育所の子どもたちに秋の自然について知らせたいという思いを持ちました。この思いがつながって，生活科の秋のお店屋さんになっていくと子どもたちの思いと学習がつながる，すばらしいことだと思います。
- 交流を重ねることで知っている友達や先生が増え，安心感を持って自分を発揮していけるようになっていました。小学校への就学を意識するようになって来た時期に知っている小学生や同一小学校区の同年代の子どもがいることは，大きな安心感につながると思います。

保幼小の交流

日　時　　平成23年12月19日（月）　9時20分～11時30分

場　所　　御所南小学校体育館

内　容　　あきとなかよし　ごしょのもり・学校探検

対象児　　保育所４・５歳児，幼稚園４・５歳児，小学校１年生６クラス

（事後討議から）

保幼小交流では，保幼の子どもにとっては，1年生はあこがれたり，モデルとなったり，また優しい頼れる年長者となりました。1年生にとっては，交流で保幼の子どもたちと一緒に遊んだり，時には教えたりして，年長者であることや次年度，自分たちが進級することへの自覚を持つなど心の育ちにつながったと思いました。

・　１年生が保幼の子どもたちの思いに添って「これ，面白いよ」「どこに行きたい？」と声をかけていました。保幼の子どもたちも安心して遊べました。
・　５歳児は昨年のことを覚えていたのか「歌を一緒に歌いたかった」と言っていました。昨年４歳児のときに参加したことも，今日の安心につながっていると思います。御苑で出会っているので，「この前拾ってた」と今日のどんぐりや葉が御苑でのことと結びついていました。
・　今年度の生活科は自分の感覚や楽しかった思いを伝えようというお店屋さんでした。また，小さい人にはどう接したらいいのかは，子どもたちと一緒に考えましたが，「トイレ大丈夫か？」等具体的に言葉をかけるようなことが子どもたちからでてきました。事前に一緒に組む幼稚園児，保育園児を伝えていたことでより意欲的でした。
・　年々，保幼小の交流が子どもたちにとって楽しいものになっています。小学校の先生が保幼の子どもたちの発達を理解し，交流を考えていることも大きいと思います。

(6)　保幼小での主体性の育ちの過程　―エピソード検討会を通して―

「子どもの内面を探ることで交流の意義が見えるのではないか」や「“自ら考えて行動する”とは具体的にどういう姿なのか」等について，エピソードを通して探ってはどうかという第２回合同研究会でのアドバイスを受け，平成 23 年度のエピソード検討会から具体的に交流の意義や主体性の捉えと，主体性の育つ過程を探りました。

＜幼稚園からのエピソード＞

みんなで遊ぶ　４歳児

＜主体性について＞

４歳児の今は，子どもたちが友達とつながっていく時期と捉えている。この時期の主体的な姿とは，子どもたちがその友達関係の中で自分を少しずつ発揮し，思いを出し合いながら，時には思いをぶつけ合いながら一緒にいきいきと遊ぶ姿だと思う。子どもたちが興味や関心を持った遊びを十分に楽しむ中で主体性は育っていくと考える。そのためには，自分たちで自由に使える場と物が大切になる。そして，教師が，子どもたちの思いを認めて一緒に遊ぶことや友達の思いに気付いていけるような言葉かけをしていくことが必要になる。

＜背景＞

子どもたちは担任と初めての出会いで新年度が始まった。前年度のクラスの友達と遊ぶことが多かったので，何か一つの遊びをすることで友達同士の関わりも広がり，深まっていってほしいと願った。

園庭で何か夢中になって遊べる環境はないかと思ったときに，ほとんど使っていない小川が目に留まった。近くにある井戸水ポンプの使い方を子どもたちに知らせると，瞬く間に自分たちで使い始め，遊具になった。この場が水遊びの場になるように，今までも園庭に置いてあった雨どいを井戸水の近くに置いたり買い足したり，土のうで水をせき止めるようにしたり，うんていの位置を少し動かして水遊びしやすいようにしたり，環境を少しずつ変えていった。

４月から毎日のように井戸水で遊んでいるが，決まった人がしている遊びでまだ遊んだことのない人もいる。したことのない人も遊んでほしいと願っていたときのエピソードである。

＜エピソード＞

弁当を食べ終わった人から裸足になってパンツになり井戸へ向かった。

突然C児が大声で「レスキュー！！」と言いながらシャベルで小川の水をかき出した。なぜ急に？と思ったが，C児は消防が大好きなので，水を消防車の消火に見立てたのだろう，ということが徐々に分かってきた。それを見て，同じようにC児もL児も「レスキュー！レスキュー！」と何度も何度も水をかき出し始めた。D児，E児も「レスキュー！」と叫びながら，辺り構わず自分たちにもかかるような勢いで水をかき出した。するとその水が小川近くの園庭にたまって池のようになり，さらに水かさが増えて，そこがあふれて川のようになっていった。

L「うわ～！どろどろになってきた！」I「海みたいやなぁ～！」B「これが流れていって，海につながるんちゃうか～！」と，大喜びで小川のすぐ横にできた水たまりに裸足でびちゃびちゃと入る子どもたち。とても気持ちよさそうだったので，保育者も一緒に入ってぬるぬるの感触を楽しんだ。C「先生，こっちは温泉みたいやで。あったかいなぁ～。あっち（小川）は冷たいで」保育者「ほんまやなぁ。全然違うな」

水はどんどん流れていき，ブランコの前を通り過ぎて，門のあたりにある溝へと流れていった。その水をより流すように，シャベルを使って水を下流へと流していった。その途中でB児がブランコの前のあたりで土を掘り始めた。水で柔らかくなっているので，どんどん掘れる。穴の中は泥水がもやもやとしていて，見えにくくなっている。「落とし穴みたいや！中が見えへ～ん！」「ほんまや～！」気がつけば，さっきまで遠巻きで見ていたり，うんていをしていたN児とO児も，裸足になって笑顔で穴の中にちょんと足を入れていた。自分で穴の中に入って，「落ちたぁ～！」と喜んでいる子もいる。

しばらく楽しんだあと，B児が神妙な顔をして「この穴にはワニがいるねん」と言った。「そうや，ワニがおるねんで」周りの子どもたちもB児の言葉に同調する。そんなことからこの穴の名前は「わにあな」となった。L児「でもこの穴さ，小さい組の子が落ちたら危ないんちゃう？」普段から小さい子に優しいL児がそう言った。それを横で聞いていたF児「タイヤは？」と提案した。F児は以前，自分が砂場で置いておきたいケーキを置いておくときに，壊されないようにタイヤを置くことを保育者が提案したことがあった。それを思い出したのだろう。「そうかぁ！タイヤを置いたらみんな分かるなぁ。落ちひんよな」保育者はそれで十分と思ったが，タイヤだけではまだ心配な様子の子もいた。B「じゃあ，先生が字を書いといてよ」保育者「分かった，じゃあ何を書いたらいい？」B「なかにわにがいますって書いて」保育者「オッケー！」そして保育室に戻り紙とペンを持ってきて，子どもたちがいるテラスで書いた。片づけの時間になり，椅子を置いてその上に紙を貼っておいた。しばらく，「わにあな」は子どもたちの中で大切な穴になった。その後も何日か，穴の様子を見に行ったり掘ったりしていた。

＜考察＞

水やレスキューごっこ等，自分たちが興味や関心のある遊びを十分に楽しめるような環境や教師の援助があり，その遊びの中で子どもたちは，自分の思いを十分に出して遊んでいた。互いの考えや思いも認め合いながら，「楽しい」「やり遂げた」「嬉しかった」という思いを感じていた。そうした思いを幼児期に積み重ねていくことが大切だと思う。

Ｂ児は，普段から遊びの中でイメージを膨らませて新しい遊びのきっかけをつくったり，友達の出したアイデアを「それいいなぁ」と受け入れ，自分の遊びにも取り入れて友達と一緒に遊びをすすめていくことを喜んだりしている。また友達もＢ児の温かい気持ちに触れて，嬉しさを感じている。このエピソードでも，遊びが広がるきっかけになっていた。思いを出したり友達と関わりアイデアを受け入れたりして遊びが膨らんでいくおもしろさを感じていけるようにしていきたいと思う。

＜保育所からのエピソード＞

「こんなん作ってきたよ」　３歳児

＜背景＞

今現在，ほしぞら組（3・4・5 歳児異年齢クラス）の生活にも慣れ，たくさんの笑顔を見せるようになったA児。前年度は，妹が産まれたことで不安定になり，両親に泣きわめいたり，たたくなどして思いを主張したり，人と少しぶつかっただけで「痛いー！」と大声で叫び威嚇するなど，気持ちのコントロールがうまくいかない様子があった。

そんなA児も 4 月に進級したが，母親の職場復帰・保育時間の延長・妹の入園と，環境の大きな変化の中で話したい気持ちとは裏腹に言葉が詰まってしまい，うまくしゃべれなくなってしまっていた。そこで出た言葉は「Aちゃんうまくしゃべれへんねん」というものであった。

遊びでは，友達と自ら関わっていく姿は少なく，園庭でもだんご虫を集めたり，砂場でごちそう作りをして一人で黙々と遊ぶことが多い。絵を描いたり，物作りをすることは好きでコツコツと楽しむ。最近では妹の存在を認め「Ｂちゃんの所に行ってきます」と言って，妹のクラスに遊びに行こうとし，思いを伝えるようになった。

上記のような背景を持つA児が，ある事をきっかけに自信を持ち，主体的に考え，楽しみ，そこから友達との関わりも深めていく一連の姿から心の変化・成長を感じられたのでエピソードに取り上げることにした。

＜エピソード＞

6 月下旬のお帰りの時間，A児の大きな泣き声が聞こえてきた。お父さんに片手をひかれ一方の手には折り紙を持ち，「Aちゃんの！」と泣きわめいていた。保育者が「どうしたの？」と声をかけると，「あ，あ，あ，あ，あんな・・・」と，なかなか言葉が出てこない。A児なりの強い思いはあるのだが，感情の高ぶり等もあり，より表現しにくいのだろうと感じた。

普段は，A児の思いを言葉が出るまでゆっくりと待つことを心掛けているのだが，この日はいつも 6 時迎えのご両親が 5 時にお迎えに来られていたことと，父親の急ぎたい気持ちや苛立つような様子もあったため，私が気持ちを代弁しようと思った。

「まだ折り紙で遊びたかった？」と聞くと「うん」とうなずき答えた。「今日は早く来てくれて嬉しいね。この折り紙持って帰っていいよ。またどんなの作ったか教えてね。楽しみにしてるわ」と伝え

た。気持ちが落ち着いたのか，すっと穏やかな表情に変わると父親と会話をしながら支度を済ませ帰っていった。

次の日，「O先生～！見て～！」と大きな声で呼ぶA児。手には折り紙で作った作品が握られており，笑顔で保育者に見せた。「Aちゃんすごいやん！上手に作ってきたね」「うん。Aちゃん作ったんやで！」と誇らしげな表情であった。「皆に見せてあげる」と嬉しそうに紹介のかご（家で作ってきた物を入れるかご）に入れたA児。集まりの時間に，「おうちで作ってきました」と自分でその作品をにじグループ（異年齢グループ）で紹介した。このグループではリーダー的存在のC児，D児が「すごいなぁ」と口にした。C「どうやって作ったんですか」A「折り紙で作りました」D「一人で作ったんですか」A「ママとAちゃんで作りました」こんな調子でA児はもちろんのこと，C児，D児たちも嬉しそうであった。

それからは，「紹介持ってきたよ」「これ，先生にあげる」「Dちゃんにお手紙書いてきたん」と，小さな紙に書いたもの，折り紙を毎日のように持ってきている。そこから，「どうやって作ったん？」「教えてあげよっか」と，友達とのやりとりも増えてきている。

＜考察＞

なかなか自分の思いが出せなかったり，友達との関わりがもてなかったりしたA児だったので，しっかり見ていこうという思いと，どのようにより良い関係・環境をもてるように働きかけていけばよいのだろうかと悩んでいる時だったので，A児がこうもいきいきと目を輝かせて話す姿は嬉しかった。その反面で家庭環境はもちろん，背景を知っている中でもっと援助できるところがあったのではないかとも思う。絵を描いたり，物を作ったりをすることが好きだという側面から，遊びや環境作りにおいて工夫が出来ていれば，また違ったA児の主体的な姿が見られていたのではないかと思うと反省が残る。

保育者が「また作ったら教えてね」と言ったことで翌日への期待にもつながり，つくりたい思いに駆られたのだろう。また，折り紙・お絵かきなど園と家での活動が継続していて，母親との関わりも深まり，安定した姿にもつながっていったのではないかとも感じた。

周りの子に認められ，自信がついたことが大きく，友達関係からの心の成長，重要性を改めて感じる。A児は，皆の前に出て話したり，表現するのが苦手だという保育者の思いを跳ね返すようなA児の姿に，先入観を持ち子どもを決め付けるような感情はよくないと感じるとともに，子どもの持つ可能性・力を発揮出来る環境を今後も大切にしていきたいと思った。

（エピソード検討会から）

前年度のエピソード検討会から探った「主体性」について今年度は小学校の教員を交えて，再考しました。小学校１年までの主体性の捉えと，主体性の育つ過程についてまとめました。

- ４歳児の主体性は，友達と一緒に自分のしたい遊びを十分に楽しみながら，自分の思いを十分に出して遊ぶことや相手の思いを知ることなどで育っていくのではないでしょうか。
- ３歳児は，安心・安定を基盤として，保育者や友達に認められ，自信を持ったことで主体的に遊んだり，行動したりできるようになったエピソードだと思います。
- 主題設定理由にあげた「自ら考え行動する」には，他者について考えることも入っている

という理解でいたが，もう少し詳しく主体性について考えていきましょう。主体性には，自分が働きかけていく能動的な部分と相手のことを受け入れる受動的な部分とあるようにも思います。

・　エピソードから保幼が主体性を大事にしていることは良く分かります。小学校は保幼に比べると，教科学習等の枠組があります。その中で，自らいかに取り組むかだと思います。発達としては，その枠組の中でも課題に向かっていけると思います。

①　「主体性」の捉えについて

子どもたちにとって安心して遊べる空間，時間，仲間が十分保障されていない社会状況の中で，今，子どもたちに一番育てたいものは「生きる力」である。その基は周りと折り合いを付けなら自ら考え行動すること，すなわち「主体性」であり，幼児期は遊びを通して主体性が育つと考えます。

集団生活の中で子どもの心の育ちを考える時，人との関わりが影響を与えることはいうまでもありません。初めて家庭を離れて保育所や幼稚園で生活する子どもが，情緒を安定させ，安心して過ごし，集団の中で自分の存在感を感じ，友達との関わりを楽しむためには，身近にいる大人(保育士，教師)の温かい関わりや遊び込む経験が必要です。

安心，安定を基盤として，保育所・幼稚園で様々な人と関わりながら，子どもは自分の思いを出したり，相手の思いを受け入れたりして遊ぶことの楽しさを感じたり，時には葛藤を経験したりします。また，信頼できる保育士・教師や思いを共有できる友達との関わりの中で自信を持ち自己肯定感が芽生えてくると考えられます。このような経験の積み重ねが主体性の育ちにつながると思われます。子どもの生活や遊びが主体性の育ちに重要な意味を持ちます。幼児期は遊び込むことで自信をつけていき，友達関係を築いて子どもの内面(心)が育っていく時期です。

このようにして，子どもの生活や遊びを大事にしながら幼児期に育んできた主体性は小学校での新しい集団生活，学級での活動や生活科等の場面で，担任との信頼関係や友達との人間関係を築き，安心・安定を基盤としながら，発揮されていくと考えます。また，主体性は教科学習の中でも活かされていき，自ら思いを表現する姿や課題に向かい追求する姿につながっていくと考えます。このように，人との関係の中で自信を持ち，他者と折り合いを付けながら自分で考え行動することは，生きる力の育成へとつながっていきます。

本グループでは主体性を「他者と共に考え，行動し，自己実現すること」と定義付けました。交流での子どもの姿や，保幼小それぞれの場で見られる子どもの姿を通して，主体性を捉え直し，保幼で育てたい主体性について共通理解を図ってきました。

②　主体性の育ちの過程について

子どもが集団の中で自己実現していく過程は年齢や発達段階で区切れるようなものではありませんが，おおまかな道筋があるように思われます。

＜主体性の育ちの過程＞

段階	子どもの姿，心	保育者・教師の援助
原点 ＝土台	**新しい環境に慣れて，安定感を持って過ごす**	◎安心，安定できる援助 ・保育者の共感的，受容的態度 ・少人数担当制（保育所乳児）

	「やってみたい」という好奇心 ・自分のやりたいことをする。 ・保育者や年長者の真似をする。	・一対一の信頼関係作り（保護者も子どもも） ◎興味・関心を引き出す環境作り ・子どもが自由に選び使って遊べるように素材や遊具の数量を考えて出す。
3歳児頃 自発的な遊び	**①自分から環境に働きかける＝自分の思いを出して遊ぶ** ・試す。 ・感覚を使う。 ・イメージを持つ。 ・考えや思いを表す。	◎自分に自信を持つための援助 ・子どもが楽しんでいることを見取り，共感する。 ・子どものイメージや考えを認め，自信が持てるように関わる。
4歳児頃	**②「みんなの中の自分」を意識する＝友達とのつながり** ・自分の気持ちを伝える。 ・相手の気持ちを知る。 ・トラブルを経験する。 ・言葉や身につけるもので，連帯感を感じる。 ・友達とイメージを持って遊ぶ。 ・年長者の姿を見て憧れを持つ。（経験をため込む） ・自然体験，社会体験を楽しむ。	◎子ども同士をつなぐ援助 ・トラブル時は相手の気持ちを知る機会となるように，自分の気持ちをくみ取ってもらえたと実感できるように関わる。 ・自由な発想ができる環境設定 （遊具，材料や素材，空間等イメージしたことに近いものが選べること） ・保育者が遊びに参加し，友達のイメージを伝えて友達と関わるきっかけを作る。 ・異年齢が関わる環境で子どもが何に憧れを感じているか把握し，成長することへの期待が感じられるようにする。 ・多様な経験に興味を持ち楽しんで参加できるよう，環境構成をしたり，関わり方を工夫したりする。
5歳児頃 協同的な遊び	**③友達と協力して目的に向かって遊ぶ** ・友達と折り合いをつけて遊ぶ。（友達の思いを受け入れ，自分の思いも出す） ・友達と共通のイメージやめあてを持って遊ぶ。 ・今までの経験を遊びや生活に活かす。 ・自分のめあて(課題)を持って，挑戦する。	◎友達同士で認め合える関係作り ・友達の発想や考えを受け入れたり，自分の考えを伝えたりして遊ぶ姿を認める。 ・自分自身の経験，年長者の姿の刺激から遊びを再現したり，工夫したりできるようにし，成長の喜びが感じられるように援助する。 ・子どもの興味・関心に合わせた課題活動を選んで投げかけ，取組の過程を見て認め励ます。
小学 1年生	**課題と向き合い追求する** ・課題を自分のものとして追求し，到達したこと(理解)を喜ぶ。 ・友達と協力しながら課題を追求する。	◎自信を持ち自分の考えを言葉で表すための援助 ・追求する過程では一人で課題について考える時間を十分持つ。また，班での話し合いのように，自分の考えを発表したり友達の考えを聞いたりする時間を持ち，深められるようにする。 ・課題について，自分の考えを友達に分かりやすく話せるように語彙や話形を提示したりして指導する。

(7)　小学校へつながる主体性

小学校 1 年生の抽出児のエピソードから主体性の育ちを探り，また，保幼小三者が考える主体性と教師の関わりについて考えました。

＜保幼小のエピソードと参観から―幼稚園出身Ｂ児について＞

幼稚園での姿

年長児の進級時，担任が変わり新しい環境に緊張していたが，担任に声をかけられて次第に緊張がほぐれ信頼関係ができてきた。５月頃から友達関係が広がり，ピザ屋さんごっこやお家ごっこを楽しむようになった。自分のやりたい遊びを楽しんだり，友達の考えを受け入れたり，いろいろな友達と関わったりしながら，遊びを通して友達関係が広がり深まっていった。また動植物に自分のことのように心を寄せて関わったり，小さな子どもに優しく接したりする姿が見られた。何か困ったこと・間違ってしまったことがあると，気持ちがいっぱいになり泣く姿が見られた。担任がその気持ちを受け止めて一緒に解決方法を考えてきたが，引き続きこのような援助が必要である。

小学校の担任から聞いた入学当初の姿

入学当初，Ｂ児はトイレに行きたくなった時など困ったことがあると何も言えずに泣いてしまう不安な様子があった。また，教師の発問に対して分かっていても自分から発表せず，自信がなかった。

＜生活科のエピソード①＞

「御苑のもりでみつけよう」　５月―木の実と対峙する―

ふれる　つかむ

「鷹司邸跡」「出水の小川」「桜町」の３か所に，３日に分けて探検に行った。Ｂ児は，御苑には，今までにも何度も行ったことがあるので，とてもわくわくしている様子だった。御苑についてからも，近くにいる友達と一緒に，草花を探したり，川に葉っぱを流したりして，御苑の自然を十分に楽しんでいた。

何度も繰り返し御苑を探検した後，「これから　どうしたい？」という話になり，みんなが「もっと御苑のもりとなかよくなりたい！」という思いを持った。この時，Ｂ児は声には出さなかったが，その後，「じゃあ，どうしたら御苑のもりとなかよくなれるかなあ？」という投げかけには，「木の実をたくさん見つけて，なかよくなりたいです。」と，カードに書き，思いを持っていた。そして，木の実となかよくなるためには，木の実がたくさんあった「鷹司邸跡」に行けばいいと考えて，これから学習への思いを確かなものにしていた。

むかう

「木の実となかよくなりたい」という思いを持って行った１回目の探検ではあったが，すぐに木の実を探す，という行動には出ず，周りの子どもたちの様子を見たり，自然の様子をじっくり見渡したりしているような様子だった。そこで，「なかよくなれそう？」と尋ねてみると，黙ったままだったが，「見つからないの？」と聞くと，うなずいたので，周りの子どもたちで木の実を探している子どもと一緒に，木の実探しを始めた。すると，友達と一緒に，桜の木についた実を見つけることができた。以前にも見つけたことのある赤い実がたくさんあったのだが，その中に一つだけ白い実があり，疑問

を持ったようでじっと見ていた。次の探検では，より具体的なめあてを持って活動をしてほしかったので，全体での今日の活動の振り返りでＢ児が見つけたものを発表する場面を作った。すると，みんなから「赤い実と同じ仲間なのか？それともちがうのか？」「この後，この白い実は赤くなるのか？そのままなのか？」という疑問が出て，今後Ｂ児がそのことを見続けることになった。

２回目の探検では変化がなかったのだが，３回目の探検に行くと，Ｂ児が桜の木のそばでずっと泣いている。どうしたのかな，としばらく様子を見ていると，周りの気になっていた子が，「先生，実がないねんて」と教えてくれた。どうするか，声をかけずにいたが，結局活動の間ずっと泣き続けていた。

戻ってきてから書いたカードには，「まえあったきのみが　かぜにとばされているのかなとおもう。きのみが　なくて　びっくりしたよ。きのみがなくて　わたしは　かなしかった」と書いていた。少し落ち着いて，思いを表現することができたようだった。

その後，自分が仲良くなったことを友達と伝え合い，「これからも　御苑のもりと　なかよくしたいね。」という思いを持ち，単元の最後に，御苑のもりへ手紙を書いた。

Ｂ児は，「1かいめと　2かいめに　いろが　かわってて　びっくりしたよ。どこに　いっちゃったのか　しんぱいだよ」と，1か月ほどたってからのことではあったが，Ｂ児なりに御苑のもりへの思いを持ち続けていたようだった。

（討議から）

Ｂ児の内面に注目して話をしました。小学校と保幼とでは子どもの発達が違うので関わりにも違いがあることを知りました。また，保幼の時の姿を知ることで，その子どもへの関わりを振り返る機会になりました。

・　この授業で「木の実が変化する様子を見る」と自分でめあてを見つけることができました。これは，幼稚園の時から御苑が慣れ親しんだ場所であったこと，学校の教師や友達のアドバイスを受け入れて自分で考えることができたからだと思います。

・　木の実がなくなり泣いていた姿を見た時，教師は簡単に慰める言葉がかけられませんでした。それはＢ児の木の実への思いが深かったからです。Ｂ児にとって悲しい結果になりましたが，自分で課題を決めて，木の実に心を寄せて学習したことは，この時まだ十分に安定感を持っていなかったＢ児の状態から考えると，自分なりに頑張ったといえないでしょうか。学校に帰ってから自分で気持ちを立て直し，その気持ちをカードに表現することもできました。悲しいこと，嬉しいこと，様々な感情体験を通して，Ｂ児が学校生活で安定感を持ち，これからより主体性を発揮することを願っています。

・　4 月当初からスタートカリキュラムを意識してきましたが，保幼の生活を知り，具体的な子どもの姿から捉えていくことができました。また，保幼の時の姿を知ることで，その子どもの見方や関わり方を考える機会になりました。

＜生活科のエピソード②＞

生活科「いきもの　だいすき」　10 月 26 日

～教師に認められ自信を持って発言する姿　寂しさと温かさを感じる経験～

教室には一人一鉢の朝顔が子どもの席に置いてある。授業が始まり，教師が話しだすとＢ児はみん

なの方に体を向けて友達の発言や様子を笑顔で見ている。意欲的だなと感じた。教師「どうやって種をまいたか，覚えてる？」Ｂ児は小さく手を挙げる。Ｃ児が当てられて答える。

教師「芽が出たあと，どうなった？」Ｂ児は手を挙げず，みんなの方を見ている。

ここで，同じ質問に対する意見を 4 人の生活班で 5 分間話し合うことになった。Ｂ児の司会である。Ｂ児は少し恥ずかしそうに友達に話しかけるが，他の子どもたちは残り時間が気になるようであった。巡視していた教師にどんな意見が出たか聞かれると，同じグループのＣ児が教師につるが伸びることを言い，Ｂ児も続けて教師に何か意見を言った。教師に「みんなに言ってね」と言われ，Ｂ児は同じ班の女子の方を見て意見を言う。

5 分が経ち，教師が「友達と話し合って，自分の中で考えている時よりたくさん思い出せたかな。芽が出たあと，どうなりましたか？」Ｂ児は手を挙げている友達の様子を見てしばらくためらっていたが，静かに手を挙げた。教師が「約束を守って，静かにピンと手を挙げているＢさんに答えてもらいます」と，Ｂ児を認めながら指名した。Ｂ児は立って「芽が出て，水をやって，つるが出て，花が咲きました。どうですか？」と話した。ほっとしたような顔で座席に座った。

朝顔を３分間観察することになった。Ｂ児は教師に促され，朝顔に近寄って見ていた。教師が「どんなふうになった？」と聞くと，すぐにＢ児は「はい」とピンと手を伸ばして手を挙げる。一人目はＤ「葉っぱが枯れました」。その後Ｂ児がまた手を挙げ，指名される。「葉っぱが枯れて・・・。（少し考えてから）葉っぱが枯れて，花も枯れました」少し考えたのは，先に発言したＤ児と違う意見を言おうとしたからであろう。

教師が「花が咲かなくなって，どんな気持ち？」と聞くと，手を挙げたＢ児は指名されると小さな声で「寂しい」というようなことを答えていた。涙ぐんでいたようである。「Ｂさんは寂しいんだね」と教師にその気持ちに共感してもらう。この後しばらく悲しいという意見がでて教師が「いつもの 6 組の雰囲気と違うね」と言い，「でも寂しいけど，朝顔が残してくれたものがあるね」と問いかけると，「種」という答えが出た。「（朝顔は）枯れたけど頑張って育ててねって，言っているかもね。これからどうするか，思いついた人？」と教師が聞くと，Ｂ児も手を挙げた。Ｂ「枯れても，また種植えて育てる」と発言した。他に「次の１年生にこの種をあげます」という意見も出る。「朝顔が枯れてしまって悲しい気持ちがあるけど，ちょっと温かい気持ちになった？」という教師の問いかけにＢ児は黙ってうなずいた。

（討議から）

子どもの思いに共感することや認めることが，子どもが主体性を発揮するためには大切な支援であることを話し合いました。また，生活科と体験を重視する保幼との共通点と相違点を知りました。

・　Ｂ児は感受性が強く，目の前からなくなることに悲しさを感じるようです。しかし，教員が朝顔の種が残っていることに着目させ，Ｂ児は最後には温かい気持ちになり授業が終わりました。もし，教員が子どもたちの寂しい気持ちを否定していたら，この時のように温かい気持ちになれなかったと思います。教員が学習のめあてをはっきり持ち，子どもの発言を共

感的に受けとめながら授業を進めたことが，よい支援になりました。

- 幼稚園年長児でも綿花を育てて綿を収穫し，種を年中児が育てるように渡しています。幼稚園でも小学校でも植物の命が引き継がれ，続いていくことを体験させていることは興味深いことです。体験を通していること，子どもに教員が寄り添い，発見や子どものつぶやきに共感し感覚的に栽培活動を行うことが，生活科の学習と幼児期の教育と共通しています。違いは，子どもが感じたことを言葉で表現する指導が小学校で重視されていることです。幼児期に見たこと感じたことを親しい人に伝えたい，という心を育てておくことが小学校での豊かな言語活動につながると思いました。
- 挙手の仕方を教員に認められたためか，Ｂ児はその後何回も手を挙げて発言することができました。教員の言葉かけでＢ児は自信を持ってこの時間を過ごすことができました。Ｂ児の意欲的な態度から，入学当初よりずいぶん情緒が安定したと思われます。教員に認めてもらうことで，主体的に学習や生活をしていくことができるということが分かりました。

Ⅳ　２年間の成果

- 交流やエピソード検討会を通して，安心・安定が基となり主体性を発揮していくことが分かりました。主体性の育ちの過程を探ったことで，保育，教育の中で大事にしていることを再認識し，保育，教育の専門性を高めることにもつながりました。
- 交流前の打合せや，事後討議を丁寧にしてきたことで，保育者，教員間の連携をより図れるようになり，交流のめあてをしっかり持ち，子どもの姿を見ることができました。
- 「主体性」に着目し，エピソードを保幼小の三者で記述し検討したことで，保幼小での子どもたちの発達の違いや，それぞれの保育，教育の特性や違いを具体的に知ることができました。保育者，教員は子どもの発達が違うのだから，教員の関わり方や，指導方法も違うということを理解しました。そして，それらをつなぐものに生活科の学習があるということも理解しました。
- 小学校の教員が抽出児のエピソード記述に取り組んだことで，その子どもの保幼での育ちに目を向け，好きなことや頑張っていたことなどに気付くこともでき，授業の中での子どもたちの見取りを振り返ることもできました。保幼の保育者は，課題に向き合う力は今までも重要視して関わってきましたが，主体性の育ちの過程を考える中で，体験を大切にし子どもたちの学びを支えていく保幼と，達成度を大切にし教科学習をする小学校の違いを踏まえ，子どもが自らの言葉で表現することの重要性に気付きました。
- 保幼の子どもたちにとっては，保育所，幼稚園を行き来したり，小学校に出かけて行ったりすることで，自分たちが住んでいる地域，町の様子を知る機会になりました。身近な地域に友達や知っている場所が増えることは地域への愛着を持つことにつながります。そして，保幼小で集まる前に保幼で顔を合わせて再会を喜び，小学生との出会いへの期待感と緊張感を共有し，安心して交流をすることで，子どもの経験の幅が広がることになりました。

Ⅴ　考察と今後の課題

・　これまでも幼小の連携はありましたが，本プロジェクトを機会に初めて保育所が連携に加わりました。保幼の連携は保育者にとっては，同じ地域の就学前施設が互いの保育・教育を知り合い，子どもたちを小学校に送り出す側として，それぞれの子ども像を理解し，保育の質を高めていく意欲につながりました。小学校にとっては，保幼の就学前施設を知り，保育・教育を理解できました。また，子どもたちの就学前の様子を知ることができ，子どもへの関わりに活かすこともできました。今後，保幼小の連携を深めながら，地域や保護者への働きかけをし，保幼小連携に理解を得ることが大切です。

・　「Ⅳ　２年間の成果」で記したように，「主体性」に着目したことで，小学校は子どもたちが主体性を発揮できるように，安心感を持つための援助も心に留め教科学習に臨んでいたように思います。保幼は今後，子どもたちが自らの言葉で表現をすることを意識して保育していくことの重要性に気付きました。本プロジェクトの目的にある「子どもの育ちの連続性を見通した保育，教育について考察する」ことの第一歩が踏み出せたと考えます。今後は，子どもたち一人ひとりの就学時の安心，安定を支える意味で，保幼と小学校が連携しながら小学校のスタートカリキュラムを具体的に考えていくことが望まれます。また，保幼では，乳幼児期に見たこと，感じたことを親しい人に伝えたいという心を育てておくことが小学校での豊かな言語活動の基礎であることを念頭に置いて，保育の具体的なカリキュラムを考えることも大切だと考えます。

・　保幼小の交流は，特に新しいことに取り組まなくても，既存のカリキュラムを活かしながら時期を合わせるなどして取り組むことで効果を上げることができます。本プロジェクトでは，生活科「あきとなかよし　ごしょのもり」に合わせて，事前に小学校が京都御苑に出かけ秋となかよしになることと，保幼が園外保育で秋の自然を感じることの日程を合わせて，交流を図りました。そのことで，小学生にとっては，秋に対する自分の思いを発表して伝えたい相手が明確になり，自分たちで意欲を持って生活科の授業を考える姿につながりました。保幼の園児たちは，御苑で一緒に拾ったどんぐりと，小学生が発表で教えてくれたどんぐりが結びついたり，御苑でいろいろなことを教えてくれた１年生に親しみを感じる等して，安心して楽しむことができました。保幼小の子ども，保育者，教員に負担の少ない交流を考えると同時に，事前，事後の話し合いの時間は大切にし，子どもの変化を見取っていく努力は重要だと思います。

・　２年間の保幼小連携が今後も続いていくためには，連携に関わる保育者，教員を組織で支えることが重要です。保幼は子どもを小学校に送り出す側として，組織全体で取り組みやすいのですが，組織の大きい小学校では，保幼小連携主任を置く等，連携のための組織作りが重要だと思います。連携の基盤がなくこれから連携を始めようとする場合や，組織的に連携が難しい場合には，一対一からの個人的なレベルからのスタートでもよいので，連携の重要性に気付いた保幼小の教員，保育者が働きかけ，歩み寄っていくことが必要だと思います。

Ⅵ　保幼小連携研究プロジェクトに参加して

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊京都市御池保育所＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

昨年度この保幼小連携プロジェクトのお話を頂いたときには，未知のことで大変不安がありましたが，自園は開園から日が浅く近隣の校園とのつながりもほとんど無かったので，良い機会を頂いたと思い参加させていただきました。まずは，保幼がお互いを知ることから始め交流を重ねていくうちに，保育園，幼稚園，公立，民間の違いはあってもお互い同じような思いで保育をしていることが分かりました。相互理解の手段としてエピソードを持ち寄り検討会を重ねる中で，子どもが安心できる環境で自分に自信を持って遊び込めるような保育者の援助の必要性を感じました。

子どもたちの交流ではお互いの園を訪問し合って遊んでいく中で，同年齢の友達と遊ぶことが楽しいというだけでなく，相手のことを考えるようになり，どうしてあげたら相手が喜んでくれるか，子どもの中から意見が出てきて交流に活かすことができました。新しい友達が出来たことで，「相手のためにしてあげたい」「相手が喜んでくれることが嬉しい」と思う気持ちが子どもたちに芽生えたことが大きな成果となりました。

「主体性」を研究テーマに選んだことで，“主体的な子どもに育って欲しい”と考える自園にとって，直接プロジェクトに参加していない職員もエピソード検討会のきっかけとなり園内研修にもつながりました。

同じ地域の小学校に進む子どもたちが就学前からつながっていることは就学後の安定にも大きな影響を及ぼすと思います。プロジェクト終了後も三者のつながりが続いていくことを望みます。

今回のプロジェクト参加が普段の保育を振り返る良い機会となり，改めて私たちの仕事の重責を感じています。子どもたち一人ひとりに寄り添った保育をこれからもしていきたいと思います。ありがとうございました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊京都市立中京もえぎ幼稚園＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

このプロジェクトに参加して，同じ地域にある京都市御池保育所，京都市立御所南小学校の先生方と顔を合わせて話し合う時間を持ち，子どもたちが交流するようになって，保育所，小学校が身近に感じられるようになりました。

遅い時間から始まる研修ではありましたが，積み重ねるうちに打ち解けて，話しやすい雰囲気になりました。先生方と仲良くなれたことが一番嬉しかったです。幼稚園と同じ就学前の保育所の実践は新鮮で，幼稚園との違いや共通点を感じることができました。また，小学校の授業を参観して修了児のその後の様子を知ったり，事後に懇談をして子どもや教科学習の話を聞いたりしたことは，楽しく，興味深かったです。

保幼小連携の研究は，自分がどれだけ幼稚園教育や幼児教育の本質を理解しているか，ということに関わってくるものだと思いました。幼稚園の保育で当たり前に大事だと思っていることを，

なぜ大事か，そのためにどうしているのか，きちんと説明できる力を身に付けたいと思うことが何回もありました。これから，私たち保育者の専門性を高めるとともに，引き続き保育所の保育や小学校の授業について知る勉強もしたいと思います。

最後になりましたが，この２年間の研究で一緒に考え，進めていった保育所と小学校の先生方，本当にありがとうございました。特に研究テーマである主体性について先生方と話し合った時間は大変勉強になりました。このような研究をするきっかけを与えてくださったこどもみらい館の方々，仲間としてまた指導者として研究を導いてくださった主任主事に，心より感謝申し上げます。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊京都市立御所南小学校＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「主体性とは？」この１年間，何度となく頭の中をめぐったことです。保幼小のそれぞれの時期の「主体性」というものをまとめていくのは，とても難しいことでした。まず保幼小で「主体性」の定義を共通認識する段階で，何度も話し合いました。初め，それぞれの考えだったものは，回を重ねるごとに少しずつ明確になってはいきましたが，大きなテーマだったので難しかったです。

しかし，今回はそれだけでなく，就学前の姿や発達，またそれらの小学校とのつながり等を考える機会がたくさんありました。

小学校では，4月の入学当初から，スタートカリキュラムを念頭に置き，1年生の学習を進めてきました。そのために，何が「つながり」，何が「ちがい」，何が「かさなり」を持っているのか，を知ることを大切にしてきました。しかし，小学校側だけでは，そのようなことを具体的に考えることはできず，今までのイメージだけで捉えているようなところがありました。

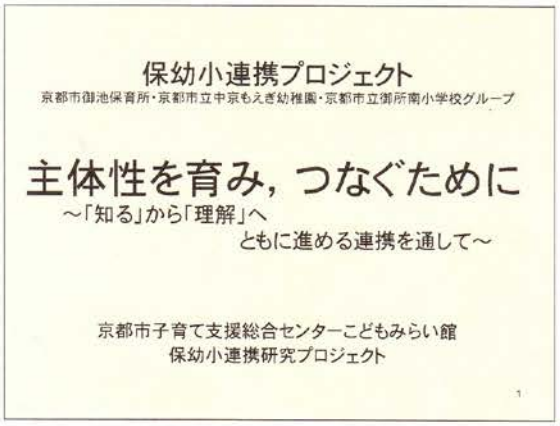
今回のプロジェクトで「主体性」というものを考える中で，子どもたちの保幼での生活から小学校の生活や学びへの「つながり」，保幼での生活の内容や方法と小学校での学習の内容や方法の「ちがい」，保幼で大切にしていることと小学校で大切にしていることの「かさなり」を，具体的な子どもの姿で捉えていくことができたように思います。

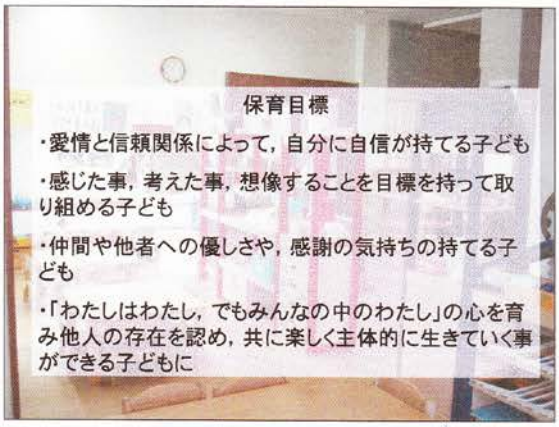
1年生の担任がみんなで保育所や幼稚園の保育を参観させてもらうことで，子どもたちの様子はもちろんのこと，後の話し合いでは，先生方が何を大事にしておられるのかということなども伺うことができました。

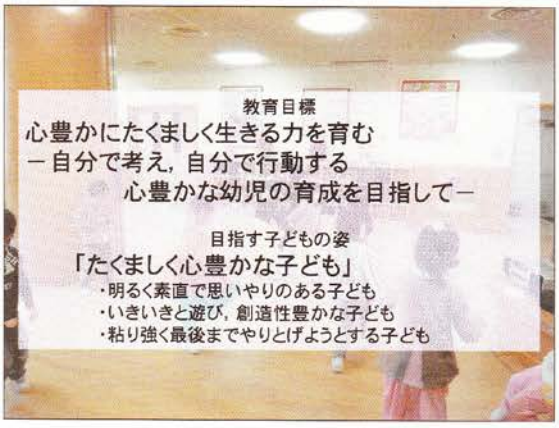
また，小学校の生活科の学習を見ていただき，それまでのプロジェクトの話し合いで話していた生活科で大切にしていること等を，実際の授業の中で捉えていただくこともできたようでした。また，その際には，保幼それぞれに通っていた児童を中心に見ていったことで，より具体的な子どもの姿で考えていくことができました。

今後も，このような子どもたちが見える形での連携をたくさん重ねていくことで，保幼小の「つながり」「ちがい」「かさなり」を明確にしていき，子どもたちのよりよい育ちにつながるようにと思っています。

研究プロジェクト報告会配布資料





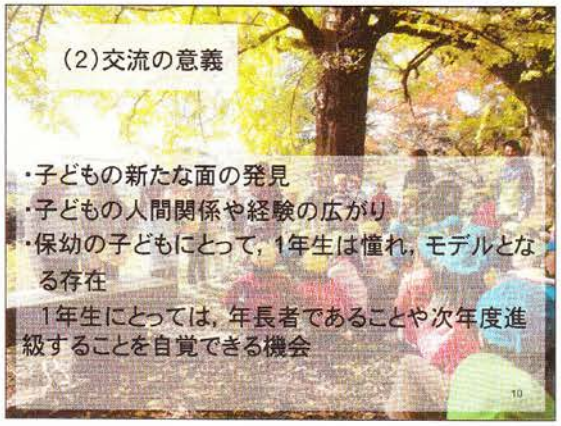


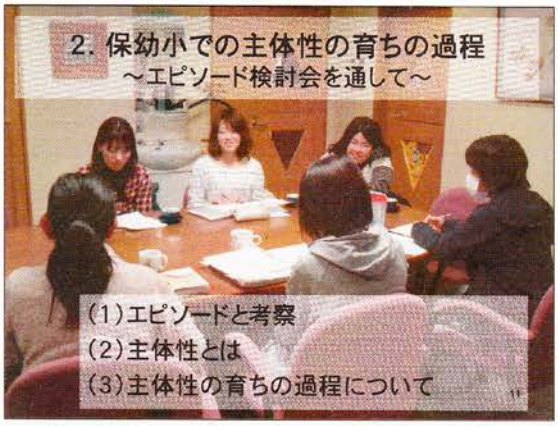
（1）交流を通して見える主体性
②保幼小交流より

平成23年11月
「あきとなかよし」

平成23年12月
「あきとなかよし　ごしょのもり」

9





（2）主体性とは・・・

本グループでは主体性を「他者と共に考え，行動し，自己実現すること」と捉え直した。
そして，保幼小で育てたい主体性について共通理解を図ってきた。

12

（3）主体性の育ちの過程

原点　安定感をもって過ごす。保育者との信頼関係を築く。「やってみたい」という好奇心

13

3歳児頃　自分から環境に働きかける。
自分の思いを出して遊ぶ。
自発的な遊び。

14

4歳児頃　「みんなの中の自分」を意識する。
友達とのつながりを楽しむ。

15

5歳児頃　友達と協力して目的に向かって遊ぶ。

16

小学1年生　課題と向き合い追求する。

17

（4）小学校へつながる主体性
～幼稚園出身B児のエピソード～

5月生活科（御苑にて）
10月生活科（いきものとなかよし）

18

成果と課題

1．研究の成果
（1）小学校から
- 主体性のとらえ・・・・・・・・具体的な子どもの姿から話し合いから主体性をとらえることができた。
- 具体的な児童の話題・・・保幼の時代の姿を知ることで，小学校での指導に活かすことができる。
- 子どもたちの交流のねらいと様子・・・年下の人とかかわるという相手意識をもつことで，めあてをもって活動に向かう姿が見られた。

成果と課題

（2）保幼から
- 個の姿から探る・・・・・保幼の卒園生を抽出し同じ子どもを継続して見た。保幼で育った主体性は，学校で安定感をもつことで発揮され，教師の援助や友達とのかかわりの中でさらに伸びていくことを目の前で確かめ感じることができた。
- 相互理解を図る・・・・・施設見学や行事，保育，授業を参観して率直に話し合うことができた。
- 互恵性のある交流・・・事前・事後の研修をもち，交流のねらいを明確にし，子どもの育ちを確かめられた。

20

成果と課題

2．本研究グループが考える今後の課題とは
- 保幼小の連携を円滑に進める・・・組織で動くことが必要である。
- より多くの小学校教員の参画が望まれる。
- 継続的な交流のあり方を考える。

資料１

京都市子育て支援総合センターこどもみらい館 研究プロジェクト報告会

保幼小連携研究プロジェクト

―京都市御池保育所・京都市立中京もえぎ幼稚園・京都市立御所南小学校グループ―

研究主題　主体性を育み，つなぐために

～「知る」から「理解」へ　ともに進める連携を通して～

Ⅰ　はじめに（主題設定の理由）

１　地域の状況等

御所南小学校と中京もえぎ幼稚園は，市中心部の人口減少に伴い，中京区内の複数の小学校，幼稚園の統合により，平成７年度及び12年度に創立しました。また，御池保育所は，近年，この地域で都市型マンションの建設が進み，子どもの数が増加していることに対応し，教育や福祉の複合施設である御池創生館の一角に，公設民営保育所として平成18年度に誕生しました。小学校と幼稚園は，隣接する公立の教育施設として交流活動を始めて久しいものの，各々の時間的な制約もあり，交流のめあてや事後協議の確保，互恵性のある内容の工夫等，連携に向けての課題がありました。また，これまで保育所を交えた交流の機会はありませんでした。

２　主題設定までの経過と理由

しかし，近年の子どもの育ちや社会の変化をみると，同一地域で発達の連続する幼児や児童が通う施設同士としての保幼小三者が，互いの子どもの発達や課題，保育や教育のあり方や考えを知り理解を進める中で，めざす子ども像を共有し，発達や学びをつなぐという側面からそれぞれの立場で大切にすべきことを明らかにすることが不可欠です。

平成20年３月に実施された学習指導要領等の改訂においては，引き続き「生きる力」を育むという理念が引き継がれることとなりました。本グループでも生きる力の基盤となる「自分で考え行動する力」「友達や教師と共に，主体的に生活や遊び，学習を進める力」の育成を共に願っていることが分りました。そこで本研究では「主体性」に着目し，参観，交流等の場面やエピソードを通して幼児や児童の姿を共有しその発達を学ぶとともに，保幼小における「主体性」の捉え方，保育や指導のあり方の共通点や違いを探りながら三者で改めて「主体性」を見直し，それを育むための段階的な指導や援助，環境，連携のあり方を考察したいと考えました。

Ⅱ　研究内容と研究方法

１　平成22年度研究内容

(1)　保幼を中心として保幼小の相互理解を図る。

(2)　保幼小の交流を通して子どもの育ちを探る。

(3)　保幼での主体性の育ちを探る―エピソード検討会を通して―

２　平成23年度研究内容

(1)　交流保育を通して見える子どもの主体性と交流の意義について考察する。

(2)　エピソード検討会を通して，保幼小での主体性の育ちの過程を探る。

(3)　保幼で育った主体性が小学校へどのような姿でつながっているか考察する。

３　研究方法　（22年度，23年度共通）

(1)　保育上，教師間交流を通して（実態，課題，めざす子ども像，研究主題等についての協議）

(2)　施設見学，保育，授業，行事の参観及び参観後の研究討議

(3)　保幼小の子どものエピソード検討会

(4)　幼児・児童の交流活動と事前打合せ・事後討議

Ⅲ　取組の概要　６ページ参考資料をご覧ください。

Ⅳ　研究の考察

１　交流保育を通して見える主体性と交流の意義

(1)　交流保育を通して見える主体性

①保育所～A児の姿から～

幼稚園との２回目の交流（平成23年５月）にあたり，１回目は周りをあまり意識することなく自分の嬉しい思いのみで保育所内を案内していったA児が，２回目の交流では，どうしたら保育所に来る幼稚園の人が遊びやすいか積極的に考え，幼稚園の友達に保育所のことを教えたいという思いを持ち，相手のことを意識しながら，案内や遊びを進めていきました。

＜考察＞

・　共通の遊び（こおり鬼）を通して，体を動かして触れ合って遊ぶことができ，親しみを感じていたようでした。

・　幼稚園との２回の交流を通して，幼稚園の友達に保育所のことを教えたいという思いを持ち相手のことを意識し始める姿が見えてきました。この姿が主体性につながるのではないかと思います。

②保幼小交流から

平成23年11月，保育所，幼稚園，小学校１年生で，御苑で「秋となかよし」の生活科の学習を通して，交流しました。保育所，幼稚園の子どもたちは久々の再会を喜び合っていました。１年生には「松ぼっくりのきのこ」や「いい香りのはっぱ」を教えてもらい，憧れの気持ちや親しみを感じました。この交流から１年生は保育所，幼稚園の子どもたちを「秋のお店屋さん」に招待して，もっと一緒に色々なことを楽しみたいと思いました。12月には，小学校の生活科の授業で，「秋のお店屋さん」を一緒に楽しみました。１年生は，年長者として，保育所，幼稚園の子どもたちが安心できるような言葉かけを考えたり，顔を見て話をしたりしていました。

＜考察＞

・　１年生に御苑の自然（松ぼっくりから生えたきのこ，いい香りの桂の葉等）をいろいろ教えてもらって，御苑への思いも１年生への思いも広がったように思います。

・　交流を重ねることで知っている友達や先生が増え，安心感を持って自分を発揮していけるようになっていました。小学校への就学を意識するようになって来た時期に知っている小学生や同一小学校区の同年代の子どもがいることは，大きな安心感につながると思います。

・　１年生が保幼の子どもたちの思いに添って「これ，面白いよ」「どこに行きたい？」と声をか

けていました。保幼の子どもたちも安心して遊べました。

(2)　交流の意義

・　いつもと違う子どもの新たな面の発見することができました。
・　保幼小交流では，初めて会う友達や先生に親しみを感じ，次の出会いへの期待感を持つことができました。子どもの人間関係や経験の広がりを感じることができました。
・　保幼の子どもにとって，何でも知っている１年生は憧れ，モデルとなる存在となりました。また，１年生にとっては，保幼の子どもと一緒に遊んだり時には注意したりして，年長者であることや次年度，進級することを自覚できる機会となりました。

２．保幼小での主体性の育ちの過程　～エピソード検討会を通して～

(1)　エピソードと考察

保幼の遊びや生活の中から，子どもの主体性が見えるエピソードを出し合い，主体性の捉えと主体性の育ちの過程を話し合いまとめました。保幼の保育者が互いの保育や子どもの姿に刺激を受けたことは，自分たちの保育を見直す機会になりました。エピソードについては，今年度末に発行される冊子に掲載しますので御覧ください。

(2)　「主体性」とは

子どもたちにとって安心して遊べる空間，時間，仲間が十分保障されていない社会状況の中で，今，子どもたちに一番育てたいものは「生きる力」です。その基は周りと折り合いを付けながら自ら考え行動すること，すなわち「主体性」であり，幼児期は遊びを通して主体性が育つと考えます。

集団生活の中で子どもの心の育ちを考える時，人との関わりが影響を与えることは言うまでもありません。初めて家庭を離れて保育所や幼稚園で生活する子どもが，情緒を安定させ，安心して過ごし，集団の中で自分の存在感を感じ，友達との関わりを楽しむためには，身近にいる大人(保育士，教師)の温かい関わりの中で遊び込む経験が必要です。

安心，安定を基盤として，保育所・幼稚園で様々な人と関わりながら，子どもは自分の思いを出したり，相手の思いを受け入れたりして遊ぶことの楽しさを感じたり，時には葛藤を経験したりします。また，信頼できる保育士・教師や思いを共有できる友達との関わりの中で自信を持ち自己肯定感が芽生えてくると考えられます。このような経験の積み重ねが主体性の育ちにつながると思われます。子どもの生活や遊びが主体性の育ちに重要な意味を持つのです。幼児期は遊び込むことで自信を付けていき，友達関係を築いて子どもの内面(心)が育っていく時期です。

保幼で友達と生活を進め遊び込むことで育った主体性は，小学校での新しい集団生活に安定感を持ち，担任との信頼関係や友達との人間関係を築くことで発揮されていきます。学習や生活の中で，課題に向き合い，自らの考えを積極的に表現したり，友達の考えを聞いて自分の考えを広げ深めたり，理解できた喜びを味わい自信を持ったりする姿の中に主体性の育ちがあるといえるでしょう。

本グループでは，主体性を「他者と共に考え，行動し，自己実現すること」と捉え直しました。そして，保幼小で育てたい主体性について共通理解を図ってきました。

(3)　主体性の育ちの過程

３度のエピソード検討会を通して，乳幼児期～児童期（１年生）にかけて主体性が育っていく過程と，保育士・教師の援助について話し合ったことをまとめました（　　内は子どもの心や姿を示す）。主体性が育っていく姿は連続していて，年齢や発達段階で区切れるようなものではありませんが，次のようなおおまかな道筋があると思われます。

原点　安定感を持って過ごす。保育者との信頼関係を築く。「やってみたい」という好奇心
保育者の受容的・共感的態度
3歳児頃　自分から環境に働きかける。自分の思いを出して遊ぶ。自発的な遊び
自信がもてるように一人ひとりを認める。
4歳児頃　「みんなの中の自分」を意識する。友達とのつながりを楽しむ。
保育者も遊びに参加し，友達をつなぐ援助
5歳児頃　友達と協力して目的に向かって遊ぶ。
互いを認め合える友達関係が作れるような援助
小学１年生　課題と向き合い追求する。
課題を追求する過程を大事にする援助

(4)　小学校へつながる主体性　～幼稚園出身Ｂ児のエピソード～

幼稚園での様子（3年保育）

入園当初は母子分離不安で泣いていた。年少児からごっこ遊びが好きで，年中児では友達の考えも受け入れて遊ぶようになり，年長児になるといろいろな人と関わり友達関係が広がりました。動植物に対して自分のことのように心を寄せて関わる姿が見られ，小さい子にも優しく接していました。何か困ったことや間違えてしまったことがあると気持ちがいっぱいになり涙が出てしまう姿が見られました。

小学校生活科での事例（平成23年5月）

入学してしばらくはトイレに行きたくなると泣くなど，不安定な様子でした。その頃，生活科の学習で京都御苑の木の実を継続して見ていくことをＢ児は自分の課題としました。２回目，見に行った時はその実に変化はなく，３回目はその実がなくなっていました。それに気づいたＢ児は悲しくて，教師や友達から声をかけられてもその場に立ったままずっと泣いていました。学校に戻り，ようやく泣きやみカードに次のように書きました。「まえあったきのみが　かぜにとばされているのかなとおもう。きのみが　なくて　びっくりしたよ。きのみがなくて　わたしは　かなしかった」

小学校生活科「いきものとなかよし」の授業参観での様子（平成23年10月）

Ｂ児は教師に挙手の仕方を認められてから，時間中，何回も手を挙げて自分の意見を話していました。言葉に詰まることもありましたが，それは，前の人と違うことを言おうとしていたからでした。朝顔が枯れてしまったことを涙ぐみながら「頑張って育てたのに，もう花が咲かないのは寂しい」と言いました。しかし，教師は種ができていること，種をまいて育てたらまた花が咲くことを知らせました。「寂しい気持ちもあるけど，温かい気持ちになったかな？」という教師の問いかけにＢ児はうなずきました。

<考察>

・　京都御苑で木の実がなくなり泣いていた姿を見た時，教師は簡単に慰める言葉がかけられませんでした。それはＢ児の木の実への思いが深いと教師が思ったからです。Ｂ児にとって悲しい結果になりましたが，自分で課題を決めて，木の実に心を寄せて学習したことは，まだ十分に安定感を持っていなかったＢ児の状態から考えると，自分なりに頑張ったといえな

いでしょうか。学校に帰ってから自分で気持ちを立て直し，その気持ちをカードに表現することもできました。悲しいこと，嬉しいこと，様々な感情体験を通して，Ｂ児が安定感を持ち学校生活で主体性を発揮できるように期待するようなエピソードでした。

・　10月の授業では，教師に認められたことでＢ児は自信を持って学習することができました。友達の発表をよく聞いて，友達とは違う意見を考えて発表したことがＢ児の主体性の現れだと思われます。また，幼稚園の時から動植物に親しみを持ち，思いを寄せて世話をしていた姿と，小学校で木の実と対峙する姿や枯れた朝顔に寂しさを感じる姿は通じるものがあります。幼児期に育った主体性が，小学校では自分の考えを発表したり，友達の考えを聞いたりする学習態度や植物に心を寄せて向き合う姿に現れていると考えらます。

・　保幼小の三者でＢ児を見ましたが，Ｂ児のありのままの姿を理解しようとしている見方が共通でした。また，Ｂ児が泣いている時の関わり方について，小学校教師と保育士，幼稚園教師の援助の仕方に違いがあることに気付きました。それは活動のねらいや発達段階により，Ｂ児への願いが違うからでしょう。それぞれの指導，援助の方法について理解し，また，自分たちの指導や援助について見直すことができました。

Ⅴ　成果と課題

１．研究の成果

(1)　小学校から

・　主体性の捉え・・・授業参観，保育参観，エピソード検討会での，具体的な子どもの姿を基にした話し合いから主体性を捉えることができました。

・　具体的な児童の話題・・・保幼の時代の姿を知ることで，小学校での指導に活かすことができました。

・　子どもたちの交流のねらいと様子・・・年下の人と関わるという相手意識を持つことで，めあてを持って活動に向かう姿が見られました。

(2)　保幼から

・　個の姿から探る・・・保幼の卒園生を抽出し，同じ子どもを継続して見ました。保幼で育った主体性は，学校で安定感を持つことで発揮され，教師の援助や友達との関わりの中で更に伸びていくことを目の前で確かめ感じることができました。

・　相互理解を図る・・・施設見学や行事，保育，授業を参観して率直に話し合うことができました。

・　互恵性のある交流・・・事前打合せ・事後討議を持ち，交流のねらいを明確にし，子どもの育ちを確かめられました。

２　本研究グループが考える今後の課題とは

・　保幼小の連携を円滑に進める・・・組織で動くことが必要です。

・　より多くの小学校教員の参画が望まれます。

・　継続的な交流のあり方を考えて取り組むことが必要です。

参考資料

Ⅲ　これまでの取組の概要

日程・内容（◎印：子ども同士のかかわり
・印：保育士，教員での研修）

平成22年

・ 5/13(木)　第1回会合
新メンバー顔合わせ，本研究の目的，情報交換
・ 5/21(金)　御池保育所見学
・ 6/ 4(金)　中京もえぎ幼稚園見学
・ 8/ 4(水)　御池保育所見学・討議
・ 9/ 7(火)　御所南小学校授業参観・討議
・ 9/ 9(木)　第2回会合
研究テーマ，目標，方法について
・10/ 2(土)　中京もえぎ幼稚園運動会参観
・10/14(木)　保幼交流事前打合せ
10/18(月)実施について
・10/16(土)　御池保育所運動まつり参観
◎10/18(月)　保幼交流（京都御苑にて）事後討議
・11/24(水)　中京もえぎ幼稚園研究保育
・11/25(木)　事後討議　11/24(水)の研究保育について
・12/ 4(土)
～10(金)　御池保育所造形まつり見学
・12/13(月)　保幼小交流事前打合せ
12/20(月)の交流について
◎12/20(月)　保幼小交流（御所南小学校にて）
・12/21(火)　事後討議　12/20(月)の交流について
・12/28(火)　エピソード検討会
中京もえぎ幼稚園の3，4，5歳児のエピソードから

平成23年

・ 1/12(水)　エピソード検討会　御池保育所の0，1，2，3，4，5歳児のエピソードから
・ 1/20(木)
～22(土)　中京もえぎ幼稚園園内展見学
・ 1/21(金)　第3回会合
小学校の視点を加えた「主体性」と「保幼小連携」について
・ 2/ 7(月)　第4回会合　合同研究会に向けて
・ 2/14(月)　アドバイザーからのまとめのポイント提示
・ 2/17(木)　第5回会合　合同研究会に向けて
・ 3/ 3(木)　合同研究会
・ 3/24(木)　第6回会合　平成23年度の年間計画
・ 4/12(火)　保幼交流事前打合せ　4/28(木)の実施について
◎ 4/28(木)　保幼交流　事後討議
・ 5/10(火)　御所南小学校の授業参観と教員・保育士間の討議
・ 5/16(月)　保幼交流事前打合せ　5/20(金)と5/24(火)実施について
◎ 5/20(金)　保幼交流（中京もえぎ幼稚園ゆり組が御池保育所へ）
◎ 5/24(火)　保幼交流（中京もえぎ幼稚園すみれ組が御池保育所へ）
・ 5/25(水)　保幼交流事後討議　5/20(金)と5/24(火)実施について
・ 6/30(木)　第7回会合　第2回合同研究会に向けて
・ 7/ 4(月)　保幼交流事前打合せ
7/11(月)実施について
◎ 7/11(月)　保幼交流（中京もえぎ幼稚園にて）
・ 7/13(水)　保幼交流事後討議
・ 8/ 1(月)　第2回合同研究会
・ 8/17(水)　第2回合同研究会後の研究の再考と保幼3，4，5歳児のエピソード検討会
・ 8/31(水)　エピソードから主体性を捉える
・ 9/ 8(木)　小学校のエピソード検討会と三者が考える主体性について
・ 9/12(月)　主体性の捉えについて
・ 9/21(水)　主体性の捉えについて
・10/26(水)　御所南小学校の授業参観と抽出児のエピソードについて
・11/ 1(火)　小学校の抽出児のエピソード検討会
・11/10(木)　報告会に向けて
・11/14(月)　報告会に向けて
・11/21(月)　保幼小交流事前打合せ　11/25(金)実施について
◎11/25(金)　保幼小交流（京都御苑にて）　事後討議
・12/ 1(木)　保幼小交流のエピソード検討会と報告会資料の検討
・12/15(木)　保幼小交流事前打合せ　12/19(月)実施について
◎12/19(月)　保幼小交流「あきとなかよし　ごしょのもり」事後討議と今年度の反省と課題

【保幼小連携研究プロジェクト】

―京都市錦林保育所・コドモのイエ幼稚園・京都市立第三錦林小学校グループ―

Ⅰ　研究主題と設定理由

１　研究主題

「相互の成長を育み，見守る保幼小連携」

２　設定理由

(1)地域の状況

錦林保育所とコドモのイエ幼稚園は，共に第三錦林小学校区にあります。

第三錦林小学校は大正 12 年に第三錦林尋常小学校として創立，錦林保育所は大正 13 年に公託児所として隣保館との複合施設として開設，コドモのイエ幼稚園は大正 15 年にキリスト教精神に基づき，創立者が「子どもたちが安心して笑顔で楽しく過ごせるような場所(園)であってほしい」という願いを込めて創立されました。

この小学校区においても，少子化，核家族化が進み，かつて子どもたちを見守り育んでいた地域のコミュニティの活力の低下や,家庭での教育機能の弱体化が著しくなってきています。

そのような状況を背景として，それぞれの立場から「地域の子どもたちを，地域の財産として捉え，地域ぐるみで健やかな成長を見守っていこう」と保育所保育指針・幼稚園教育要領・小学校学習指導要領が改訂された平成 21 年 3 月に三錦子育てネットワークが立ち上がりました。

＜参考＞　三錦子育てネットワーク所属団体名

錦林東山民生児童委員協議会	浄楽民生児童委員協議会	ひまわり保育園
吉田山保育園	コドモのイエ幼稚園	永観堂幼稚園
第三錦林小学校	左京区役所	左京子ども支援センター
錦林保育所	白川児童館	左京保健センター

(2)主題設定までの経過と理由

研究プロジェクトの実施以前から,三錦子育てネットワークという既存の活動があったことで,研究プロジェクト立ち上げ当初から,三者の交流がスムーズに進んできています。

しかし，保育者や小学校教員が情報交換をする中で，互いを理解していたつもりだっただけかもしれないという思いが高まってきました。

また，連携にとって重要な相互理解の不足も改めて強く感じたことから，広く浅く連携するのではなく，一人ひとりの子どもに寄り添った保育・教育の連携をすることが大切であると再考しました。

そして，子どもに寄り添う保育者・小学校教員も，子どもの心の成長を育み，子どもの

姿を通して成長できる存在であるのではないかという思いで，連携し合い，相互に高め合っていこうという願いから研究主題を「相互の成長を育み，見守る保幼小連携」としました。

Ⅱ　研究内容と研究方法

１　平成 22 年度研究内容

(1)　保幼小の相互理解を図る。
(2)　保幼及び保幼小の交流を通して子どもの育ちを探る。
(3)　保幼小で考える研究主題の検討
(4)　合同研究会[＊参照]後の研究の再考

２　平成 23 年度研究内容

(1)　幼小連携計画を基に実施し，交流の意義を考察する。
(2)　交流から見られる一人ひとりの心の育ちを探る―エピソード検討会を通して―
(3)　保幼小連携で何が大切なのかを検討する。

３　平成 22 年度研究方法

(1)　保育士，教員間交流を通して（実態，課題，めざす子ども像，研究主題等についての協議）
(2)　施設見学，保育，行事の参観及び参観後の研究討議
(3)　幼児，児童の交流活動と事前・事後討議

４　平成 23 年度研究方法

(1)　幼児，児童の交流活動と事前・事後討議
(2)　保幼抽出児のエピソード検討会（毎回の交流を通して）

［＊合同研究会］

「保幼小連携研究プロジェクト」2 グループの進捗状況を報告し合い，互いの研究テーマや方法，内容などを参考に，自グループの研究内容を再考し，研究に活かすことを目的に，平成 22 年 3 月に「合同研究会」を，平成 23 年 8 月に「第 2 回合同研究会」を実施しました。

Ⅲ　これまでの取組の概要

１　日程・内容（◎印：交流　・印：保育士，教員での研究）

(1)　平成 22 年度の取組

・ 5/19(水)　第 1 回会合　保幼小連携研究プロジェクトの目的確認
・ 6/ 7(月)　幼稚園見学
・ 7/27(火)　保育所見学
・ 9/ 8(水)　第 2 回会合　情報交換，研究の方法について
　　保幼交流事前打合せ（10/26(火)実施について）

◎10/26(火)　保幼交流「吉田山散歩」
・11/ 8(月)　第 3 回会合　研究主題についての討議，保幼交流事後討議
・12/20(月)　第 4 回会合　保幼小交流事前打合せ（1/20(木)実施について）
合同研究会に向けて（報告内容の検討）
・ 1/ 7(金)　保幼小交流事前打合せ（1/20(木)実施について）
◎ 1/20(木)　保幼小交流　「給食」（小学校 1 年生との交流）
・ 1/21(金)　第 5 回会合　保幼小交流事後討議
・ 2/ 7(月)　第 6 回会合　合同研究会に向けて（報告内容の検討）
保幼交流事前打合せ（2/22(火)実施について）
◎ 2/15(火)　幼稚園見学（保育所が「劇遊びはっぴょうかい」を見学）
◎ 2/22(火)　保幼交流「ドッジボール」（保育所園庭において）
・ 2/25(金)　第 7 回会合　保幼交流事後討議，合同研究会に向けて（最終打合せ）
・ 3/ 3(木)　合同研究会
・ 3/ 9(水)　第 8 回会合　研究の再考

(2)　平成 23 年度の取組

・ 4/20(水)　第 9 回会合　研究の方向性と具体的な取組計画の協議
研究主題の再考
・ 4/27(水)　第 10 回会合 保幼交流事前打合せ（5/9(月)実施について）
◎ 5/ 9(月)　保幼交流「吉田山散歩」
・ 5/18(水)　第 11 回会合 保幼交流事後討議，エピソード検討会（「吉田山散歩」から保育所のエピソード）
◎ 6/ 6(月)　小学校運動会見学（保育所が見学）
・ 6/13(月)　第 12 回会合 エピソード検討会（「吉田山散歩」から幼稚園のエピソード),保幼小交流事前打合せ(6/23(木)実施について),
保幼交流事前打合せ（7/6(水)実施について）
◎ 6/23(木)　保幼小交流「運動あそび」（小学校３年１組との交流，道徳の時間を利用）
・ 6/29(水)　第 13 回会合 保幼小交流事後討議
エピソード検討会（「運動遊び交流」から保育所・幼稚園のエピソード）
◎ 7/ 6(水)　保幼交流「プール遊び」
・ 7/25(月)　第 14 回会合 保幼交流事後討議
保幼小交流事前打合せ（9/6(火)実施について）
・ 8/ 1(月)　第 2 回合同研究会
・ 8/26(金)　第 15 回会合 エピソード検討会（「プール遊び」から保育所・幼稚園のエピソード），保幼小交流最終打合せ

◎ 9/ 6(火)　保幼小交流「給食」(小学校３年２組との交流)
・10/14(金)　第 16 回会合 保幼小交流事後討議
保幼小交流事前打合せ（11/24（木)実施について）
・11/11(金)　第 17 回会合 研究報告会に向けて（報告内容の検討)
◎11/24(木)　保幼小交流「きせつとあそぼう」(小学校１年生との交流，生活科を利用)
・11/29(火)　第 18 回会合 保幼小交流事後討議
研究報告会に向けて（当日資料の検討と読み合わせ)
◎12/ 9(金)　保幼小交流[給食]（小学校１年１組との交流)
◎ 1/13(金)　保幼小交流[給食]（小学校１年２組との交流)
◎ 2/ 7(火)　職業体験（6 年生が保育所・幼稚園を体験)
◎ 2/27(月)　保幼交流（錦林保育所がコドモのイエ幼稚園へ)

２　平成 22 年度の取組内容

(1)　保幼小の相互理解を図る。

９月　第２回会合　討議内容

立ち上げ当初，保育所・幼稚園が思う連携は“小学校生活がスムーズに迎えられるようになるために，小学校のことを知りたい”ということでした。

- 最近の保護者の様子から，親同士のつながりが希薄化しているように感じます。しかし，子どもへの期待は大きく，それゆえに子どもは自分に自信が持ちづらい面があるのではと感じます。
- 就学時健診等で，流れが見通せない我が子の姿に気付かれ，小学校生活に不安を抱える保護者もいます。
- 就学時健診や半日入学などの時は，保育所や幼稚園でどのような経験をしているかが分からずに受け入れています。小学校としても保育所や幼稚園の取組は知りたい部分です。
- 自分で考えなくても親が先に手伝ってしまうという子どもの姿があるので，受け身になってしまうことがあります。
- 戸外で遊ぶことが少なく，お稽古事に追われている子どもも多いです。
- “じっと座っていられない”という姿や“人の話を最後まで聞けない”という姿がありますが，そのような姿は日々の小学校生活の中で慣れていくものではないかとも考えます。この研究プロジェクトでは，子どもの姿を通して見えてくる課題に対して，どのような内容について研究していくべきかを考えなければならないのではないでしょうか。

(2)　保幼及び保幼小の交流を通して子どもの育ちを探る。

10 月　保幼交流「吉田山散歩」

日　時　　平成 22 年 10 月 26 日（火）9 時 45 分～11 時 00 分
場　所　　吉田山
内　容　　散歩
対象児　　保育所の 5 歳児と幼稚園の 5 歳児

（事後討議から）

交流から見えてきた子どもの姿について話し合う。

［子どもの様子］

◎　保育所の子どもたちについて

・　自己紹介は，恥ずかしくて元気には話せていなかったです。

◎　幼稚園の子どもたちについて

・　子ども同士で関わりを楽しんでいましたが，相手の様子をうかがいながら遊んでいる姿が見られました。

［自園(所)との相違点］

◎　保育所から

・　周りの様子を見ているということもあると思いますが，一人ひとりが落ち着いているという印象を感じました。

◎　幼稚園から

・　人懐っこさを感じました。
・　場に動じないというような“強さ”を感じました。

1 月　保幼小交流「給食」（小学校 1 年生との交流）

日　時　　平成 23 年 1 月 20 日（木）11 時 25 分～13 時 30 分
場　所　　第三錦林小学校　1 年生の教室
内　容　　給食
対象児　　保育所 5 歳児と幼稚園 5 歳児と小学校 1 年 1 組と 2 組

小学校のねらい

・　保育所・幼稚園の園児たちと交流をし，来年度一緒に学校生活を送る子どもたちと仲良くなる。
・　学校生活の楽しさを伝える。

[スケジュール]

時間	当日の流れ	園児	1 年生
11：25	学校集合	靴を履きかえる	1 組と 2 組に分かれる
11：30	教室集合	それぞれの教室へ	園児を迎える
11：45	給食準備	机上の準備	給食準備

11：55	配膳開始		配膳をする
12：20	いただきます		
12：55	返却	1 班から順番に食器返却	
13：05	ごちそうさま		
	昼休み	班ごとに運動場へ遊びに行く	
13：20	教室へ	チャイムの合図で教室に戻る	教室に戻る
13：25	感想交流	給食交流の感想を言う	
13：30	さようなら		40 分までに食器返却

（事後討議から）

初めての保幼小の交流でもあり，事後討議では「小学校から見た保育所・幼稚園の子どもの姿」「保育所・幼稚園から見た子どもの心の動き」など，話し合いの中でエピソードがたくさん出てきました。

- 当日を迎えるにあたり，1 年生だけでなく他の学年の子も保幼の子どもたちが小学校に来るのを楽しみにし，交流に向けて一緒に準備をしてくれていました。
- 今回，一人ひとりの様子を見ていると，自分の思いが言えない子，例えば自分が困ったときに自分で言えない子，忘れ物をしたときに言えない子，友だちとけんかをしたときに自分の思いが言えない子などが 1 年生になっても個々の課題になるのではないかと思いました。
- 給食では“ほうれん草”の苦手な子どもが，食べられず涙が出てきたときに，隣に座っていた 1 年生の男の子がその子の姿に気付き「無理しなくていいよ」と優しく言葉をかけてくれていました。食べられないことを自分では緊張して小学校の先生に言いに行けないだろうと思っていたら，保育者が一緒に行かなくても一人で伝えに行っていました。自分の思いを伝えることが苦手な子だったので，初めて一人で思いを伝えに行った姿を見て驚きました。
- 日常の生活の中だったら泣き止むという姿は見られず，長い時間泣いてしまうのですが，今回は泣き止み，残りを食べ出したという姿から「無理しなくてもいいよ」と言葉をかけてくれた 1 年生の男の子の何気ない優しさが，本人にとっては“食べられない”と気持ちがめげるのではなく“もう少し頑張って食べてみよう”という気持ちにつながったのではないかと感じ，子ども同士が関わることのすばらしさが見えた出来事でした。
- 担任が後日，園児たちにどんなことが嬉しかったのかなど具体的に感想を聞くと「給食が終わってグランド（校庭）に出たときに，（広すぎて）誰がどこにいるのか探しているうちに時間（昼休みの 10 分間）が過ぎた。部屋の入口が分からず悩んでいたときに，お兄さんやお姉さんが教えてくれて嬉しかった。」「給食当番のエプロンが（1 年生が着ているのを見て）どうやって着るのか分かった。」「（食器を

返すとき）牛乳パックの片付け方が分からない時に，１年生が教えてくれてうれしかった。」など“そんなふうに感じていたんだな”とこちらが思うくらい子どもたちは様々な場面で多くのことを感じていたようで，いい体験ができたと思います。

・　また，今回の交流は保護者にとっても安心感につながっています。それは，前日に今日の給食交流のことを伝えると，日頃の子どもの様子から小学校に対する我が子の気持ちが分からないところがあるので，小学校の生活を体験することで就学に向けての我が子の気持ちに変化が見えるかもしれないと，とても期待をしていました。迎えの時に楽しんでいた子どもの姿を伝えると大変喜んでいました。このような機会は親の安心にもつながったように思います。

・　１年生の“はじめのあいさつ”はしっかり話せていて驚きました。あいさつしていた二人のうち，一人の子は卒園児で，とても成長を感じました。

・　好き嫌いから給食に関してとても不安になる子が多いので，あえて事前には当日のメニューを知らせず，事後，親に献立表を渡しました。日頃の弁当では好きな物や食べ慣れている物が多くなっています。そういった面で幼稚園の子は小学校に行っても給食で気持ちの不安が出てくるのではないかと察するところがあります。今回，小学校の給食を通して“食に対して意欲がない”という姿が見られたことから，この体験をきっかけにして保護者に働きかけて食に対する親の意識を変えていきたいと思いました。

・　小学校の子でも苦手なメニューの日は３時間目くらいから泣き出す子もいます。高学年になると徐々に苦手な物も食べてはいけるのですが，１年生の間は「食べられる？」と聞きながら減らすことも多いです。

・　気になる子で言えば，日常の流れが一つでも変わるとパニックになることがあるので，就学前に連携を持ち一人ひとりの子どもの姿について話し合っていくことは大切だと思っています。

・　気になる子だけでなく，日常の子どもたちの姿から“自分で見通しをもって行動する”ということが弱いと感じています。小学校生活を体験するなどの交流は改めて必要性を感じました。これをきっかけに連携の充実を望んでいます。

(3)　保幼小で考える研究主題の検討

11･12 月　第３回･第４回会合

（討議内容）

この時点での研究主題は，保幼小連携にとって重要な相互理解を改めて強く感じたことから「健やかな子どもの育ちに必要な保幼小の相互理解」としました。

以後，３月の「合同研究会」後の研究の再考の中で，研究主題「相互の成長を育み，見守る保幼小連携」へと変わっていきます。（Ⅰ研究主題と設定理由の２(2)主題設定までの経過と理由　参照）

・　一人ひとりの生きる力を大切にしていこうと思うと，周りの連携も大切だと考えます。子ども自身の育ちを考えたとき，保護者支援も大きいです。また，地域とのつながりを通して子どもが育っていくということもあります。研究プロジェクトの話し合いの中で，保育所，幼稚園とも，まずは“小学校生活がスムーズに迎えられるように”という思いがありますが，「生きる力」を大切に考えた研究にもなればとも思います。

・　自園は第四錦林小学校，第三錦林小学校に分かれるという地域性があります。そんな中で，この地域性をどう活かしていくかということにも目を向けた研究プロジェクトにしていきたいという思いがあります。この地域の特性，特徴の中で育つ連携にすることが大切だと思います。地域性の中で共通したものを出して行けるようにしたいです。

(4)　合同研究会後の研究の再考

アドバイザーの鯨岡峻先生からいただいた，本グループの研究の視点について二つのポイント

1)　二つのグループの発表から，地域の文化差や保護者層や保護者の価値観の違いが見られる。このグループでは，まずは子どもたちの家庭的な背景を議論していくことが大切ではないか。

2)　連携を考えるときに「学びの連続性」のような行動面，認知面での連続性を中心に考えるのか，それとも，心の育ちを中心に連携を考えるのかでは，連携の考え方そのものに大きな違いが生まれる。

研究の再考

（討議内容）

研究方法として，保育所・幼稚園からエピソードを出し合い，一人の子どもの心の育ちの連続性に焦点を当てて研究を進めていこうということになりました。

・　御池保育所・中京もえぎ幼稚園・御所南小学校グループと違うところは小集団ということもあり，このグループの特徴でもある部分です。第三錦林以外の小学校へ入学する子にしても，一緒に入学する友達がいなくて一人で行く子も少なくありません。そのことを考えると，小学校が子ども一人ひとりにとって憧れの場であったり，安心できる場であることが子どもにとっても親にとっても大切であると感じます。

・　子どもたちはいろいろな背景を抱えており，その子たちが小学校に集まるので，お互いに背景を大切に考えた連携にしていきたいです。研究プロジェクトを受けたときは交流ばかりに目がいっていましたが，お互いを知ることができ，学びにつながったことも多いです。今後は「子どもの心の育ち」を大切にした連携を考えていきたいです。

・　研究方法として，子どもが抱えている背景や姿が保育所，幼稚園によくいそうだという子どもに焦点をあててエピソードを出し，交流の中でその子の姿や心の変容に目を向け，考察していくこととします。

３　平成 23 年度の取組内容

(1)　保幼小連携計画を基に実施し，交流の意義を考察する。

保幼小連携計画　［報告会配布資料 2－2 参照］

子どもたちの姿について，小学校との交流でどの様な心の変容が見られたかなどを追っていきたいという保育所･幼稚園の思いを受けて，小学校から年間を見通した「連携計画」の提示がありました。

（討議内容）

1)　6 月・9 月の交流は 3 年生と実施

［理由］・　4 月に入学したばかりの 1 年生は，小学校生活に慣れることが中心にあり，保育所･幼稚園の子どもとの交流は難しいのではないかと考える。秋までは 2･3 年生との交流とする。

・　2 年生には錦林保育所の修了児がいないこともあり，保育所・幼稚園ともに修了児がいる 3 年生と決め，修了児の育ちも見つめながら相互の育ちを育む交流とする。

2)　交流後には，毎回，保育所と幼稚園からエピソードを持ち寄る。

［方法］・　幼稚園からＡ児とＢ児，保育所からＣ児の交流の中でのエピソードを毎回出し，検討会を設ける。

6 月　保幼小交流「運動遊び」:教科(道徳)：小学校 3 年生との交流

日　　時　　平成 23 年 6 月 23 日（木）11 時 25 分～13 時 30 分
場　　所　　第三錦林小学校　体育館
内　　容　　運動遊び
対 象 児　　保育所 5 歳児と幼稚園 5 歳児と小学校 3 年 1 組
保幼のねらい　小学校へ訪問し，親しみを持つこと。
小学校のねらい　幼児との交流を通して相手のことを思いやり，進んで親切にする心情を養うこと。

［展開］

学習活動	主な発問(○)と予想される子どもの反応((・)子どもたちが考えました)
1 交流のねらいを知る。 意欲	○はじめのあいさつをする。 ・(中略)

	・交流を通して，仲良くなって小学校に早く入学したいと思えるようにいっしょに活動します。（子どもの言葉で）
２ゲームを行う。 方法・出会い	○ジャンケン列車の説明をして，ゲームを始める。 ・ルールを伝えるためには，やって見せたらわかるね。 ・ジャンケンの前に，名前を言うと仲良くなれるね。 ・負けて後ろにつながるときは，しゃがんだら小さい子もやりやすいね。 ・小さい子が先頭の方が喜ぶよ。代わってあげよう。 ○ころがしドッジボールの説明をして，ゲームを始める。 ・（中略） ・ゆっくりやさしく投げたらよけられるね。 ・自分たちが逃げるときは，少しゆっくり逃げてあげよう。 ・少しくらいコートに入っても許してあげよう。 ○こおり鬼の説明をして，ゲームを始める。 ・（中略） ・小さい子をできるだけ助けよう。 ・やさしく追いかけないと，ぶつかったら危ないね。 ・行ってはいけない所に逃げたら，きちんと注意しよう。けがをすると困るからね。
３交流で感じたことを話し合う 波及	○交流で思ったことや終わりの言葉を言う。 ・（中略） ・やさしくして喜んでくれたら，私もうれしかった。

（事後討議から）

３年生との交流は，１年生とはまた違った良さが保幼小それぞれの子どもたちの姿に見られました。

- ３年生の様子は，小さい子に譲ってあげるとか，優しくしてあげるという様な日々の同年齢との関わりの中では見られない姿がありました。小学校の子どもたちも関わりを楽しんでいた様に思います。今回の経験が，今後いろいろな場面で活かしていければと考えます。
- ゲームでは，スピードに遅れる保幼の子どもを皆で待っていてくれたり，わざとボールをゆるく転がしてくれたりと保幼の子どもたちが楽しめるように，優しくしてもらっていると感じました。
- ３年生から「はちまき，ぼくが締めましょうか」と言ってくれて，様子を見ていると「痛いか？きついか？」と聞きながら子どもたちにはちまきをつけてくれてい

ました。3 年生も手が震え，緊張しながら関わっていた様子を見て，その姿が可愛く，一生懸命さが伝わり，そこからお互いに緊張が解けて，“交流がスタートした”という兆しが見えたと感じました。

・　当日，3 年生が企画，進行している姿に，子どもたちは“小学校の先生ではなく，お兄さん，お姉さんが進めている”ということにびっくりしていた様子でした。「～できましたか」と聞かれて子どもたちは緊張して答えていました。でも，それが“あこがれ”につながっていったと思います。

・　「ジャンケン列車」のゲームで，小学生の後ろにつながって歩くときでも「ぼくのここを持ちや」と手を持って洋服を持つように教えてくれたりしたことが，子どもたちには嬉しくて，そこから緊張が解けたこともあったように思います。

9 月　保幼小交流「給食」（小学校 3 年生との交流）

日　時　　平成 23 年 9 月 6 日（火）11 時 30 分～13 時 30 分
場　所　　第三錦林小学校　ランチルーム
内　容　　給食
対象児　　保育所 5 歳児と幼稚園 5 歳児と小学校 3 年生

（事後討議から）

・　この日を境に“学校に早く行きたい”という気持ちが芽生えています。「給食っておいしいで～」と笑顔で他児に話している子どももいました。

・　外国籍の子が普段は日本語をあまり話さないのに，家で体験したことを親にたくさん話していたらしく，お母さんがとても喜んでいました。

・　3 年生では，“友だちのいいところ”を感想で聞くと「園児一人ずつに付き添って教えてあげようと思った子はすごい」「分からないことを優しく教えていた」等友だちについて改めて気付くことができました。また，自分にとっても更に自信につながったと感じます。

・　3 年生の子どもたちが園児に対して“手伝ってあげればいい”ではなく“本人が自分で出来るように手助けしよう”という気持ちで接している姿に驚きました。

11 月　保幼小交流「きせつとあそぼう」：教科（生活科）：1 年生との交流

日　時　　平成 23 年 11 月 24 日（木）9 時 40 分～11 時 30 分
場　所　　第三錦林小学校　体育館
内　容　　1 年生の子どもたちが作った秋のものを使ったおもちゃやゲームで遊ぶ。
対象児　　保育所 5 歳児と幼稚園 5 歳児と小学校 1 年生

［交流計画］

学習活動	内容
1　はじめの言葉	・　1年生の児童が，交流会の始まりのあいさつをする。 ・　交流会の流れを説明する。
2　合奏発表	・　どんぐりなど身近なものを使った自作の楽器を使って合奏をする。
3　合奏体験	・　園児が合奏の体験をする。
4　お店紹介	・　どんなコーナーがあるのか，紹介する。
5　あきとあそぼう	・　小グループごとにコーナーを回る。 ・　途中でトイレ休憩を入れる。
6　感想交流	・　園児に交流会の感想を聞く。
7　おわりの言葉	・　1年生の児童が交流会の終わりのあいさつをする。

（事後討議から）

・　1年生は，初めは緊張している様子だったが，時間が経つにつれて園児に優しく話しかけている姿を見て，成長を感じました。

・　感想交流の時に自ら手をあげ，「小学校の皆さんと遊べたのが嬉しかった」と言っていました。帰り道，保育者が「話すのドキドキしなかった？」と聞くと「だって，楽しかったんやもん。あのお兄さん好きや」と言っていました。本当に楽しかったのだと思います。

12月　保幼小交流「給食」（小学校1年1組との交流）

日　時　　平成23年12月9日（金）11時30分～13時30分
場　所　　第三錦林小学校　ランチルーム
内　容　　給食
対象児　　保育所5歳児と幼稚園5歳児と小学校1年1組

（事後討議から）

・　大人と子ども，子どもと子ども等，それぞれに関わりがあったと思います。

・　自分(1年生)が，毎日の小学校生活の中で言われていたことや覚えたことを，「今，頑張ってしているんだよ」と教えてくれる姿に，成長を感じました。

・　1年生との給食交流は，この時期で良かったです。

1月　保幼小交流「給食」（小学校1年2組との交流）

日　時　　平成24年1月13日（金）11時30分～13時30分
場　所　　第三錦林小学校　ランチルーム
内　容　　給食

対象児　　保育所５歳児と幼稚園５歳児と小学校１年２組

（事後討議から）

- 保育所と幼稚園の子どもたちにとっては，今回の給食交流は３回目であり，１年生に頼らずに，自分で給食時の流れが見通せるようになってきている姿がありました。
- その姿から，交流を重ねることが，小学校生活への安心につながるのだと感じました。

２月　職業体験：教科（総合的な学習の時間）…6年生が保育現場を体験

６年生が，総合的な学習の時間を使って，保育所と幼稚園の「職業体験」をしています。内容は，保育補助として，子どもと一緒に遊んだり，生活習慣の補助などを行ったりします。

(2)　交流から見られる一人ひとりの心の育ちを探る―エピソード検討会を通して―

［エピソード検討会］

本グループでは，家庭的な背景を抱えている子どもが多く，研究の中では背景にも目を向け，話し合いを深め，子どもたち一人ひとりを保幼小で見守っていこうと話し合ってきており，エピソードの中でも踏み込んだ話になることもあります。毎回，交流後には，エピソード検討会をしてきました。

６月　保幼小交流「運動あそび」から

○　A児のエピソード

＜エピソード＞

自園を出発する時から散歩交流の時以上に表情が硬く，大変緊張した様子のA児。園出発前から“心ここにあらず”という感じで身支度がなかなか進みませんでした。声をかけると，ハッとした表情で身支度をしました。行く道でも無言で，一緒に手をつないで歩く友だちの言葉も耳に入っていないようでした。

小学校に到着し，緊張はさらに高まったようで，顔をしかめていました。靴を脱ぎ，体育館で迎えてくれた小学生から逃げるように急ぎ足で担任について行きました。

最初に舞台正面でグループごとに整列しますが，全然違う場所に並びました。A児はそれに気付かずそのまま立っていましたが，友達に指摘され，慌ててうろうろしました。担任に声をかけてもらい，ようやく自分の場所に並びました。

グループ分けのはちまきを3年生につけてもらいました。始終緊張していましたが「痛くない?」

との３年生の優しい声かけに「大丈夫」としっかり答えていました。次に，３年生の挨拶や説明を聞くため，校庭に向かって整列しましたが，また違う場所に並んでしまいました。友達に指摘され，慌てて自分のグループの友達を探し，急いで並びに行きました。ゲーム「ジャンケン列車」では少し恥ずかしそうにし，自園の友達を探してジャンケンしますが，次第に表情は和らいでいました。

ころがしドッジボールでは，１回目，緊張し十分楽しめていない様子でしたが３年生にボールを譲ってもらうと嬉しそうに転がしていました。

２回目，３年生を当てる時には，自園の友達が転がす時に「○○ちゃん，頑張れ！当てて！」と声をかける姿も見られました。こおり鬼をする頃には，園で遊ぶ時のように元気よく走る本児の姿が見られました。

最後，感想等意見交換する時には，自ら手を挙げ「ころがしドッジボールが楽しかったです」と大きな声で発表することもできました。大勢の人の前でなかなか積極的に話をすることのないＡ児ですが，それができて満足そうでした。

中間休みに校庭へ出る前，舞台から降りる時きちんと階段から降りている姿を小学校の○教諭が気付いて「Ａ君，舞台から飛ばんとちゃんと階段から降りてえらいなぁ。約束ちゃんときいてたんやなぁ。」と声をかけてくれた言葉がけに大きくうなずいて嬉しそうなＡ児の姿がありました。帰園後，他の学年の教師にも「学校行ってきたよ！大きいで！」と自信を持って話していました。

＜考察＞

初めて経験することにとても戸惑い不安を持つＡ児。積極的に何でも取り組んでいくタイプではありません。年中児までは，決まった友達も無く，自信を持てることも見付かってはいませんでした。しかし，年長になってからとても気の合う友達ができ，その友達との関わりが密になるにつれ，苦手な事に取り組もうとしたり，少し活動的になってきたりと園の中で変化が見られるようになりました。その時期に交流が始まりました。

５月には，普段一緒にいる先生や友達以外の初めての出会いに緊張しました。その中でも保育所の友達には関心があるようで，緊張して，後から歩いてくる保育所の友達が来るまで立ち止まって待っていたりと言葉をかけたりはしませんが，“同じグループ”という意識があり，構わず先に行ってしまった自園の友達に「先に行ったらだめですよ～」と声をかけている姿も見られました。自分と同じように保育所の友達も緊張している様子を感じ，少し安心した一面も見ることができたのではないでしょうか。思っていた以上に保育所の友達に関心を持っていたのが分かる機会となりました。その経験があっての小学校での交流。さらに広い学校の空間と大きな集団に驚き緊張も強かったですが，３年生の優しい対応や自主的に行動する姿に憧れと安心感をＡ児なりに持つことができたと考えます。また，小学校の先生に褒めてもらったことも，本児にとってとても嬉しい出来事であったのか，行きの大きな緊張がうその様でした。

７月６日には保幼のプール交流があり保育所へ行きましたが，Ａ児の得意なプール遊びということもあり，初めて行く場所にもかかわらず，行きから大変楽しみにし，保育所のプールでも伸

び伸びと遊ぶ姿が見られました。話はしたことはありませんでしたが，知った顔の先生や友達がいることや，小学校での経験が本児には今も良い方向に活きてきています。今後も，様々な経験の中で本児が考え，自信を持って取り組んでいけるよう，見守っていきたいです。

今後の交流を通しても，小学校は「楽しい場所」「優しいお兄さんやお姉さん，認めてくれる先生がいる」ことを，子どもたちなりに感じ，就学を迎えていくことができたらと思います。そのために，保幼小はもちろん，地域の見守る大人がしっかりと子どもたちを見つめて情報交換をしていきたいと思います。

（エピソード検討会）

- 交流開始時には緊張しすぎて，話しが聞こえないくらいの姿がありましたが，時間が経つにつれて自ら手を挙げて大きな声で感想を発表したり，園に帰ってからも嬉しそうに伝えていたという様子から，A児にとっては場に慣れていくことが安心材料につながるのではないかと感じます。自分で体験すると納得できたり，見通しが見えたりするのではないでしょうか。
- A児にとっては交流の回数を重ねていくことが小学校への憧れや期待にも結びつくのではないかと思います。今回の交流の中で，自らが手を挙げ，発表したという今まで見られなかった姿があったということが，保幼小交流を取り組んだことで見られた姿だと思うと，子どもたちの育ちにとって交流という経験がとてもいいものになっているのだと感じました。
- 階段から降りる姿を小学校の先生に「えらいなぁー，階段使って降りてくれて。ちゃんと約束守ってくれているねぇ」と言って褒めてもらったことがとても嬉しかったようでした。“小学校の先生に褒めてもらった”ということがA児の自信につながったのだと思います。A児の母も，小学校の体験はとても喜んでいます。

○　C児のエピソード

＜エピソード＞

期待を持って楽しみにしていた小学校との交流。3 年生の道徳の時間の交流でした。3 年生や幼稚園の友達を前に，周りを見たり緊張している様子のC児。同じグループのD児の手を引き，味方を隣に引き連れるようにして活動していました。ころがしドッジボールをしていた時には，最後までがんばって逃げていたものの終了 5 秒前に当たってしまい，アウトになりました。この時最後まで残っていたのは幼稚園のB児。彼はその前にしていたじゃんけん列車でも最後まで残っていた友達でした。

次に保育所と幼稚園の子どもたちがボールを転がす番がやってきました。意識していた友達が隣にいて，思うようにボールが取れず，悔しい表情を見せることも少しずつ増えていきました。それでも要領を得てくると積極的に楽しんでいました。じゃんけん列車，ころがしドッジボールを楽しみ，最後にこおり鬼をすることになり，意欲的に参加して楽しんでいたC児。しかし今度

も最後の最後に同じ保育所の友達にタッチされ，凍ったまま終了となり，ここでも悔しそうな表情を見せました。しかし，結果はＣ児のいるチームの勝利で終わったのでＣ児としては満足そうでした。

中間休みの時間になり，姉がＣ児を誘いに体育館に来ると，そのまま１年生の友達と一緒に校庭へ行き遊びました。姉が得意としているうんていを２度目のチャレンジで渡り切ると嬉しそうな表情で自信に充ち溢れていました。

保育所に帰る道中「最初はドキドキしたけど楽しかった」「ころがしドッジボールとこおり鬼が楽しかった」と話していました。自信をつけたうんていの話を，保育所に着くや否や保育士に自分からどんどん話に行きました。荷物を置き，園庭に出ると片付けの時間がやってきました。「Ｃ何にも出してへんし」と少し怒った様子で言うので「そうやなぁ，でもみんなで片付けたら早くお部屋入れるのとちがうかなぁ。」と言うと少しして何も言わずに園庭中のおもちゃを片付け始めました。「Ｃくん，使ってへんのに片づけてくれてありがとう。」と言うと「いいよ」と言い，最後まで片付けていました。その後，Ｃ児が保育者を呼び，「今日のこと（小学校で遊んだこと，うんていのこと，片付けのこと）みんなに言っといてな」と耳元で話しました。保育者が「嬉しいこと，Ｃくんから話したらいいやん」と言うと「えーだって恥ずかしいし。」と言いながらも嬉しそうなＣ児の姿がありました。

＜考察＞

この日，地域の仲良しの友達の通う小学校に遊びに行くことを楽しみにしていたＣ児。幼稚園の友達も一緒だよと話したときには「わかった」と言いましたが，ウキウキしている様子ではありませんでした。前回の吉田山での交流散歩の時に思い通りにならなかった経験がわずかに尾を引いているように感じました。

実際に小学校に行くと，小学校，幼稚園の友達が保育所の子どもたちよりも多いこともあってか少々圧倒されている様子で，Ｄ児を引き連れることで安心しようとしている姿がありました。いつも保育所の中ではお山の大将のような存在のＣ児。ルールが気に入らなければ自分ルールに変えてでも勝とうとする姿も目立ちます。しかし今日は憧れの小学校で遊ぶ特別な日，初めての友達や，まだあまり知らない友達を前にＣ児なりにルールを守って遊ぼうとする姿や，悔しげな表情を見せることもしばしばありました。ころがしドッジボールでは幼稚園のＢ児を意識しすぎてなかなかボールに触れないこともあり，友達のボールを取ったりイライラしている姿もありましたが，ここでもＣ児なりにルールを守って遊ぶ姿がありました。

保育所に帰ると年下の友達が遊んだ園庭のおもちゃを自ら片付けてくれました。小学校のお兄さん，お姉さんと一緒に遊ぶ中で憧れを持ったり，優しくしてもらったり教えてもらったことは彼の中でいい経験として残っていると感じた一場面でした。

今回の交流の経験の中で嬉しいことも悔しいことも，普段なかなか経験しないようなこともたくさんあったと思います。その中でうんていを渡れたことは彼の自信になりました。優しくしてもらったことを経験し，それを自分も保育所で友達に対してしたことは，保育士に「ありがとう」

と言われてもまだ自信ではないのかもしれません。そう感じたのはC児の「今日のことみんなに言っといてな」という一言でした。褒められるようなこと，かっこいいことをした時には友達，保育士，保護者，みんなに話をしないとなかなか自分の自信になりにくい所があると感じています。

認められたい気持ちからがんばることも多いC児ですが，ありのままの自分のことを自信を持ってどんどん好きになってほしいと思います。

研究を通してC児の姿を保幼小で見守っていこうと話し合っています。子ども一人ひとりの姿を話し合っていくことが大人同士の連携を深めていくことにもなってきています。そして連携を深めていくことで保幼小で同じ方向を向いて，子ども一人ひとりの姿を大切に見守ることにつながってきているのではないかと感じています。

(エピソード検討会)

- C児がB児を意識している姿は傍にいた保育者も感じるものがありました。しかし，A児にボールをとられたときに怒るのではなく，がまんして何も言わずに黙っている姿を見て“ここはいつもと違う場所なんだ”ということを感じていたのではないかと思います。
- 「ころがしドッジボール」でボールに当たった時にちょっと考えて「オレ，あたったし」というような感じで円の外に出て行く姿を見て，“ルールを守っているなぁ”と感じました。保育所の中だったら，ボールにあたっても「オレ，あたってへんし」と言ってルールを守っていなかったと思います。
- 考察にある「うんていを～自信になりにくい所があると感じています」という文章から，自信を持ちにくいC児がどのようにすれば成長し，自分に自信が持てるようになっていくのかを考えていければと思います。
- 「今日のことみんなに言っといてな」と保育者に頼り，自分で伝えられない姿から，C児が自分の言葉で言えるようになるにはどのような経験が必要なのでしょうか。それにはC児が抱えている背景もあるのではないでしょうか。人に対する信頼や，認められるという経験が今まで少なかったのではないでしょうか。そのC児を保育者，小学校教員が同じ目線，同じ思いで見守っていくことで，人との信頼関係ができ，自信へとつながっていくのではないでしょうか。今，C児にできることは，姿を追いながら，保育者，小学校教員で認めたり，褒めたり，思いを受け止めて，C児に言葉として伝えていくことではないでしょうか。保幼小が一緒になって一人の子どもの思いを大切にできるということが“連携があるからこそ”になるのではないでしょうか。
- できたことに対して認めるだけでなく，C児のありのままの姿を受け止めるということが大切だと捉えます。

６月と９月の２回の保幼小交流で，A児，C児の姿にどのような変容がみられたかについてエピソードを出し，子どもの心の育ちや交流の成果について確認しました。

交流を重ねることが，子どもの自信や安心につながっていることはもちろんですが，保護者にとっても小学校への安心につながっていると話し合いました。

○　A児のエピソード

＜エピソード＞

6 月の遊び交流では自園を出発する時から表情が硬く，大変緊張した様子のA児。小学校に到着し，緊張はさらに高まったようで体育館で迎えてくれた小学生から逃げるように急ぎ足で保育者について行ったほどでありました。

運動遊び交流では，はじめ緊張し十分楽しめていなかったA児が，こおり鬼をする頃には，園で遊ぶ時のように元気よく走るA児の姿が見られました。最後に感想等意見交換する時には，自ら手を挙げ「転がしドッジボールが楽しかったです」と大きな声で発表していました。大勢の人の前でなかなか積極的に話をすることのないA児ですが，それができ満足そうでした。

また，中間休みに校庭へ出る前，舞台から降りる時きちんと階段から降りている姿を小学校の先生に褒めてもらったことも，本児にとってとても嬉しい出来事でありました。

帰園後，他の学年の教師にも「学校行ってきたよ！大きいで！」と嬉しそうに話す姿があり，行きの大きな緊張がうその様でした。

2 回目の保幼小の交流である給食交流を楽しみにしていたA児。しかし，牛乳が苦手な事を気にしていました。登園時に「牛乳苦手やねん。でも，がんばって飲むし！練習してきたんや」とはりきった様子がありました。学校に到着しても，顔見知りの先生を見つけるととても嬉しそうにしていました。

3 年生に誘導され，グループごとに自己紹介が始まりましたが，皆恥ずかしがって話そうとしなかったところ「ぼくから自己紹介します！」と進んで手を挙げました。その表情は自信に満ちていました。隣合わせの 3 年生たちともすぐに打ち解けてとても楽しく会話を交わせていました。

いよいよ給食をいただく際，A児の苦手な野菜も入っていましたが「がんばって食べる！」と一生懸命なA児。時間がかかってしまい，様子を見て声をかけましたが「食べられる」「もう少し」と園では見られない姿でした。帰る前の感想を言い合う時も，積極的に話し，3 年生とも握手を交わして別れました。

＜考察＞

少しの機会でしたが，2 回の交流はA児にとって自信につながる大きな機会となりました。

時間が経つにつれて少しずつ新しい場に慣れ，その中で新しく出会った友達や先生との関わりの中でドキドキしたけれども嬉しかったこと，認めてもらって嬉しかったことは何にもかえがたい自信と安心につながったと考えます。

1 回目の交流で小学校への憧れや期待が芽生え，その後の生活の中でも友達の中で意見を言うことが増えてきました。交流を通して，A児の両親に，少しずつ自分の力で取り組もうとする姿やA児の小学校に対する期待感もその都度伝えると，両親もとても協力的で，A児の様子を見守りつつ，適度な距離で励ますようになりました。

2 回目の交流では，苦手なことに対してもA児自身で積極的に取り組もうとする姿や，初めて出会った 3 年生とも進んで関わる姿など，大きな成長を見ることができました。保育者自身驚き

と喜びを感じましたが，両親にとっても同じで，A児の意欲に家族で寄り添っています。何事も取り組むならきちんと取り組みたいA児は，朝早く起きることができるように目覚まし時計を使ったり，先にも述べたようにできる時は朝，苦手な牛乳を少し飲んで来たり，できる範囲で小学校に向けてA児なりに準備をするようになり，現在も継続して取り組んでいます。うまくいかないこともありますが，取り組もうとするA児の姿を両親もとても喜んでいます。両親にとっても，小学校に対する不安が大きかったですが，今は，少しずつ期待につながっていると考えます。

○　C児のエピソード

＜エピソード＞

第１回の遊び交流では，小学生や幼稚園の友達を前に緊張している様子でした。同じグループの保育所のD児の手を引き，味方を隣に引き連れるようにして活動し，嬉しい時，困った時，緊張している時にも保育者と目を合わせていました。交流の中では楽しいことばかりではありませんでした。ころがしドッジボールでは終了５秒前にあたってしまい，こおり鬼でも最後につかまってしまいました。悔しい思いを経験しながら，保育者を心の杖にルールを守り，遊びに参加していました。

第２回の給食交流では，これまでの交流で顔を覚えた小学校の先生が声をかけてくださり，リラックスした表情で楽しそうに話していました。しかし，ランチルームに入るのは初めてのことであり，だんだんと口数が減り，緊張していく様子が見られました。他児がどのようにしてランチルームに入っていくのかを見てから，同じ保育所の友達を自分よりも先に行くよう促し，後から入室していました。

着席してからも保育者の顔を見ては微笑んだり，へんな顔をして見せたり，口をパクパクしながら何かを伝えようとしたりとそわそわし，緊張している様子が伝わってきました。

給食の時には３年生にツナサンドの作り方の見本を隣で見せてもらい，食後に何をして遊びたいかなどを話しながら楽しく食べていました。両隣に居た３年生とすっかり打ち解けた様子でした。

給食後，本児のグループは高鬼をして遊ぶことになり，３年生にルールを教えてもらい，ルールが分かると，同じグループの保育所の友達にも教えてあげていました。その時，保育者と目が合うと「先生はあっちにいといて。C，高鬼してくるわ！」と校庭に笑顔で走って行きました。

[考察]

１回目の交流では思うようにいかず，イライラしたり，悔しげな表情を見せることもありましたが，C児なりにルールを守って遊ぼうとする姿を見ることができました。交流後，保育所でも自分中心のルールで遊ぶ姿がほとんど見られなくなってきています。交流の中で本児が成長したことを感じました。また，年下の友達が遊んだ園庭のおもちゃを自ら片付ける姿も見せていました。小学生と一緒に遊ぶ中で憧れをもったり，優しくしてもらったことが本児にとっていい経験となり，自分が心地よかったことを自分からしようという気持ちが芽生えたことを嬉しく感じま

した。
　給食交流の時には小学校の先生にも慣れてきていましたが，まだまだ保育者の存在を心の支えにしている様子が感じられました。しかし，給食で小学生と仲良くなる中で，遊びになるとＣ児から校庭に走って行きました。本児が緊張を乗り越え，また一つ成長したことを嬉しく思いました。今回の交流終了後には，保育所でおやつの配膳などを率先して手伝う姿がありました。小学生にしてもらったことを今度は自分からしている姿にも成長を感じました。
　「学校って楽しい。早く学校に行きたいなあ」と学校に行くことを楽しみにできるようになったＣ児。学校との心の距離が短くなった交流であったと思われます。

Ⅳ　２年間の成果

- 三錦学区では子どもを地域の宝として大切にするために，まず，大人がつながったネットワークがあり，それを基盤に，交流保育を始めることができました。
- 本グループでは，“心の育ちを大切に”した連携を考えるための手法として，保育所，幼稚園から抽出児を決め，毎回の交流を通して，エピソード検討会をし，一人の子どもの姿を追ってきました。エピソード検討会を通して，地域の子ども一人ひとりの育ちを保幼小が理解し，同じ目線で姿を追っていきながら，交流を重ねていくことで，小学校への不安が安心へ，また，憧れや期待へと変わっていく子どもの心の育ちが明確になり，その様子から「自信や安心感をもつと，生活が変わったとしても乗り越えていける力につながる」ということを実感できました。エピソード検討会を取り組んできたことは，一人の子どもの心を保幼小が一緒に話し合い，考察できる良い手法でありました。
- また，エピソード検討会などで同じ子どもたちの姿を追って研究していくことで，相互が納得できたことは“就学前の子どもたちにとって，子どもを見守る大人の連携と，小学校との交流を重ねることが子どもたちの安心につながる”ということです。
- 研究プロジェクトを通して，小学校との交流は，授業の中の一環として考えていくことが大切だということを保育所・幼稚園が理解できました。そのような中で，小学校から，年度初めに，交流の実施方法，具体的な内容，時間配分等を含めた連携計画の提示があったことが非常に大きく，そのことで保幼小交流が実施可能になったと考えます。
- 小学校にとっては，就学前の子どもたちの様子を知る機会となり，小学生にとっても，小さい子どもに対する接し方の意識の芽生えがあったことは成果だと考えられます。
- 家庭的な背景を抱えている子どもたちが多い中，小学校への安心感や期待感をもって就学を迎えられることが，子どもたち一人ひとりの心にとって，いかに大きなことかということも改めて感じました。
- そして，保幼小の交流は，子どもだけではなく，保幼の保護者にとっても小学校への不安の軽減になることを実感しました。交流時の様子を伝えることで，我が子の姿を見つめ直したり，子どもの心の育ちに寄り添おうとする姿が保護者にも見られるようになってきたことは，“親育ち”にもつながったのではないかと考えます。

・　研究プロジェクトを通して，保育者・小学校教員のつながりも深まってきたということは，“一人ひとりの子どもの成長を一緒に見守っていける”という貴重な財産となりました。

Ⅴ　考察と今後の課題

・　三錦学区では，地域のネットワークがあり，その中で保幼小が関わりを持っていたことが“心の育ち”を考えた連携へとスムーズにつながるきっかけになったのではないかと感じています。ネットワークが立ち上がっていない地域において，保幼小連携を考えていく場合であっても，“子どもの心の育ちを考えた連携”が必要なことではないかと，本研究を通して考えました。

・　継続してエピソード検討会を実施し，子どもの心の動きに気付き，子どもの姿から学び安心・自信・小学校への憧れがもてるような交流の方法を研究することができたことは，保育者，小学校教員も成長した部分であると思っています。エピソード検討会は，今後の保幼小連携の一つの方法だと考えます。

・　本グループでは，小学校から，“連携計画”の提示があったことが保幼小交流の大きな要になりました。保育所，幼稚園側にとって「小学校と交流を持ちたいが，どのような形が良いのだろうか」と迷うことが多い中，保育所，幼稚園が保幼小連携に求める思いを小学校が受け止め，どのような形であれば，授業の中で交流が持てるのかを考慮し，年度初めに“連携計画”の提示があったことにより，保幼小が見通しを持って交流を実施できたと考えています。しかし，毎回の交流計画や実施方法は小学校からの提案が中心であり，保育所，幼稚園側から提案をするということが少なかったという現状もありました。このグループの課題としては，研究を通して「小学校との連携は授業の中で考えていくことが効果的である」という交流の方法が分かってきた中で，今後，更に保幼小連携を深めていくためには，小学校からの提示を待つのではなく，保育所，幼稚園からも交流の取組方法や計画の提示ができるようになることだと考えています。

Ⅵ　保幼小連携研究プロジェクトに参加して

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　京都市錦林保育所　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

保幼小連携研究プロジェクトに参加させていただき，多くの学びを得ることができました。

保幼小は同じ地域の中にあり，ネットワーク会議などでのつながりはあったものの，お互いの保育・教育内容については分かっていなかったというのが正直な感想です。エピソード検討をする中で，子どもの気持ちの動き，保育者の心の動きが共有でき，お互いの理解につながったと思います。地域社会の抱える問題などにも話を広げることができ，現状や問題点などもタイムリーに気さくに話ができる関係になることができました。

小学校には交流を授業の一環として捉えていただき，年度初めに連携計画を出していただいたことで，保幼小の交流がスムーズに行うことができたと思います。

保育所を修了した子もおり，子どもたちの育ちや保育の検証にもなると，毎回うきうきした思いで参加できました。3 年生の年長児へのさりげない思いやりの言葉や接し方，先を見通した配慮のある動きなどの成長を目の当たりにし，嬉しい思いになりました。

年長児は，緊張で固まっていたはじめの交流から回を重ねるごとに，自信や安心感を持つことができるようになってきていることが，とてもよく分かりました。保幼小連携によって得られた安心感，自信は小学校という違う環境に行っても，学びの原動力になると思います。

昨年 3 月に東日本大震災があり，物や利便性などはなんと，はかないものなのかと言うことを実感しました。保幼小の連携と地域の見守りの中で得られた子どもの心の育ちと，人と人の結びつきこそが地域の財産であると思います。

今後も地域ぐるみで子どもの健やかな成長を見守っていくために，今回の研究プロジェクトで得られた保幼小の顔の見えるつながりを一層強いものにしていきたいと思っております。保幼小連携研究プロジェクトに参加させていただき，ありがとうございました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　コドモのイエ幼稚園　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

2 年間，保幼小連携研究プロジェクトに参加させていただき，ありがとうございました。お声をかけていただいた時には，正直うまく連携していけるのかとても不安で，園の中でも“「うまく連携する」ということがどういうことなのか”を考えていくことから始めたほどでした。連携において，子ども同士の関わりを第一に考えるのではなく，保幼小がお互いを知り，理解し合うことから始めようと初めの 1 年間は，私達大人が行き来をすることが中心となりました。園の現状や普段の保育・教育をする上で悩んでいること，地域で取りざたされている問題など些細なことから話をしていく中で，お互いが歩み寄り，気さくに関われる関係を持つことができました。

2 年目に当たる今年度は，ネットワーク会議などでのつながり以上に具体的にお互いの現状や思いを知り合った上で，子どもたち同士の交流が行われました。小学校に，年度当初に年間

の連携計画を行っていただき，保幼小の交流がよりスムーズに目的を持って行うことができたのではないかと思います。大人同士が安心し信頼し合う中で，子どもたちは，緊張しながらも少しずつ初めての出会いや経験にも自信や安心感を持つことができるようになりました。お互いに理解し合うことなしでは，この連携がここまで良い方向には向かなかったのではないかと確信します。

この連携を通して，小学校のお兄さん・お姉さんにかけてもらった何気ない優しい言葉や接し方，小学生の授業での取組を目にし，年長児にとって小学校が「憧れの場」になりました。そして自分たちの園が地域の中に存在することを再認識し，大人も子どもも新たな出会いの中で安心したり，理解し認め合うとても貴重な体験をすることができました。また，ある程度保育経験を積み，自分なりの保育感が定まり，自園の教育として当たり前に思っていることがそうでなかったり，保育所や小学校の先生方の意見や取組を討議の中で聞かせていただくことで自分の保育・自園の保育の振り返りをする機会にもなりました。今後もこのつながりを大切にし，関係をより深めていきたいです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　京都市立第三錦林小学校　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

小学校側としての成果は，入学前の子どもたちの様子を見ることによって，どのような活動ができるのか，または難しいのかなどを知ることができ，小学校へ入学してからの指導に活かすことができるということです。具体的な実態を見ることができれば，必要な支援をよりきめ細やかに考えて指導することができ，よりスムーズに小学校生活になじめると考えます。

3 年生と行った道徳の時間の交流では，入学前の子どもたちがみんなと一緒に活動する様子や友達同士で関わる様子などを見て，今後の集団遊びを行う際の具体的な声かけや支援の方法が見えてきました。例えば電車ごっこをするときに，ぎゅっと力を入れすぎて肩をつかんでしまったり，洋服を引っ張ったりしてしまう恐れがあること，ボール遊びのルールの難易度やそれを理解するのにかかる時間などです。それらの実態が目安として分かっているのといないのとでは，入学後の指導の際の支援や声かけが大いに変わってきます。事前に知っておくことによりそれを活かした指導が可能であると考えます。また，片手でボールを持ち，手首を上手に使いながら投げることができるなど，とてもボール運動の能力が高い子ども，鉄棒に身軽に跳びつき，くるくると回転できる子どもなども見られました。このように優れている実態も知ることにより，よりその能力を活かす授業なども事前に考えることができます。

3 年生の給食交流では，配膳中や食後などに「座って待つ」ということが難しい子どもたちもいること，お箸やスプーンの使い方なども子どもによって得意不得意は様々であること，などたくさんの実態を知ることができました。また今回の交流の日は「ツナにマヨネーズを混ぜてパンに挟んで食べる」というサンドイッチの給食だったために，入学前の子どもたちは，3 年生のお手本を見てサンドイッチを作る方法は分かっても，なかなか上手にパンに具を挟むことができず，手伝ってもらう様子が多く見られました。そのような実態を知ることにより，1 年生に入学したときの給食時間の具体的な支援が分かります。

また，小学校の先生の名前と顔を覚えることができ，自分の思いを話せる雰囲気ができたことも成果としてあげられます。はじめは緊張し，なかなか笑顔も見られず，会話も少ししかできない様子がありましたが，回数を重ねるごとに笑顔も増え，小学校の先生の顔を見ると駆け寄ってきて進んで話しかける姿も多く見られるようになりました。このことによって子どもたちは小学校へ入学することへの不安が和らぎ，また小学校側としても，保育所や幼稚園での様子に近いより普段の子どもたちの姿を見ることができたと考えます。

小学校の子どもたちにとっての成果は，自分より小さい入学前の子どもに対する接し方の意識に変容があったということです。今回の交流を通して小さい子どものお手本になり，「気持ちを考えて優しくしてあげる」というめあてを自ら持ち，行動したことで「自分たちもお兄さん，お姉さんだ」という自覚を持つことができたと考えられます。さらに，同学年同士の普段の生活では見られない姿に子ども自身が気付けたということです。交流時，クラスの友達が小さい子に接する姿をお互いに見て，日常生活では見られない違う視点からの友達の優しさ，気遣い，よさに気付くことができたと考えます。また入学前の子どもたちにとっては，小学校に入ったら 45 分間集中して授業を聞き，友達の話を聞き，学習しなければならないことや，小学校の先生や児童，小学校の雰囲気なども知ることができ，小学校生活に向けての不安が払拭され，心の準備ができたのではないでしょうか。

今後も 1 年生との給食交流や 6 年生の職場体験などいくつかの交流を計画していますが，幼稚園，保育所と連携しながらよりよい成果が出るよう，実践していきたいと思います。

研究プロジェクト報告会配布資料

保幼小連携研究プロジェクト
京都市錦林保育所・コドモのイエ幼稚園・京都市第三錦林小学校グループ

相互の成長を育み，見守る保幼小連携

京都市子育て支援総合センターこどもみらい館
保幼小連携研究プロジェクト

１　研究主題の設定理由

・地域の子どもたちを財産と捉え，
地域ぐるみで成長を見守っていこう

三錦子育てネットワーク

相互理解の重要性
一人ひとりの子どもに寄り添った
大人同士の連携

２　具体的な取組概要

■保育所・幼稚園の見学から

・生活の違いについて
・子どもの気になる姿

合同研究会から

■アドバイス
このグループで大切なこと

子どもたちの家庭的な背景を
議論していくこと

目に見える部分だけでなく，
心の面を大切に考えた連携

研究の再考

保育所・幼稚園からエピソード
を出し合い，一人ひとりの子ども
の育ちの連続性に焦点をあてる

⇩

研究プロジェクト２年目へ

連携計画をたてる

６月～９月　　３年生との交流
・１年生は小学校生活に慣れることが中心
↓
１１月～3月　１年生との交流

修了児の育ちも見つめながら
相互の育ちを育む

交流「道徳の時間」

運動遊び交流

保育所・幼稚園
小学校へ訪問し
親しみをもつこと

小学校
幼児との交流を通
して相手の事を思
いやり進んで親切
にする心情を養う

エピソード

６月の運動遊び交流

９月の給食交流

A児のエピソードから

C児のエピソードから

３　研究の考察

形だけの交流にとらわれるのではなく，子ども一人ひとりの心の育ちに目を向けた交流へ

・保育所・幼稚園
→保育・教育を検証する機会
・小学校
→就学前の子どもたちの姿を知る貴重な体験

保幼小の子どもたちの育ちの場

小学校との連携や交流を重ねることが子どもたちの安心につながる

- 緊張を自分で乗り越えられる力は自信につながる
- “自分でできた”という気持ちが達成感につながる
- 自信を持つことができると次へとつながる力が湧いてくる

４　研究の成果と課題

成果

■小学校との交流は・・・
　連携計画の提示があったことで交流ができ，子どもたちの心の成長や変容に気付くことができた
　　→小学校への安心感や期待感

■小学校からは・・・

・就学前の子どもたちの様子が分かる

・小さい子どもに対する接し方の意識のめばえがあった

■保幼小の大人同士のつながり
　一人ひとりの子どもの成長を一緒に見守る

課題

環境や生活などという“目に見える部分”だけの連携ではなく

心の育ち

自信や安心感をもつと，生活が変わったとしても乗り越えていける力につながる

連携の大切さ

まずはつながること

⇩

子どもの成長を一緒に喜び合える関係へ

資料２－１

京都市子育て支援総合センターこどもみらい館 研究プロジェクト報告会
保幼小連携研究プロジェクト
―京都市錦林保育所・コドモのイエ幼稚園・京都市立第三錦林小学校グループ―

研究主題

「相互の成長を育み，見守る保幼小連携」

Ⅰ　はじめに（主題設定の理由）

１　地域の状況等

錦林保育所とコドモのイエ幼稚園は，共に第三錦林小学校区にあります。

第三錦林小学校は大正 12 年に第三錦林尋常小学校として創立，錦林保育所は大正 13 年に公託児所として隣保館との複合施設として開設，コドモのイエ幼稚園は大正 15 年にキリスト教精神に基づき，創立者が「子どもたちが安心して笑顔で楽しく過ごせるような場所（園）であってほしい」という願いを込めて創立されました。

この小学校区においても，少子化，核家族化が進み，かつて子どもたちを見守り育んでいた地域のコミュニティの活力の低下や，家庭での教育機能の弱体化が著しくなってきています。

そのような状況を背景として，それぞれの立場から「地域の子どもたちを，地域の財産として捉え，地域ぐるみで健やかな成長を見守っていこう」と保育所保育指針・幼稚園教育要領・小学校学習指導要領が改定された平成 21 年 3 月に三錦子育てネットワークが立ち上がりました。

＜参考＞　三錦子育てネットワーク所属団体名

錦林東山民生児童委員協議会	浄楽民生児童委員協議会	ひまわり保育園
吉田山保育園	コドモのイエ幼稚園	永観堂幼稚園
第三錦林小学校	左京区役所	左京子ども支援センター
錦林保育所	白川児童館	左京保健センター

２　主題設定までの経過と理由

研究プロジェクトの実施以前から，三錦子育てネットワークという既存の活動があったことで，研究プロジェクト立ち上げ当初から，三者の交流がスムーズ進んできています。

しかし，保育者や小学校教員が情報交換をする中で，互いを理解していたつもりだっただけかもしれないという思いが高まってきました。

また，連携にとって重要な相互理解の不足も改めて強く感じたことから，広く浅く連携するのではなく，一人ひとりの子どもに寄り添った保育・教育の連携をすることが大切であると再考しました。

そして，子どもに寄り添う保育者・小学校教員も，子どもの心の成長を育み，子どもの姿を通して成長できる存在であるのではないかという思いで，連携し合い，相互に高め合っていこうという願いから研究主題を「相互の成長を育み，見守る保幼小連携」としました。

Ⅱ　研究内容と研究方法

１　平成 22 年度研究内容

(1)　保幼小の相互理解を図る。

(2)　保幼及び保幼小の交流を通して子どもの育ちを探る。

(3)　保幼小で考える研究主題の検討

(4)　合同研究会［＊参照］後の研究の再考

２　平成 23 年度研究内容

(1)　保幼小連携計画を基に実施し，交流の意義を考察する。

(2)　交流から見られる一人ひとりの心の育ちを探る―エピソード検討会を通して―

(3)　保幼小連携で何が大切なのかを検討する。

３　平成 22 年度研究方法

(1)　保育士，教師間交流を通して（実態，課題，めざす子ども像，研究主題等についての協議）

(2)　施設見学，保育，授業，行事の参観および参観後の研究討議

(3)　幼児，児童の交流活動と事前打合せ・事後討議

４　平成 23 年度研究方法

(1)　幼児，児童の交流活動と事前打合せ・事後討議

(2)　保幼抽出児のエピソード検討会（毎回の交流を通して）

［＊合同研究会］

『保幼小連携研究プロジェクト』２ グループの進捗状況を報告し合い，互いの研究テーマや方法，内容などを参考に，自グループの研究内容を再考し，次年度の研究に活かすことを目的に，平成 22 年 3 月に「合同研究会」を，平成 23 年 8 月に「第 2 回合同研究会」を実施しました。

Ⅲ　これまでの取組の概要

１　日程・内容（◎印：交流　・印：保育士，教員での研究）

(1)　平成 22 年度の取組

・5/19 (水)　第 1 回会合　保幼小連携研究プロジェクトの目的確認
・6/7 (月)　幼稚園見学
・7/27 (火)　保育所見学
・9/8 (水)　第 2 回会合　情報交換，研究の方法について
　保幼交流事前打合せ（10/26 (火) 実施について）
◎10/26 (火)　保幼交流「吉田山散歩」
・11/8 (月)　第 3 回会合　研究主題についての討議，保幼交流事後討議
・12/20 (月)　第 4 回会合　保幼小交流事前打合せ（1/20 (木) 実施について）
　合同研究会に向けて（報告内容の検討）
・1/7 (金)　保幼小交流事前打合せ（1/20 (木) 実施について）
◎1/20 (木)　保幼小交流「給食」（小学校 1 年生との交流）
・1/21 (金)　第 5 回会合　保幼小交流事後討議
・2/7 (月)　第 6 回会合　合同研究会に向けて（報告内容の検討）
　保幼交流事前打合せ（2/22 (火) 実施について）
◎2/15 (火)　幼稚園見学（保育所が「劇遊びはっぴょうかい」を見学）

◎2/22 (火)　保幼交流「ドッジボール」（保育所園庭にて）
・2/25 (金)　第７回会合　保幼交流事後討議，合同研究会に向けて（最終打合せ）
・3/3 (木)　合同研究会
・3/9 (水)　第８回会合　研究の再考

(2)　平成23年度の取組
・4/20 (水)　第９回会合　研究の方向性と具体的な取組計画の協議
研究主題の再考
・4/27 (水)　第10回会合 保幼交流事前打合せ（5/9 (月) 実施について）
◎5/9 (月)　保幼交流「吉田山散歩」
・5/18 (水)　第11回会合 保幼交流事後討議，エピソード検討会（「吉田山散歩」から保育所のエピソード）
◎6/6 (月)　小学校運動会見学（保育所が見学）
・6/13 (月)　第12回会合 エピソード検討会（「吉田山散歩」から幼稚園のエピソード），
保幼小交流事前打合せ（6/23 (木) 実施について）
保幼交流事前打合せ（7/6 (水) 実施について）
◎6/23 (木)　保幼小交流「運動あそび」（小学校３年１組との交流，道徳の時間を利用）
・6/29 (水)　第13回会合　保幼小交流事後討議
エピソード検討会（「運動遊び交流」から保育所・幼稚園のエピソード）
◎7/6 (水)　保幼交流「プール遊び」
・7/25 (月)　第14回会合　保幼交流事後討議
保幼小交流事前打合せ（9/6 (火) 実施について）
・8/1 (月)　第２回合同研究会
・8/26 (金)　第15回会合　エピソード検討会（「プール遊び」から保育所・幼稚園のエピソード），保幼小交流最終打合せ
◎9/6 (火)　保幼小交流「給食」（小学校３年２組との交流）
・10/14 (金)　第16回会合　保幼小交流事後討議
保幼小交流事前打合せ（11/24 (木) 実施について）
・11/11 (金)　第17回会合　研究報告会に向けて（報告内容の検討）
◎11/24 (木)　保幼小交流「きせつとあそぼう」（小学校１年生との交流，生活科を利用）
・11/29 (火)　第18回会合　保幼小交流事後討議
研究報告会に向けて（当日資料の検討と読み合わせ）
◎12/9 (金)　保幼小交流「給食」（小学校１年１組との交流）
◎1/13 (金)　保幼小交流「給食」（小学校１年２組との交流）
◎2/7 (火)　職業体験（6年生が保育所・幼稚園を体験）
◎2/27 (月)　保幼交流（錦林保育所がコドモのイエ幼稚園へ）

Ⅳ　成果と課題

1　研究の成果

・　三錦学区では子どもを地域の宝として大切にするために，まず，大人がつながったネットワークがあり，それを基盤に，交流保育を始めることができました。
・　エピソード検討会を通して，地域の子ども一人ひとりの育ちを保幼小が理解し，同じ目線で姿を追っていきながら，交流を重ねていくことで，相互が納得できたことは“就学前の子どもたちにとって，子どもを見守る大人の連携と，小学校との交流を重ねることが子どもたちの安心につながる”ということです。
・　研究プロジェクトを通して，小学校との交流は，授業の中の一環として考えていくことが大切だということを保育所・幼稚園が理解できました。そのような中で，小学校から，年度初めに，交流の実施方法，具体的な内容，時間配分等を含めた連携計画の提示があったことが非常に大きく，その事で保幼小交流が実施可能になったと考えます。
・　本グループでは，家庭的な背景を抱えている子どもたちが多い中，小学校への安心感や期待感をもって就学を迎えられることが，子どもたち一人ひとりの心にとって，いかに大きなことかということも改めて感じました。
・　小学校にとっては，就学前の子どもたちの様子を知る機会となり，小学生にとっても，小さい子どもに対する接し方の意識の芽生えがあったことは成果だと考えられます。
・　研究プロジェクトを通して，保育者・小学校教員のつながりも深まってきたということは，“一人ひとりの子どもの成長を一緒に見守っていける”という貴重な財産となりました。

2　本グループが考える今後の課題とは

・　人ひとりの子どもの心の育ちを大切に考えるためには，まずは，連携の必要性を感じ，どの様なつながりを考えていくのかが大切だと思います。
・　“心の育ちを大切に”した連携を考えると「自信や安心感をもつと，生活が変わったとしても乗り越えていける力につながる」ということが実感できるのではないでしょうか。
・　保幼小連携は，まずはつながることが大切だと思います。互いに足を運び，働きかけることでつながると，子どもの成長を一緒に喜び合える関係が得られるのだと本研究を通して私たちは確信し，願っています。

資料２－２

平成 23 年 5 月 18 日
京都市立第三錦林小学校

保幼小連携計画

・こどもみらい館と連携し，コドモのイエ幼稚園・錦林保育所・第三錦林小学校で交流する。

実施時期	学年	時間	教科・領域	内容
6 月 23 日（木）	3 年 1 組	2 校時（9：40～10：25） 昼間休み（10：25～10：40）	道徳 「相手のことを思いやり，進んで親切にする態度を養う」	ボールを使った運動（ころがしドッチやボール送りなど）を通して，相手のことを考えて一緒に楽しむ。
9 月 6 日（火）	3 年 2 組	給食（12：20～13：05） 昼休み（13：05～13：20）	給食	一緒に給食を準備したり，食べたりする。
11 月 24 日（木）	第 1 学年	2・3 校時（9：40～11：30）	生活科 「きせつとあそぼう」	秋見つけの学習で集めた落ち葉やドングリ，松ぼっくりなどを使って作った遊び道具で，一緒に遊んだり秋で見つけたことを教えたりなどする。
12 月 9 日（金）	1 年 1 組	給食（12：20～13：05） 昼休み（13：05～13：20）	給食	一緒に給食を準備したり，食べたりする。
1 月 13 日（金）	1 年 2 組	給食（12：20～13：05） 昼休み（13：05～13：20）	給食	一緒に給食を準備したり，食べたりする。
2 月 7 日（火）	第 6 学年	終日（9：30～14：00）	総合的な学習の時間 「職業体験」	保育補助として，子どもと一緒に遊んだり，生活習慣の補助などを行ったりする。

＊授業を伴う交流においては，事前に略案を保育所・幼稚園に送付する。
＊給食交流に際しては，事前に献立表を保育所・幼稚園に送付しておく。また，3 年 2 組が給食交流の際には 3 年 1 組も併用し，3 年 1 組はランチルームを使用する。1 年生についても同様にして給食交流を行う。
＊人数の確認
錦林保育所…児童 6 名・指導者 2 名
コドモのイエ幼稚園…児童 21 名・指導者 3 名
第三錦林小学校…1 年 1 組児童 22 名・1 年 2 組 21 名・3 年 1 組児童 20 名・3 年 2 組児童 21 名
こどもみらい館…職員 2 名

保幼小連携研究プロジェクトへのコメント

中京大学　　鯨岡　峻

１．本研究の意義

平成 22 年５月に発足し、２カ年間に亘って展開されてきた保幼小連携に関する本研究は、地域的背景の異なる２チームで取り組んだこともあって、この「連携」をどのように考えるのか、それを推進する上でどのような問題があるかを、具体的に浮き彫りにすることができたように思う。研究の経過は、発表資料にあるように、２チームがそれぞれに連携を考えるための主題を別個に考え、それに沿って、まずは保幼がお互いに交流することから始まり、次には学校との交流を図るというように、基本的には「交流」を中心に連携のあり方が模索された２年間だったと言えるだろう。

御所南小・中京もえぎ幼稚園・御池保育所からなるチームは、「主体性をつなぐ保幼小連携」という困難な主題を掲げて取り組み、保幼の卒園生を抽出して継続的に見ていくことを通して、保幼で培った主体性は小学校での安定感に繋がることを確かめることができた。また交流を具体的に展開する中で、保育側と教育側が同じ場面のエピソードを検討することを通して、互いの立場の違い、子どもの見方の違いを突き合わせ、相手の立場を尊重しながら、お互いの違いをしっかり認識することが連携の第一歩だという結論を得たことは、本研究の重要な意義の一つと考えられる。また、交流が子どもの心の育ちに繋がり、それによって交流の互恵性が確かめられるようになるためには、事前に計画をしっかり立てて、事前・事後の研修を丁寧に持つことが大切という結論も、今後の連携の具体的なあり方を考える上で重要な結論であったといえるだろう。

錦林小・コドモのイエ幼稚園・錦林保育所からなるチームは、「相互の成長を育み、見守る保幼小連携」という主題を掲げて取り組んだが、このチームには「地域ぐるみで地域の子どもたちを育てていこう」という三錦子育てネットワークがあるという背景が大きな役割を果たしていた。つまり、保幼小に、それぞれの立場の違いを超えた、子どもを育てることに関する共通の姿勢があったということである。ここでも相互の交流が中心の展開であったが、「給食交流」など、保幼の子どもが学校に出かけて小学生と交流を図ったり、道徳の授業を交流の場にしたりすることを通して、保幼の子どもたちが学校に期待や憧れをもつ機会を実際に作ることができたことは、連携を具体的に考える上でも大きな意義をもつことであった。このチームでは学校側から年度初めに連携計画が出され、それに沿って交流が具体的に推進された。このことから、年度当初の学校側の計画が重要であるという結論が導かれている。またネットワークがあったから連携ができたという部分もあり、地域のネットワークがなければ連携は難しかったかもしれないという結論も、今後の連携を考える上に重要なヒントになるものではないかと思う。

このように、地域的な背景を異にする２チームによる本研究は、「連携」という難しい課題であったにもかかわらず、研究に参加した人たちの熱心な取り組みによって、一定の成果を挙げ、今後の連携の取り組みのあり方にいくつかの重要な手がかりを残してくれた。

２．「具体」の大切さ

連携の意義や研究の成果を大雑把にまとめると以上のようになるが、しかし、実際の研

究の最も重要な部分は、研究協議の場の生（なま）の声、交流の場での子ども一人ひとりの具体的な振る舞いや発言、つまり、さまざまなエピソードに示される子どもや保育者や学校の先生の振る舞いや発言にあったように思う。例えば、初めて保と幼が交流の機会を持ってみると、グループ決めなどに時間がかかるという具体的な子どもの姿が浮き彫りになる。そしてそれを具体的なエピソードで描き出してみると、そこには子どもの戸惑い、保育者の戸惑いなど、交流という言葉の背後にある現実の姿がうかがえ、それが交流の深まりと共に変化していくことが見えてくる。さらにそこには、保と幼の立場の違い、保幼と学校との文化の違いも露わになる。そうしたことが目に見えてくることこそ、交流や連携の意義なのだということが、そのエピソードから明らかになってくる。

あるいは、幼保の交流の場に参加した小学校の先生の「あまり関わり合って遊ぶ姿が見られなかったが」という発言に対して、保育側の先生たちは「子どもたちはしっかり相手を意識していた、自園に戻ってから話を聞いてみると、子どもたちがいろいろな所に目を向けていたことが分かった」と発言したが、このように子どもの見方の違いを具体的に浮き彫りにできたことが、もしかしたら本研究の最も大きな意義であったかもしれない。

３．これからの連携研究のために

保幼の側には、「どのように保育して小学校に子どもたちを送るか」、また小学校側は「どのように子どもたちを小学校に迎えるか」というように、就学を挟んで保幼の側と学校側には明らかな立場の違いがある。その違いを「連携」という言葉で繋ぐとき、最も陥り易い陥穽は、いかにスムーズに学校に繋ぐか、それゆえ、保幼の側が小学校に子どもを送るために何をしなければならないかと発想することだと思う。いま全国ではそういう流れで「連携」を考える動向が強いが、本研究がその陥穽に陥ることなく、まずは交流の実際を通して、それぞれの立場の違い、あるいは学校文化と保育文化の違いをお互いが認識し、それを尊重しながら、就学の前後をどのように繋ぐかを考え、しかもそれを子ども一人ひとりの心の動きを把握しながら考えようとしてことは、研究の方向性として間違っていなかったと考える。就学前と就学後のあいだにある文化の段差を解消する方向に向かうのではなく、どのようにすれば子どもがこの文化の段差を乗り越えていけるか、それの**鍵となるのはこれまでの遊びを中心とした保育で培った子ども一人ひとりの「自信・自己肯定感・信頼感」であり、学校への「期待と憧れ」である。**２チームが試みた抽出児のエピソードが示唆しているのはそのことだと思う。

そういう方向で連携を考えようとしていく上で、他に考えてみなければならないのは保護者の子どもの見方、子どもへの期待のあり方である。今回、２チームには地域的背景の違いがあると述べてきたが、それは保護者たちの子どもの見方、期待のあり方の違いでもあった。それが学校側の連携の姿勢にも反映され、交流を具体的に展開する上での保幼小間の意見の食い違い、お互いの思惑の違いを生んでいたように見える。そのことに鑑みれば、保護者対応が今後の連携研究の大きな課題であることが分かる。

さらに、小学校との交流の実際は、学校側がどのように交流を授業の年間計画に位置付けているかかかっている。そこに表れた学校側の姿勢の違いが結局は連携のありかたの違いをもたらしているように思われる。ともあれ、保と幼の交流が今回の研究を通してかなりの成果を挙げたことは、今後に明るい見通しを持たせてくれたように思う。

【子育て支援研究プロジェクト】

Ⅰ　研究主題と設定理由

１　研究主題

「保育園(所)・幼稚園だからこそできる子育て支援」

２　設定理由

(1)　研究メンバーの思い

立ち上げ当時，それぞれが“子育て支援研究プロジェクト”に求めた思いとして「子育てに悩む保護者の支援」,「家から出て来られない親子」,「我が子しか目に入らない親」,「虐待」,「地域のネットワークづくり」等，保育園(所)・幼稚園で，どのような支援ができるのか，保護者のニーズに対してどのように考えるのか，今求められている支援とはどういうものなのかなどを探っていきたいということでした。

(2)　主題設定までの経過と理由

研究を進める中で「どのような内容が支援につながるのかは，参加者のニーズを知り，内容を検討し，保護者が参加したいと思えるような取組にすることを考えていかなければならないのではないか」,「在園児と地域の子育て支援において，親の子育て不安に対して，これからどのように考えていけばよいのだろうか」という共通の課題が浮かび上がってきました。そして，保護者への支援だけではなく，子どもの姿に目を向けることで見えてきたことは，「親が望むサービスを提供する支援だけではなく，子どもを中心にした保育園(所)・幼稚園ならではの支援のあり方」を考えることの大切さでした。

Ⅱ　研究内容と研究方法

１　研究内容

(1)　各々の研究メンバーの保育園(所)・幼稚園で取り組まれている事業を伝え合い，相互理解を図る。

(2)　今必要とされる子育て支援とは何かを探り，保育園(所)・幼稚園を核とした子育て支援のあるべき姿を考察する。

①　「地域への子育て支援」について

②　「在園児への子育て支援」について

２　研究方法

(1)　子育て支援に関する通信やパンフレットを持ち寄り情報交換をする。

(2)　各々の研究メンバーが研究に求める内容を出し合い，方向性を探る。

(3)　子育て支援事業の見学と事後討議

(4)　子育て支援研修の受講

(5)　エピソード検討会

Ⅲ　これまでの取組の概要

１　日程・内容

(1)　平成 22 年度の取組

・ 1/24(月)　第 1 回会合
　・研究の目的，方向性について
　・情報交換と相互理解
・ 2/28(月)　第 2 回会合
　・持参資料の考察と相互理解
・ 3/23(水)　第 3 回会合
　・課題の抽出
　・研究のテーマ，ねらい，方向性についての討議

(2)　平成 23 年度の取組

・ 4/25(月)　第 4 回会合
　・課題の抽出
　・研究のテーマ，ねらいについての討議
・ 5/14(土)　修学院保育所地域子育て支援拠点事業[＊参照]「お父さんデー」見学
・ 5/17(火)　修学院保育所地域子育て支援拠点事業「赤ちゃんひろば」見学
・ 5/23(月)　第 5 回会合
　・修学院保育所地域子育て支援拠点事業見学を終えての事後討議
　・エピソード検討会
・ 6/ 2(木)　子どもを共に育む『親支援』プログラム「ほっこり子育てひろば」見学
　[＊＊参照]・テーマ「いつくしむ」　場所　こどもみらい館
・ 6/ 9(木)　子どもを共に育む『親支援』プログラム「ほっこり子育てひろば」見学
　・テーマ「親子でいっしょにあそぼう」　場所　こどもみらい館
・ 6/16(木)　子どもを共に育む『親支援』プログラム「ほっこり子育てひろば」見学
　・テーマ「自我のめばえと生活習慣」　場所　こどもみらい館
・ 6/27(月)　こどもみらい館共同機構特別研修受講
　・講座名「孤独と虐待　そして子育て支援」
・ 7/ 9(土)　佛教大学附属幼稚園園庭開放見学
・ 7/11(月)　第 6 回会合
　・佛教大学附属幼稚園園庭開放見学を終えての事後討議
　・「ほっこり子育てひろば」見学と，共同機構特別研修についての討議
　・エピソード検討会
・ 7/28(木)　第 7 回会合
　・9/8(木)中間報告会に向けて（報告内容の検討）
・ 8/ 5(金)　第 8 回会合
　・9/8(木)中間報告会に向けて（当日資料の検討）

・ 8/19(金)　第 9 回会合
　・9/8(木)中間報告会に向けて（当日資料の読み合わせ）
・ 9/ 5(月)　第 10 回会合
　・9/8(木)中間報告会に向けて（最終確認と当日の協議内容に向けての検討）
・ 9/ 8(木)　中間報告会　［＊＊＊参照］
・10/ 5(水)　第 11 回会合
　・中間報告会後の検討（研究の振り返りと再考）
・10/21(金)　第 12 回会合
　・エピソード検討会
　・1/27(金)報告会に向けて（報告内容の検討）
・11/ 4(金)　第 13 回会合
　・1/27(金)報告会に向けて（当日資料の検討）
・11/18(金)　第 14 回会合
　・1/27(金)報告会に向けて（報告内容の検討）
・12/ 8(木)　第 15 回会合
　・1/27(金)報告会に向けて（報告内容の検討）
・ 1/11(水)　第 16 回会合
　・1/27(金)報告会に向けて（報告内容の最終打合せ）

［＊保育所での地域子育て支援拠点事業とは］

保育所，児童館等の地域の身近な場所で，乳幼児のいる子育て中の親子の交流や育児相談，情報提供等を実施しています。

［＊＊子どもを共に育む『親支援』プログラム「ほっこり子育てひろば」とは］

京都市では，平成 20 年 10 月に，「子どもを共に育む『親支援』プログラム」プロジェクト会議を設置し，1 年半に及ぶ協議を踏まえ，平成 22 年 4 月から「ほっこり子育てひろば」を開始しています。

このプログラムは，「子どもを共に育む京都市民憲章」の趣旨を踏まえ，親自身が喜びと共に子どもを育んでいけるよう，「親としての心構えや必要な技術」を身につけるとともに，不安や疑問，悩みを乗り越えるためのプログラムです。

京都市では，様々な場で子育て支援をする関係者の皆様の御協力のもと実践の輪を広げ，親育ちや仲間づくりの場につなげているところです。

［＊＊＊中間報告会］

研究プロジェクトの立ち上げから平成 23 年 7 月までの取組内容をこどもみらい館企画推進会議研究・研修部会委員に報告し，今後の研究について考察することを目的とし，平成 23 年 9 月に実施しました。

２　研究実践から

(1)　各々の研究メンバーの保育園(所)・幼稚園で取り組まれている事業を伝え合い，相互理解を図る。各々の研究メンバーが研究に求める内容を出し合い，方向性を探る。

地域の親子から見えてくる課題に対して，研究したいこと
・　子育て支援事業に参加されない，支援を必要とする在宅の親への支援について ・　子育て支援事業に参加している親が，どのような思いで参加をしているのかを探りたい。 ・　ネットワークづくり(どのようなところがあり，どのようにすればつながっていけるのか) ・　親の不安感をなくしていくためにはどのようにすればよいか。 ・　子育て相談について保育園(所)・幼稚園としてどのように考えるか。 （悩みの多いもの：トイレットトレーニング，お箸の使い方，食事をあまり食べない，入園前でもおむつがとれない。） ・　子育て支援事業の参加者の声をどのように捉えるのか。 （子どもの遊び場がほしい，ママ友がほしい，保育園(所)の子どもとつながりたい。）

在園の親子から見えてくる課題に対して，研究したいこと
・　虐待を受けていると思われる子どもが多くなってきているように感じるので対応を考えたい。 ・　親への子育て支援をどのように捉えるのか。園として担任として重なる部分を探りたい。 ・　子どもにとっての本当の意味での子育て支援とは何か ・　親の子育て力の低下についてどのように考えるのか ・　親にとって安心して何でも話せるような存在とはどのような姿か ・　親が子育ての喜びを感じられる子どもの姿の伝え方とは ・　保護者のリラックスについて考える。

（討議内容）

「保育園（所）・幼稚園だからこそできる子育て支援」を考えていくためには，保幼の違いを知る，お互いを理解するということが大事だということ，そして，子育て支援で大切なことは，親が求めていることを感じ，支援していくことではないかということでした。

・　家庭訪問事業の実施から“地域の親子の中には話す人もいない孤立した人が多い”と感じます。担当者に自分の話を聴いてもらえるということだけで安心される様子があります。
・　事業担当者がいない中，クラス担任が保育の中でできる園庭開放の内容を考えています。
・　家庭訪問事業などがあるということは，思いもよらないことでした。
・　子育て支援とは，親の不安を共有するというだけではなく，子育ての楽しさを一緒に喜び合うことも支援であり，それは保育園(所)・幼稚園共に同じではないでしょうか。

・　参加するといろいろな情報が得られますが，参加しない人，できない人が参加しようと思える支援とはどのようなものなのだろうかと考えます。
・　事業は「在園児対象」「地域の親子対象」というように考えるのではなく，どちらも同じように子育て支援を考えていくことが大切だと考えます。
・　在園児の子どもの姿から親が「大きくなったらこんなふうになるんだ」と分かることや，子どもも，在園児との関わりや他のお母さんとの関わりを経験することを大切に考えると，担当者だけではなく，全職員で子育て支援を意識していくことが必要だと感じます。
・　在園児の姿では，子どもに言い聞かせられない親が気になります。他には，親同士の集団で一緒にいることのしんどさを抱えている姿もあります。“話を聞いてもらうだけでも”というのは，在園の親も同じ思いだと感じます。
・　“子育て支援”と“子育てサービス”の違いを理解することは大切です。ある事業の中で，子どもと少し離れることで親のリフレッシュができるのだと感じました。子育て支援で大切なことは，親が求めていることを感じ，支援していくことが，子どもの健やかな成長につながるということだと考えます。

(2)　今必要とされる子育て支援とは何かを探り，保育園(所)・幼稚園を核とした子育て支援のあるべき姿を考察する。

在園の親子の課題に焦点を絞り考察する

ア「クラスの在園児について」気になることと保護者への対応

《気になること》

・　身の回りのことが自分でできない。
・　人の話が聞けない，自分の思いを言動で表現できない。
・　偏食
・　生活リズムが夜型
・　虐待
・　親が子どもの身の回りのことをしてしまう。

《対応》

・　園(所)生活の中の子どもの姿をビデオに撮って，懇談会で見てもらう。ビデオを見ることで，子どもの姿に気付いてもらう。

(討議内容)

保育園(所)・幼稚園ならではの子育て支援には，子どもの姿と親の姿を把握したうえで，個々の親子に合った対応ができるということもあるのではないだろうかということでした。

・　仕事をしながら子育てをしている親は，時間に余裕がなく，手伝ってしまうことが多いという現状があります。

・　子どもが身の回りのことを自分ですることが“自立”につながるのだということを，一つひとつ伝えていくことが本当の意味での子育て支援だと考えます。
・　保育所と幼稚園では気になることが違うように見えますが，実は同じことも多いと感じます。子育て支援を考えるには，保護者の気付きを促す工夫，例えば保護者同士が話し合うことで，自分の子育てに気付くといったようなアプローチを仕掛けていくことも大切だと考えます。
・　取組を通して，自信や自立につながった事を伝えていくことが大切だと思います。
・　親の気付きを促すように伝えていくことも大切だと考えます。
・　子どもの姿と親の姿を把握し，個々の親子に合った対応ができるというのは保育園(所)・幼稚園ならではの子育て支援ではないでしょうか。
・　子どもの育ちや，年齢，障がい等といった一人ひとりの姿を把握した上での関わりができるということでも，保育園(所)・幼稚園だからこそできる支援ではないかと思います。
・　子どもの姿に変容が見られたり，何かができた時に，子どもから返ってくるものがあり，それが親にも実感できて…など，一方的ではなく，順繰り回って姿を追っていけるのは，保育園(所)・幼稚園ならではだと思います。
・　一方通行にならないというのはとても大切なことだと思います。双方向で考えていくことが大切です。

②　子育て支援事業の見学と事後討議

各見学では，討議シートに添って，見学園(所)から「見学に向けて伝えておきたいことなど」，見学者から「見学後の感想など」を出し合い，事後検討会の中で討議しました。

[討議シート：見学園から，事前に配布]

園の概要	
利用者について	
その他（見学にあたり，伝えておきたいこと等）	

[討議シート：見学者から，事後に配布]

施設環境で感じたこと	
利用者親子の様子で感じたこと	
自園の取組との相違点	
見学をして今どのような支援が必要だと感じたか	
これなら自園で取り組めると思ったこと等	

疑問・質問事項・感想	

5 月　修学院保育所地域子育て支援拠点事業　見学

事業名「赤ちゃんひろば」

［見学実施保育所から］

・　毎週火曜日に実施している「赤ちゃんひろば」では，多い時には 20 組を超える参加があります。月齢の低い子が安心して遊べるスペースを作るなど，安全面には十分配慮をしています。

・　修学院学区の民生委員も月 2 回事業に参加をし，親子のサポートや地域の情報交換などを行い，連携を図っています。

［日案］

取組のねらい	・　1 歳頃までの親子が集い，交流をすることで，共に育ち合う場とし，子育ての不安の軽減や解消を図ったり，人とのつながりを深める。 ・　参加される民生委員との交流を通して地域の人とのつながりが持てる場とする。	
活動内容	10:00～11:00	親子で自由に遊ぶ
	11:15～11:30	ふれ合いあそび 手遊び パネルシアター

事業名「お父さんデー『大きくなってね　お芋ちゃん』さつま芋の苗植え」

［見学実施保育所から］

・　お父さんデーは月 1 回土曜日に実施しています。父親も参加しやすいような内容を考えています。保育所に慣れていない方や，雰囲気が苦手な方もいるので，他の親子の様子を見ながら無理なく参加してもらえるように配慮しています。

［日案］

取組のねらい	・　さつま芋の苗植えを経験したり，成長の様子を見ることで，自然への関心を育て，親子が触れ合う機会を作る。 ・　さつま芋を収穫し，食べることで，食への興味や関心を育てる。	
活動内容	10:00	順次来所
	10:20～11:10	うた「おはようのうた」 絵本「さつまのおいも」 苗植えの話を聞く

		畑に移動し，親子で苗を植える 親子で自由に遊ぶ
	11:15～11:30	体操 パネルシアター

（事後討議）

「父親にとっても，情報交換や人とのつながりを感じられるような場が必要である」と話し合いました。

・　参加している父子の姿から，父親自身がその場にいることで安心し，楽しんで過ごしている様子が見られました。安心感をもって事業に参加できることが子育ての楽しさにつながるのではないかと考えます。
・　「父も子も共に生きている」「子どもが主体だけれども親も主体である」ということが子育て支援では大切ではないだろうかと考えます。
・　支援者は父子の様子を見守りながら，子育ての不安や悩みについて話し合い，情報交換をしながら，人とのつながりを感じられるような場を作ることが必要であると感じました。

6 月　子どもを共に育む『親支援』プログラム「ほっこり子育てひろば」見学

見学テーマ名

「いつくしむ」，「親子でいっしょにあそぼう」，「自我のめばえと生活習慣」

（事後討議）

保護者が主体となって話し合い，保護者自身が気付ける子育て支援を大切にしながら，日々の園庭開放や，在園児対象の懇談会などでも，時間や方法を工夫することで実践できるのではないかと話し合いました。

・　このプログラムでは，「保護者同士がテーマに添って子育ての悩みや不安について話し合うことを通して，悩みについて共感したり，いろいろな考え方がある」ことや「悩んでいるのは自分だけではない，みんな同じなのだということの気づき」「気持ちが楽になったり，子育てを前向きに捉えようとしていくための親育ちや仲間作りの場である」ことに改めて気付きました。

７月　佛教大学附属幼稚園園庭開放　見学

事業名「水遊び」

［見学実施幼稚園から］

・　年６・７回未就園児に園庭を開放しています。「子どもとどうして遊んだらいいか分からない」という親の悩みを受け「わくわくタイム」を作り，保育者が遊びのヒントを提供しています。

・　多い時は 100 名を超える参加者があるので，兄・姉の在園児，小学生は別の部屋を設けるなど，安全面には十分配慮しています。

［日案］

取組のねらい	・親子で安心して遊べる場を提供する。 ・縁日に参加して，我が子が喜ぶ姿を見て嬉しい気持ちになる。	
活動内容	9:45～10:00	順次来園
	10:15～11:15	着替えをする。 親子で水遊びをする。 プール・ビニールプール・水路・砂場
	11:15～正午	縁日に参加する 親子で金魚すくい・ヨーヨーすくいをする。

（事後討議）

親のニーズを把握し，園としてどのような子育て支援を行っていくか考えていくことが「今必要とされる子育て支援」につながるのではないかと話し合いました。

・　参加者が多い日には 100 名になることもあり，「ママ友がほしい」，「同年齢の子どもと遊ばせたい」など，多くの要望を持っている保護者の現状を聞き，支援のあり方を捉え直す機会となりました。

・　親のニーズを把握することで，幼稚園としてどのような子育て支援を行っていくかを熟考し，親自身が「子どもと遊んで楽しかった」「子育ては大変だけれど楽しくなってきた」と実感できることが，今必要とされる子育て支援につながるのではないかと考えます。

③　エピソード検討会

エピソード検討会では，子育て支援につながると感じたエピソードを出し合い，討議シートをもとに，今，必要とされる子育て支援について話し合いました。エ

ピソードを書くことで保護者や子どもへの関わりから保育の振り返りを行い，今後の支援のあり方につなげていくことができることを実感しました。また，互いに検討することで，子どもはもちろんのこと，親の気持ちを受け止めることの大切さを痛感しました。

エピソード：その１

このエピソードは，在園児を対象とした内容でした。子育て支援は，担任だけではなく，職員皆で支援していくことが大切であると話し合いました。

［記入者から］

担任ではないという立場から，担任をフォローする立場としてこのエピソードを取り上げました。本児が２歳児になるまでの２年間の姿を取り上げています。これは，日常の姿からのエピソードです。

どうぞ

＜エピソード＞

２歳児の保育室は２階事務所の横にあり，子どもたちの声がよく届いてきます。その日もいつものように子どもたちの声が聞こえてきました。見ると，手洗いのところでＡちゃんが「かわって」と言いました。二つある手洗いの一つを使っていたＢちゃんは「い・や・よ」と答えています。それを見ていて私が「今洗ってるし，終わったら替わってあげてね」と言葉をかけました。するとちょうど洗い終わったＣちゃんが「はい，どうぞ」と待っていたＡちゃんに「どうぞ」というような手振りも付けて言ったのです。その仕草がとてもかわいく「まぁ，Ｃちゃん上手に言えるね」と言うと嬉しそうな顔で私を見ました。

その日お迎えに来た母に，今日の私が見たＣちゃんの姿をどうぞの手振りも付けて伝えると「嬉しいわぁ。私にはその時の様子が分からないし，そのようなエピソードを聞くと嬉しいです」と話していました。

＜考察＞

このエピソードは，よくある保育の一場面であったと思います。

この春４月に進級し，担任は持ち上がりで変わりませんでしたが，新しい新入児を二人迎え，クラスとしてはその一人がよく動き回り，友達の遊びが気になったりすることで，トラブルになったり，泣き声や「いやや」の声が響いていました。

Ｃ児は春先から顔に湿疹ができて，かゆくて体調もすぐれずいらいらしていることが多くありました。そして友達へのかみつきが頻繁にありました。担任もＣ児の最近の姿を母に伝え，家庭での様子や母の今の思いを聞く機会を持っていました。母からは，今後の生活が不安なこと，状況に応じてどのように考えていくか迷いがあること，また，本児がちょうど自我が出てきて子育てもしんどい時期であることが伝わってきました。たとえば，着て行く洋服にこだわり，母は言い聞かせができず裸で登所してくる日もありました。数日前にも朝「登

所が遅くなります」と電話を受けることがあり，本児のだだこねに手を焼いていることが分かっていました。

担任は母に配慮し送迎時には必ず言葉をかけて，支援してきています。私は職場での立場から，親子の姿を見て言葉をかけて担任と共に応援しているというメッセージを発信していく役目があると思っています。保育現場では送迎時に，保護者と顔を合わせて話ができるというメリットがあります。そのためには親子の姿をしっかり担任と確認し，家庭での親支援も含めて，背景にある親の生き方を知る必要があります。そして保護者にはしんどくなる子育てが，自分育てになるということを，分かってもらえるよう，保育現場での子どもたちのかわいいこんな面があるという姿をしっかりと伝えていきたいと思います。

（エピソード検討会）

- “担任ではない”ということで母への伝え方が難しいことがありますが，その“担任ではない人との関わり”がとても大切だと思います。
- 母にとっても“いろいろな保育者が我が子を見てくれている”ということに気付くことが“安心”につながるでしょう。
- たくさんの人が我が子を見てくれているという安心感は，担任以外の言葉かけがあると「この人も見てくれている」と思えます。
- 家の事情や子どもに対してイライラすることがある中で，子どもの良い面を伝えてもらうということは，母が子育てで思い込んでいる気持ちの中に風穴が開いてほっとするなど，ちょっとしたことで親は不安になったり，安心したりするのだと思います。
- 昔なら「しんどいことは買ってでもする」と言われてきましたが，そのことが今は難しい時代です。今の子育て支援では“しんどいことを分かってくれる”ということが大切ではないかと感じます。
- 職員皆で母に子どもの姿を伝えていくということが大切だと思います。担任ではないという立場では，担任が気付かないことを伝える，また，ちょっと良くなったことを伝えるよう心がけることが大切だと考えます。

エピソード：その２

このエピソードは，地域の親子を対象とした内容でした。担当者が保護者の思いに寄り添うことが大切であり，様子を見ながら言葉をかけ，一緒に子育てについて考えていくことが安心につながるのではないかと話し合いました。

［記入者から］

園庭開放参加者の様子として，おわりの会では「子どもの様子を見ながらでいいですよ」と伝えてはいるのですが“みんなと同じようにして欲しい”と願う親が多いです。母は，今までも子育てについて，そんなに深く悩んでいる様子はありませんでした。担当者が言ったことが，先走ってしまったのかもしれないという反省もあったエピソードです。

保護者の思いに心を寄せて

＜エピソード＞

「片付けてお話しようか」と言葉をかけると，参加者は支援室のおもちゃを片付けてホールに集まっていました。A児の母親も「片付けるよ」と声をかけていましたが，A児は持っていたままごとのスプーンを離しませんでした。私は言葉をかけずに様子を見ていましたが，母親はA児を追いかけ，スプーンを取り上げて，ぐずっているA児を抱きかかえてみんなが集まっているホールへとやって来ました。いつものように体操をしたり，お話を始めるとA児はホールの外へ出て行こうとしました。母親は引き止めようとしましたがA児は泣いていやがっていました。私は，おわりの会を進めながら，合間に「無理に入らなくてもいいよ」と言葉をかけましたが母親はなんとか連れて入ろうとしていました。そのうち，あきらめたのか絵本コーナーで過ごしていたようでした。

母親は自我が出てきたA児への対応に困っている様子だったので，私は話をしたいと思いながらも，おわりの会の進行や他の利用者への対応で機会を持てずにいました。手が空いたとき，帰ろうとしているA児親子を見付けました。私は急いで寄って行き「Aちゃん，さよなら」と挨拶をし，母親には「Aちゃん自己主張がはっきりしてきたね」と言葉をかけました。玄関先でのやりとりでA児もウロウロしているような状況でしたが，母親は「そうなんです。いろんな場面で我を強く出すようになってきて，どう関わったらいいのか分からないんです。」と今の状況を話し「Aの言うことを聞いてあげるほうがいいんですか」と質問しました。私は「どんな時そういうことがあるの?」と尋ねると，母親は「食事の時，食べ物をポイポイ放るんです。」私は「その時お母さんはどうするの？」と聞くと「食べ物を放るのはいやだからダメと怒っています。そしたらAは泣き叫んで訳が分からなくなって･･･」と話しました。私は，してはいけないことを伝えることは大事だし，お母さんと同じ思いだけれど，その時にAちゃんがなぜそうしたのかをちょっと考えてみてあげてほしいことを伝えました。何か思いがあったかもしれないし，「食べるのが嫌やったの?」など言葉にして受け止めることで，本児も気持ちが落ち着くこともあるのではないかということを伝えました。「そういうことはあまり考えたことがなかったです。」と母親は話しました。大変な時期だけれど，しっかり自分の思いが育っていてお母さんにぶつけられるのは順調に成長している証であること，他人に迷惑をかける時や危険な場合を除いて，できるだけ本児の思いを優先してほしいことなどを話すと，母親は納得された様子で帰って行きました。

＜考察＞

A児がおもちゃを片付けるのを嫌がった時，おわりの会の途中で出て行った時，母親の対応や親子の様子を見ていて話をしたいと思っていましたが機会を持てずにいました。無理にみんなと同じようにさせようとする母親の言動が気になり，A児の気持ちを優先してほしいという思いで「無理に入らなくていいよ」と声をかけました。おわりの会を進行しながらだったので一方的に投げかけた言葉ではありましたが，母親にとってはその一言がきっかけになったようで，それ以降は無理に入ろうとすることはなく親子で絵本を楽しまれていました。

玄関先で話ができた時ゆっくり話せる状況ではないと思いましたので，A児の成長した姿を母親と共感し合えればそれでいいと考えていましたが，母親は私に向き直って質問されました。自我を強く出すようになったA児への関わり方についてちょうど悩んでおられる時で，私が声をかけたことが自分の思いや悩みを話されるきっかけとなったのではないかと考えます。ふだん自分の思いをあまり話されない保護者に対しては，特に気を配りながら様子を見たり，ちょっとしたことに気付いて声をかけることは必要な支援だと実感しました。

せっかく母親から話を出されたので，私が答えを出すのでなく一緒に考えていくことができればよいと思いながら，落ち着かない状況の中ではつい一方的にアドバイスをしてしまったのではないかと反省しています。私の話を聞いて，特に質問されることもなく納得された様子ではありましたが，もっといろいろな場面で困っておられたのではないか，話したいことがあったのではないかと母親の様子から感じました。ゆっくり話し合うために，もう一度保育所の中に入りA児を遊ばせながら話をする方法や，別の日に時間を持つことも考えられたのではないかなど，母親から悩みを発信されたこの機会をもっと大切にするべきだったのではないかと反省しました。

今後も，A児親子の様子を見守り，子育てについて話し合い，共に考えていきたいと思います。

子育て支援事業に参加している方は，それぞれいろいろな目的で来られていると思います。私たち担当者は，それぞれの親子の状況を把握し，思いを汲み取りながら，必要な支援をしていくことが大切であると改めて実感しました。

（エピソード検討会）

- 本児には“したい”“したくない”という思いがあったのでしょうが，みんなが集まっているところ以外で，別でポツンといることを母親は気にされていたのだと思います。
- 母親は，“みんなと一緒が安心”という気持ちがあると思います。でも，A児の年齢では無理があると思いました。その時に保育者が「無理しなくてもいいよ」と言葉をかけたことが良かったです。
- 担当者が，A児は今，自我が出ているということを言葉で伝えたことが母親の安心につながったと感じます。

３　中間報告会から

(1)　研究を振り返り見えてきたこと

- 子どもを育てるということでは同じである保育園(所)・幼稚園が，地域の中で子どもや保護者を中心に共に協力し合うこと，つながることが大切であるということ。
- 日常に交流や見学の場が少ない中で，公立・私立や保育園(所)・幼稚園の枠を超え，討議できたことは大変貴重な機会であったこと。
- 互いの取組を見学したことで得られた違いや良さの理解，また，その利点を各園(所)に取り込み活かしていけるということ。
- 事業についての考察や，エピソード検討を通して「子どもも主体だけれど親も主体

である」というように，子どもはもちろん，親の気持ちを受け止めることが必要であること。

各園(所)なりの支援がある中で，本研究プロジェクトを今後の支援の考え方や捉え方に対しての広がりや深まりのきっかけとしていきたいと話し合ってきました。

子育て支援・保護者支援の現状と実態を相互理解していく中で，互いの違いや気付きを通して知り得たことの中から，各園(所)で「何ができるのか」と言う視点をもって今後の支援を考えていくことが大切であり，保育園(所)・幼稚園それぞれの独自性を活かした子育て支援をしていくことが必要であると考えます。

(2)　アドバイザーの鯨岡峻先生から提示いただいた研究の視点について三つのポイント

① 「親支援」を中心に討議を行ってきたが，乳幼児の集う場を提供し関わり合って遊ぶことを保障することが重要である。親を支援することがひいては「子育ち支援」となるという視点が必要である。

② 子どもには「場」を，保護者には「自分の子育てを振り返る」機会をいかに提供するかが大切ではないか。

③ 在宅の子どもは，いずれ集団生活をする。事前の見学や体験が子どもにとって保育の場ならではの安心，安全に遊べる環境であることや，また，保育者の専門性に触れることで，保育者がモデルとなり「親育ち」につなげるというように，子育ての見通しが持てるような環境を整えることも子育て支援の一環ではないか。

４　研究の再考

(1)　アドバイスを受けて研究の中で再考してきたこと

・ 在宅の保護者，仕事を持つ保護者のニーズや悩みに対して，支援をする保育者自身にも主体があるという理解をしたうえで，親の思いに寄り添い受け止めることが「子育ち」につながるということを確認しました。

・ エピソード検討会が，「保育を振り返る」機会であったことを再認識しました。支援を考える時に，専門職としての知識や経験があることで親子の心に寄り添い，悩みや思いを受け止め援助できることや，保護者同士をつないでいく役割を担えるなど，子育て支援のあり方を振り返ると同時に保育を深く考察し，今後の保育の質の向上につなげていくことを確認しました。

(2)　中間報告会後のエピソード検討会

「親支援」を考えることが「子育ち支援」につながるのだという視点を持ち，地域の親子について“人との関わり”をテーマにエピソード検討会をしました。そこから，子育て支援にとって，子育ち支援と親支援は両輪であるということを確認しました。

エピソード：その１

どろんこ遊び

＜エピソード＞

ある日，園庭開放が終わり，みんなを玄関で見送っていた時，気が付くとA児の親子が残っていました。

私が,「A君，明日どろんこ遊びするけどよかったら，また遊びに来てね」と声をかけると,「今までどろんこ遊びをしたことがないんです。Aは神経質なところがあるので，あえてどろんこ遊びに参加させたいのですがどうでしょうか？」と言われました。私は,「まず砂遊びからしてみて，A君の様子を見ながら進めましょうか。」と誘ってみました。

そんな，どろんこ遊びの日のエピソードです。

どろんこ遊びの日，A児はレインコートのような生地の上下のつなぎの服を着ていました。水にぬれても嫌がらないように，どろんこ遊びを経験させたい，楽しんでほしいという母親の気持ちが伝わってきました。

そのような母親の心配をよそに，A児は母親の手を離し自分から砂場に入って，泥に手をつっ込み泥んこの感触を楽しんでいるようでした。隣りで遊んでいた少し年上の女の子から泥んこのお団子をもらい，泥が髪の毛やおでこについても，手のひらで泥んこを丸めて遊んでいました。

その様子を見ていた母親はちょっとびっくりしながらもうれしそうな表情でした。そして他の母親と同じように自分も泥んこを丸めて，A児と遊び始めました。一緒に参加していた他の母親からも「A君たくましいね。」「心配しすぎやったんとちがう。」という言葉をかけられました。

私もうれしくて,「A君が思い切り遊べるよう服を考えてくれはったんやね。お母さんの気持ちが伝わったのかもしれませんね。お母さんはA君のことを神経質だと思っておられますけれど，そうではないようですね。」と言うと,「こんな強いところがあるなんて少し安心しました。参加してよかった。」と嬉しそうに話されていました。

エピソード：その２

しゃぼん玉遊び

＜エピソード＞

普段の園庭開放は，遊びの計画はしているものの，室内のおもちゃで遊んだり，園庭で在園児と一緒に遊んだり，子どもの興味や様子に合わせて遊んでもらうように考えています。

その日は，室内で２組の親子が遊んでいたので呼びかけて，在園児と園庭で遊んでいたA児親子ともう１組の親子の８人でしゃぼん玉遊びを始めました。

他の子どもは母親と大きなしゃぼん玉を作る道具や吹くとたくさんのしゃぼん玉が出てくる道具を手に取り楽しんでいました。

A児は,最初砂遊びをしていましたが母親が作るしゃぼん玉をながめ興味を持ったようでした。

母親が一緒に手を添えて作ろうとすると，A児は手がベトベトになるのが嫌な様子でした。「A君，今はしゃぼん玉を作るより，見るのが好きみたいやね。」と私が言うと，母親は，「せっかく遊びに来たんやから，してほしいわ」と言いながら同年齢の子どもの姿と比較しているようでした。

しばらくして２歳 10 ヶ月のＢ児親子が遅れてやって来きました。Ｂ児は１歳の頃から園庭開放や一時保育を利用していましたが，その頃はA児のように母親から離れられず，母親と一対一の遊びばかりで母親が少し悩んでいました。言葉が出てきたのをきっかけに，母親から離れて遊ぶことができるような姿が見られるようになったという経緯がありました。

また，たまたまA児とＢ児の母親は，１週間程前に他の催しのフラワーアレンジメントの会で顔を合わせていたことがあるとのことで話がはずみ，楽しそうな母親たちの顔をA児は，ほほ笑みながら見ていました。Ｂ児の母親は器用で，以前しゃぼん玉遊びをしていた時，大きなしゃぼん玉を作るのが上手だったことを思い出したので「しゃぼん玉作りのコーチになって！」と私が誘いかけると快く応じてくれました。

A児はＢ児の母親が作ってくれる大きなしゃぼん玉を指さして「あーあー」と感動しているようでした。Ｂ児の母親が他の母親にしゃぼん玉作りのコツを教えている時，興味深そうな様子でしゃぼん玉液が入ったお皿の前でじっとしゃがんでいるA児にＢ児が「これをこのお皿につけるねん。ほんで，こうするねん。」としゃぼん玉液がついた輪を振るよう教えていました。

A児は，Ｂ児の言うとおりに輪を振るとその時，たまたま風が吹いてしゃぼん玉を飛ばすことができました。

私は，思わずうれしくて「A君，しゃぼん玉できたね。」と手をたたくと，まわりの母親たちも気付き「すごいね」と声をかけてくれました。A児は，とてもうれしそうに何度も繰り返してしゃぼん玉をしていました。

A児が，しゃぼん玉を作ったいきさつを母親に伝えると，「私がいくら誘っても嫌がっていたのに，お兄ちゃんに言われたらこんなにスムーズにできるのですね。」と言われました。Ｂ児の母親は「一人っ子なのに，上手に教えられるのですね。お兄ちゃんになりましたね。」とうれしそうでした。

私が，「Ｂ君，この１年でずい分お兄ちゃんになったね。」とＢ児の母親に話すと，「昨年は，私(母)にベタベタだったのにね・・・。」とＢ児のことで一年前に悩んでいた様子を自分から話してくれました。A児の母親は，このやりとりを聞いていて，一言も話はしませんでしたが何かを考えていたようでした。

＜考察＞

A児の母親は「他の子どもと同じことができるように・・・。」と焦っている様子が見えることがよくあり，保育者自身，かつて子育てをしていた頃，同じような思いをした経験から「A君は，今はお母さんと一緒に遊びたい時。『A君は○○したいのやね』とA君が言えないことをお母さんが代弁し，A君の思いを受け止めることで，安心して遊べるようになるよ」と繰り返し伝

えてきました。そのことを通し，A児への言葉かけが少しずつではありますが，変化してきているのを感じています。

母親が「神経質で幼い」と思っていたA児が，園庭開放の場で子ども同士が関わり合って遊ぶことによって楽しい時間を過ごせているようで，笑顔で登園してくるようになりました。

A児の母親は「育児書やインターネットでは得られない，母親同士の話し合いが貴重な体験になりました。また，少し先輩の母親からのアドバイスが我が子の育ちに対しての見通しを持つことができて有り難かった」と話しています。母親同士，子ども同士の関わりを通して，今後，A児がどのように育っていくか，また，保育者としてどのように関わっていくか，見守っていきたいと思っています。

今後も，園庭開放の支援内容を検討し，人との関わりを深め，子どもたちへの遊びなどを充実していきたいです。保護者には，保護者同士で不安を解消したり，学び合える機会を持っていきたいとも思っています。

(エピソード検討会)

- 継続して園庭開放に参加されているところから，安心して参加し保育者への信頼感を感じます。
- 支援の場に参加する保護者の些細な心の動きを感じ，子育てを支える保育者の意図も感じます。園庭開放が終了しても，まだ帰ろうとしない親子の心の有り様を見て取り，明日の支援につなぐ関わりも心を受け止めることになるものと考えます。
- 安心して参加する保護者の姿を通して，親子に配慮する姿が伺われます。保育者の保護者の気持ちを受け止めるという支援のあり方が読み取れました。
- エピソードからは,保育者の促しを通して親子が共に成長して行く様子が見て取れます。お母さんは我が子が他の子どもとの関わり合いを通して遊ぶ姿に成長の兆しを実感し,保育者の目線を通して母親が我が子の成長について俯瞰することで子育てへの喜びを感じると思います。
- 様々な支援の場を通して，保護者同士の関わり合いを通して，人とのつながりを深めていくことができていると考えます。その中で保護者と保護者，子どもと子ども，とのつながりを体験することで，支援の場で子育てを楽しみ，安心感を感じながら人との信頼関係を築いていくことができると考えます。
- 子育て支援にとって，子育ち支援と親支援は両輪であります。
- エピソード検討会を通して，記述者のみの保育の振り返りではなく，支援について他の職員，保育者と保育を見つめ，共に考えることを通し，園(所)内全体の理解へとつなげていくことが大切です。

Ⅳ　研究の成果

- 立ち上げ当初，研究メンバーの思いとして，保育園(所)・幼稚園でどのような支援ができるのか，保護者のニーズに対してどのように考えるのか，保育園(所)・幼稚園に，今求められている支援とはどういうものなのかなどを探っていきたいということがあり，まずは，子育て支援の現状を知ることからはじめたところ，それぞれの独自性や違いに気付きました。
- 「保育園(所)・幼稚園だからこそできる子育て支援」を考える一番の要は，子どもにとっても保護者にとっても保育園(所)・幼稚園は安心，安全な場所であるということを保育者が理解し，支援の具体的な内容や方法を考えていくことであると確認しました。
- 専門性のある保育者がモデルとなりながら，保護者の子育てを見守ることで，保護者自身が子どもの育ちや人との関わりに気付き，子育てに活かしていくことができる環境が作れるということも「保育園(所)・幼稚園だからこそできる子育て支援」だと共通理解できました。
- 研究を通して，子育て支援について話し合うことが，保育者の保育を振り返る機会にもなり，保育の質の向上にもつながることに気付きました。その中から，子育て支援は担任だけではなく，職員皆で支援していくことが必要であるということも確認できました。

Ⅴ　考察と今後の課題

- 研究の中で，子育て支援は担任だけではなく，職員皆で支援していくことが必要であると確認しました。全職員の共通理解を図るためには，どのような方法があるのかを考えていくことが必要です。
- 子育て支援について，効果的な取組を進めている地域の状況を分析し，子育て中の親子が孤立しないような情報発信の具体的な方策について検討していくことが必要です。

  そのことが，事業に参加しない，家から出られない親子への支援にもつながると思います。
- 地域の中で，子どもの育ちを中心にしたネットワークが構築できるように，子ども支援センター，保健センター，医療機関等といった関係機関との連携を図っていくことも大切だと考えます。

保育園(所)・幼稚園においては，それぞれの独自性を活かした子育て支援の取組が進められていますが，本研究プロジェクトが子育て支援の考え方や捉え方の広がりや深まりにつながり，更に充実した支援のきっかけになることを願っています。

Ⅵ　子育て支援研究プロジェクトに参加して　（五十音順）

＊＊＊＊＊＊＊＊　今井みどり　京都市保健福祉局子育て支援部保育課　＊＊＊＊＊＊＊＊

保育園(所)・幼稚園の枠を超え子育て支援に焦点を当て，共に研究できたことに感謝しています。各園(所)の子育て支援の現状や相互の考え方，違いを知り研究を通して課題を探り出し検討を深めて行く過程で多くの学びを得ることができました。

子育て支援は，家庭におかれた個別的な状況や社会的な背景を視野に入れたうえで保護者にとって「子どもが育つ」ことの意味を共に考え進めていくものではないかと考えています。その中で保護者自身がこれからの子育てに希望を持ち，楽しさを感じてもらえるようにという思いを心に抱いて行うことが大切であると思います。

研究会では，全ての保護者(在園，在宅)の方を対象に，そのニーズや悩みに対して親の思いに寄り添い，受け止める事が子育ちにつながり，そのことが「子どもも主体だけれど親も主体である」と捉え，その中で親自身が自分の子育てを振り返りながら子どもを育んで行くことに大きな意味があるということを確認することができました。それに加え，支援の場においては，子どもと保護者が保育者の専門性に触れて関わることで，変化し育ちゆく姿を見出すことができます。そして保育者もまた同じく今を生きる人として，今後の保育そのもののあり様に可能性を見い出せる取組が「子育て支援」であると確信を持つことができました。

＊＊＊＊＊＊＊＊　斉藤真由美　京都教育大学附属幼稚園（国立幼稚園）＊＊＊＊＊＊＊＊

担任として“子育て支援”を考えた時，ある戸惑いがありました。それは，「子どもが楽しんでいる姿や成長する姿が親の喜び・安心につながる，親の心の安定が子どもの伸びやかな育ちにつながる，という考えをもって保育をしています」とは言えても，「“子育て支援”としてこれらのことを大切にしています」と言い切れなかったのです。しかし，研究を重ねていく中，また，鯨岡先生から「親のニーズをどのように捉え，どのように受け止めているか」というアドバイスをいただいたことで，大きな気付きをすることができました。本園は，入園選考を行っています。そんな中，本園の教育内容や方針にある意味納得して入園している保護者と，納得のうえで入園されているのだからという考えがどこかにある教師との間では，本音やニーズの真のやり取りは生まれないのではないかということ。もう一つは，教師としての使命感が前面に出て，私の側から保護者にとって必要だと思うことを伝えることが多く，その時点で保護者のニーズが見えなくなっていたのではないか，ということです。そしてこの気付きが，戸惑いを課題に変えてくれました。その他，周りの現状を知ってこそ自園の必要な取組が見えてくること，“子育て支援”を副園長や養護教諭とのつながりの中で考えていく必要性などにも気付かさせていただきました。

今は，いかに実践していくか，に戸惑っている日々です。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊　阪本文代　京都市室町乳児保育所（市営保育所）＊＊＊＊＊＊＊＊＊

子育てや子どもを取り巻く環境は，社会の変化に伴いますます複雑になってきています。

入所している保護者，園庭開放や一時保育利用の保護者などからたくさんの子育ての悩みを聞くたびに，保護者の思いを受け止め，子育てを応援しているというメッセージを伝えてきました。

今回，子育て支援研究プロジェクトに参加し，保育園(所)や幼稚園が取り組んでいる子育て支援を，見学やエピソード検討会などを通して知る機会を得ることができました。研究を進め，討議を重ねていくことで，子育て支援は，子育ち支援と親支援という二つの視点をしっかり持つことが重要なポイントであると学びました。

子育て支援は，今までどうしても親の支援ばかりに重きを置いてしまいがちでしたが，一番基本である子どもに遊ぶ場を提供することが，子どもの育ちにつながり，そして親支援につながるのだと思います。保育所は，地域の中で子育ての中心となり，皆が集い，心も身体もほっとする場所となるよう，今後も目指していきたいと思います。

保育園(所)・幼稚園だからこそ，子どもを真ん中にしてそれぞれができる子育て支援に取り組んでいくことが大事であると確認しました。これからも，保育園(所)・幼稚園が，相互理解の下一緒に子育て支援を考えていけるよう，今回の研究をスタートとして進み出すことを願い，地域のネットワーク作りを構築していきたいと思っています。

ありがとうございました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　髙島伊代子　稲荷保育園（民営保育園）＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

自園では，平成 18 年度から地域に対しても子育て支援事業が必要と考え，専属の保育士が担当しています。毎日同じ保育士が受け入れ，継続的に関わり合うことができるので少しずつ参加者が増えてきています。しかし支援事業を充実させるため，子どもや保護者に対して今後どのような内容を企画していけばいいのかなどの課題がありました。そんな時「子育て支援研究プロジェクト」のメンバーの公募を知り参加を決めました。

研究の中で特にエピソードを持ち寄っての検討会では，エピソードには書かれていないけれどその奥にある子どもや保護者が抱えている問題に保育士が気付けるか，子どもや保護者の思いをどう受け止め，保護者同士をつないでいくか，など子育て支援のあり方を振り返ることができました。

中間報告会での鯨岡先生の御助言は，「子育ち支援」「親支援」という研究に一本の道筋をつけてくださいました。その一言一言が非常に的確で，何か悩んだ時はそこに返り，また前に進む力をいただいています。

また子育て支援は，地域社会全体で関わっていくべきものであることも実感しました。公立・私立の各施設が深いところでつながっていく必要があるのではないかと思っています。

今後は，この研究で得た貴重な研究内容を自園の職員に伝え，子育て支援の大切さを実践に

活かしていきたいと考えています。このような研究の場に参加させていただいたことを深く感謝しています。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊　前川豊子　佛教大学附属幼稚園（私立幼稚園）＊＊＊＊＊＊＊＊＊

幼稚園内で「子育て支援」活動を続けながら今後の支援の方向性や活動スタイルを模索していた私に“子育て支援研究プロジェクト”の公募が届き，「これだ」と飛び付きました。研究委員の皆さんはこどもみらい館や公立私立の保育園(所)・幼稚園などの先生方で，互いに活動情報を交換・分析し合ったり，見学し合ったりして，実に多くのことを学ばせていただきました。活動を見るごとに聞くごとに「みんなすごい」と感嘆しました。殊にこどもみらい館や保育園(所)は子育て支援を毎日行っており，感嘆と同時に私達幼稚園に何ができるのかと振り返るきっかけや，多様なやり方に気付かせて頂きました。

そして一年間研究プロジェクトに参加しながら考えたことが，幼稚園では，家庭の子育てに介入するのに限界があります。その中での支援はどうであるべきかと。支援とは遠いように見えますが，教師の資質を高め保育の向上を目指し，子どもを安心して託せる園にすることが基本です。教育環境を向上させ地域の人に信頼される園であってこそ，園庭開放，親子で遊ぶ会，預かり保育などの小さな支援も積み重ねていけば親子を支える機能を果たしていけるのではないかと思っています。

今後さらにこどもみらい館を中心に，保育園(所)と幼稚園が交流と連携を深めて研究が進むことを願っています。

研究メンバーのみなさん！！たくさんの刺激と学びをありがとうございました。

＊＊＊＊＊＊＊＊　向瀬麻由佳　京都市立明徳幼稚園（市立幼稚園）＊＊＊＊＊＊＊＊

「子育て支援」という言葉は今やここかしこで聞かれる時代で，自分がこのプロジェクトに参加させていただき，第一に一体何が「子育て支援」なのかということを考えさせられる機会になったと思います。特に今，母親の孤立・育児不安・情報化社会ゆえの情報量過多など様々な問題がクローズアップされている中，真の子育て支援とは母親のニーズにのみ応えることではないということも改めて確認し合えました。しかし，プロジェクトのメンバーで話し合っていても，子育て支援と聞くとどうしても親支援ということにポイントを置いて考えがちでした。鯨岡先生からのアドバイスを受け，子育て支援とは単なるサービスの提供に終わるのではなく，最終的にそれが子どもの健やかな成長のためになっているのかどうか，「子育ち支援」になっているのか？というところまで考えていかなくてはならないということに気付かされ，現代社会の実態や自園の保育とどうすり合わせていくのかという新たな課題も見えてきたと思っています。

第二に，国公私立・保育園(所)・幼稚園の垣根を越えたメンバーが同じ場で話をするという機会をいただけたことそれ自体が本当に貴重だったと思います。それぞれの取組を具体的に知

ることができたこと，エピソードから保育者として“保護者の思いを受け止める・共感する”ということはどういうことなのかと考えさせられたことなど得たものは大きかったです。園(所)の規模・募集年齢・立地など様々な環境は違うけれども，違うからこそ新たな発見や気付きも多く自分の園や保育の振り返りにもつながったと感じています。

最後に，私事の事情により研究のまとめまで参加できなかったことが残念ですがこの場を借りて，こどもみらい館をはじめこのプロジェクトに関わった全ての方に感謝したいと思います。そして，今後も一女性として，保育者として，母親としてより視野を広げ，様々な角度から「子育て支援」ということについて考えていきたいと思います。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　村上麻里　京都市修学院保育所（市営保育所）＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

このプロジェクトに参加させていただき，公私の枠を超え幼稚園，保育園の先生方と交流することができ，とても貴重な機会となりました。

特に保育所での地域子育て支援拠点事業を研究メンバーに知ってもらう中で，様々な気付きがありました。見学では，いただいた意見から，参加者の自然体で安心した姿が子育ての楽しさにつながっていて「親も子も共に生きている，親も子も主体である」という子育て支援をしていく中で大切な視点を改めて確認することができました。また，この拠点事業について関係機関の中でも御存じない方もおられ，私たちは担当者としてもっと発信し，子育て支援のネットワークを広げていくことが必要だと感じました。

様々な場での子育て支援を知りエピソード検討会など話し合いを重ねる中，支援のあり方を振り返る機会となり，支援に対する考え方に広がりが持てたと実感しています。

この研究で学んだことを今後の保育，子育て支援の場で活かしていきたいと思います。本当にありがとうございました。

研究プロジェクト報告会配布資料

子育て支援研究プロジェクト

保育園(所)・幼稚園だからこそできる子育て支援

京都市子育て支援総合センターこどもみらい館
子育て支援研究プロジェクト

1　研究主題の設定理由

＊　子育てに悩む保護者への支援は？
＊　家から出て来られない親子へは？
＊　我が子しか目に入らない親への支援は？
＊　虐待！
＊　地域のネットワークづくりは？

【保育園(所)・幼稚園だからこそできる子育て支援】

2　取組概要

＊参加者のニーズを知り，内容を検討し保護者が参加したいと思えるような取組
＊保育園(所)・幼稚園は在園児と地域の子育て支援において，親の子育て不安に対して，これからどのように考えていけばよいのか

【親が望むサービスを提供する支援だけでなく，子どもを中心にした保育園(所)・幼稚園ならではの支援のあり方を探る】

具体的な研究方法

＊子育て支援事業の見学
＊施設の見学
＊子育て支援研修の受講
＊エピソード検討会

研究の方法として

(1)地域子育て支援拠点事業の見学

考察・・・親も子も共に生きている子どもも親も主体である「親自身が気付く子育て支援」から「仲間づくりへ」

(2)園庭開放の見学

考察・・・親のニーズを把握することでどのような子育て支援を考えていくのか

(3)エピソード検討会

考察・・・「エピソードを書くことで，受け止めていたつもりだったことが分かり，日頃の振り返りになった」
「母親の悩みに寄り添うことの大切さが分かった」

研究を振り返る

*保育園(所)・幼稚園が地域の中で，子ども・保護者を中心に共に協力し，つながることが大切
*公私や保幼の枠を超え，日常に交流や見学の場がなく貴重な機会である
*互いの取組を見学することで得られた違いや良さの理解，また，各園(所)に利点を取り込み活かせること
*事業やエピソード検討を通して「子どもも主体だけれど親も主体である」

研究を振り返る

研究メンバーの気付き

保育園(所)・幼稚園それぞれの独自性を活かした子育て支援が必要である

中間報告会

研究メンバーの気付き

➢子育ち支援へ

➢子どもには場を，保護者には自分の子育てを振り返る機会を

➢子育ての見通しが持てる環境を整える

研究の再考

・在宅の保護者，仕事を持つ保護者のニーズや悩みに，支援をする主体としての保育者自身の理解や，親の思いに寄り添い受け止めることが子育ちにつながる

・ エピソード検討会は保育を振り返る機会となる
・ 子育て支援のあり方を振り返り，保育を深く考察し，今後の保育の質の向上につなげていく

エピソード検討会

テーマ　人とのかかわりを通して
“どろんこあそび”
“しゃぼん玉あそび”

考察

・育児書やインターネットでは得られない，母親同士の話し合いが貴重な体験に
・少し先輩の母親からのアドバイスが我が子の子育ちの見通しに

エピソード検討会での話し合い

3　研究の成果と課題

成果
・保育園(所)・幼稚園の子育て支援の対する考え方，違いを知ることができた
・保幼が一緒に考えていくことの大切さ，必要を実感し次へのステップに
・保育を振り返り，質の向上へ
・「何ができるのか」各園(所)でそれぞれの独自性を活かした子育て支援が必要

具体的に研究の中で見えてきたもの

＊子どもにとって安心・安全に遊べる場➢環境
＊子どもの育つ道筋を熟知している専門家が見守り，支援できる良さ
＊子どもと子どもがつながり，子どもを見て育つ➢子育ちへ
＊保育者が良いモデルに➢親育ちへ

今後の課題

＊全職員の理解
＊地域の分析，情報の収集と発信
＊家から出て来られない親子への支援
＊子どもの育ちから→
関係機関とのネットワークへ
（子ども支援センター，保健センター，医療機関等）

最後に

御清聴ありがとうございました

資料３

京都市子育て支援総合センターこどもみらい館 研究プロジェクト報告会
子育て支援研究プロジェクト

研究主題

「保育園(所)・幼稚園だからこそできる子育て支援」

Ⅰ　はじめに（主題設定の理由）

１　研究メンバーの思い

立ち上げ当時，それぞれが“子育て支援研究プロジェクト”に求めた思いとして「子育てに悩む保護者の支援」，「家から出て来られない親子」，「我が子しか目に入らない親」，「虐待」，「地域のネットワークづくり」等，保育園(所)・幼稚園で，どのような支援ができるのか，保護者のニーズに対してどのように考えるのか，今求められている支援とはどういうものなのかなどを探っていきたいということでした。

２　主題設定までの経過と理由

研究を進める中で「どのような内容が支援につながるのかは，参加者のニーズを知り，内容を検討し，保護者が参加したいと思えるような取組にすることを考えていかなければならないのではないか」，「在園児と地域の子育て支援において，親の子育て不安に対して，これからどのように考えていけばよいのだろうか」という共通の課題が浮かび上がってきました。そして，保護者への支援だけではなく，子どもの姿に目を向けることで見えてきたことは，「親が望むサービスを提供する支援だけではなく，子どもを中心にした保育園(所)・幼稚園ならではの支援のあり方」を考えることの大切さでした。

Ⅱ　研究内容と研究方法

１　研究内容

⑴　各々の研究メンバーの保育園(所)・幼稚園で取り組まれている事業を伝え合い，相互理解を図る。

⑵　今必要とされる子育て支援とは何かを探り，保育園(所)・幼稚園を核とした子育て支援のあるべき姿を考察する。

①　「地域への子育て支援」について

②　「在園児への子育て支援」について

２　研究方法

⑴　子育て支援に関する通信やパンフレットを持ち寄る。

⑵　各々の研究メンバーが研究に求める内容を出し合い，方向性を探る。

⑶　子育て支援事業の見学と事後討議

⑷　子育て支援研修の受講

⑸　エピソード検討会

Ⅲ　これまでの取組の概要

１　日程・内容

・1/24(月)　第１回会合
　・研究の目的，方向性について
　・情報交換と相互理解
・2/28(月)　第２回会合
　・持参資料の考察と相互理解
・3/23(水)　第３回会合
　・課題の抽出
　・研究のテーマ，ねらい，方向性についての討議
・4/25(月)　第４回会合
　・課題の抽出
　・研究のテーマ，ねらいについての討議
・5/14(土)　修学院保育所地域子育て支援拠点事業[＊参照]「お父さんデー」見学
・5/17(火)　修学院保育所地域子育て支援拠点事業「赤ちゃんひろば」見学
・5/23(月)　第５回会合
　・修学院保育所地域子育て支援拠点事業見学を終えての事後討議
　・エピソード検討会
・6/2(木)　子どもを共に育む『親支援』プログラム「ほっこり子育てひろば」見学[＊＊参照]・テーマ「いつくしむ」　場所　こどもみらい館
・6/9(木)　子どもを共に育む『親支援』プログラム「ほっこり子育てひろば」見学
　・テーマ「親子でいっしょにあそぼう」　場所　こどもみらい館
・6/16(木)　子どもを共に育む『親支援』プログラム「ほっこり子育てひろば」見学
　・テーマ「自我のめばえと生活習慣」　場所　こどもみらい館
・6/27(月)　こどもみらい館共同機構特別研修受講
　・講座名「孤独と虐待　そして子育て支援」
・7/9(土)　佛教大学附属幼稚園園庭開放見学
・7/11(月)　第６回会合
　・佛教大学附属幼稚園園庭開放見学を終えての事後討議
　・「ほっこり子育てひろば」見学と，共同機構特別研修についての討議
　・エピソード検討会
・7/28(木)　第７回会合
　・9/8(木)中間報告会に向けて（報告内容の検討）
・8/5(金)　第８回会合
　・9/8(木)中間報告会に向けて（当日資料の検討）
・8/19(金)　第９回会合
　・9/8(木)中間報告会に向けて（当日資料の読み合わせ）

・9/5（月）　第10回会合
　・9/8（木）中間報告会に向けて（最終確認と当日の報告内容に向けての検討）
・9/8（木）　中間報告会　［＊＊＊参照］
・10/5（水）　第11回会合
　・中間報告会後の討議（研究の振り返りと再考）
・10/21（金）　第12回会合
　・エピソード検討会
・10/27（木）　報告会に向けて（報告内容の検討）
・11/4（金）　第13回会合
　・1/27（金）報告会に向けて（当日資料の検討）
・11/18（金）　第14回会合
　・1/27（金）報告会に向けて（報告内容の検討）
・12/8（木）　第15回会合
　・1/27（金）報告会に向けて（報告内容の検討）
・1/11（水）　第16回会合
　・1/27（金）報告会に向けて（報告内容の最終打合せ）

［＊保育所での地域子育て支援拠点事業とは］
保育所，児童館等の地域の身近な場所で，乳幼児のいる子育て中の親子の交流や育児相談，情報提供等を実施しています。

［＊＊子どもを共に育む『親支援』プログラム「ほっこり子育てひろば」とは］
京都市では，平成20年10月に，「子どもを共に育む『親支援』プログラム」プロジェクト会議を設置し，1年半に及ぶ協議を踏まえ，平成22年4月から「ほっこり子育てひろば」を開始しています。
このプログラムは，「子どもを共に育む京都市民憲章」の趣旨を踏まえ，親自身が喜びと共に子どもを育んでいけるよう，「親としての心構えや必要な技術」を身につけるとともに，不安や疑問，悩みを乗り越えるためのプログラムです。
京都市では，様々な場で子育て支援をする関係者の皆様の御協力のもと実践の輪を広げ，親育ちや仲間づくりの場につなげているところです。

［＊＊＊中間報告会］
研究プロジェクトの立ち上げから平成23年度7月までの取組内容をこどもみらい館企画推進会議研究・研修部会委員に報告し，今後の研究について考察することを目的とし，平成23年9月に実施しました。

Ⅳ　成果と課題

1　研究の成果

(1)　研究を通して見えてきたこと

・　保育園（所）・幼稚園が同じテーマで考えることができ，子育て支援に対するお互いの考え方，違いを知ることができました。
・　保育園（所）・幼稚園が一緒に考えていくことの大切さと，必要性が実感できたことは，次へと進む一歩になりました。
・　保育園（所）・幼稚園どちらにとっても，支援だけではなく，保育を振り返る機会となり，質の向上にもつながりました。
・　子育て支援・保護者支援の現状と実態を相互に理解していく中で，互いの違いや気付きを通して，知り得たことの中から各園（所）で「何ができるのか」という視点をもって今後の支援を考えることの大切さを確認しました。

各園（所）なりの支援がありますが，本研究プロジェクトが子育て支援の考え方や捉え方の広がりや深まりにつながり，支援のきっかけになることを願っています。そして，保育園（所）・幼稚園それぞれの独自性を活かした子育て支援をしていくことが必要なのではないかと考えます。

(2)　子育て支援研究プロジェクトが考える「保育園（所）・幼稚園だからこそできる子育て支援」とは

・　子どもにとっても保護者にとっても保育園（所）・幼稚園は安心，安全な場所です。
・　専門性のある保育者のいる環境そのものが子どもの理解につながり，子育てを見守り，支援できる良さがあります。
・　子ども同士の関わりを見ることで保護者自身が子どもの育ちや人との関わりに気付き，子育てに活かしていくことができます。
・　専門性を活かして保育者がモデルとなり，安心して子育てができるよう，支え導いてサポートすることができる良さがあります。

2　子育て支援研究プロジェクトが考える今後の課題とは

・　子育て支援に対する全職員の理解が必要です。
・　親子が孤立しないように，情報を得ることができるような地域の分析，情報発信の具体的な方策も含めた検討が大切です。
・　事業に参加しない，家から出られない親子への支援が今後の課題です。
・　地域の中で，子どもの育ちを中心にしたネットワークが構築できるように，子ども支援センター，保健センター，医療機関等といった関係機関との連携を図っていくことも大切だと考えます。

子育て支援研究プロジェクトへのコメント

中京大学　　鯨岡　峻

１．本研究の意義

社会文化の大きな変動の中で、いま子育て支援が広く求められている現状がある。本研究はそのような社会的要請の中で、「保育園（所）や幼稚園に子育て支援にかかわって何ができるのか」と問いを立て、各園の子育て支援・保護者支援の実態をお互いに紹介しながら、求められている支援の具体を模索したものである。そして、各園の取り組みの違いを相互に認識することを通して、自園の保育を振り返る機会にもなり、各園の独自性を活かした取り組みを考えることができたことは、それぞれの園にとって大きな意義を持つものであったと思う。その際、各園の取り組みをエピソードで紹介することを通して、支援の場で求められているものは何かを研究に関わった人たちのあいだで具体的に検討し、保護者の多様なニーズをエピソードから明らかにすることができたのは大きな収穫であった。

実際、子育て支援を求めてやってくる保護者のニーズは、支援の具体を綴ったエピソードから分かるように、実に多様である。ある母親は、我が子が他の子と関わって遊べる場がほしいと思い、またある母親は、少しでもいいから自分の時間がほしいと思い、またある母親は、他の母親と交流できる場がほしい思い、さらにまたある母親は、自分の子育て不安を少しでも解消したいと思って子育て支援の場を求めてやってくる。このように、支援を求めるといっても、そのニーズは母親一人ひとりによって様々である。保育に携わる人たちが、「自園にできる子育て支援は？」と問い、その支援の在り方を具体的に探る中で、保護者ニーズのこの多様性を目の当たりにし、母親たち一人ひとりの悩みや苦しみを他人事としてではなく実感することができたことが、この度の研究の最大の意義であったのではないだろうか。このように本研究の意義を高く評価した上で、以下に気のついたことを数点述べてみたい。

２．「なぜ子育て支援は必要なのか」という根本的な問い

「自園にできる子育て支援は？」という問いを最初に立てたためか、「なぜ子育て支援が必要なのか」という根本的な問いを巡る議論が研究の中で少し手薄な印象がぬぐい切れなかった。そのように問いを立ててみれば、子育て支援には「子育ち支援」と「保護者支援」という二面の支援が等しく必要だという議論が生まれたに違いないからである。全国の子育て支援の実態を振り返って見ても、その支援の内容は保護者支援の側に大きく傾いていて、「子育ち支援」にしっかり目を向けた議論は乏しい。しかも、多様な保護者のニーズがあるから多様な支援が必要なのだという議論にとどまって、どのように支援するかを考えるだけでは、支援する側が本当に納得して、つまり保護者のニーズに真に共感して支援することは難しいのではないだろうか。それでは支援が必要とされているから支援せざるをえないという義務感からの支援になってしまう。支援の必要性が支援する側に本当に納得できて初めて、支援する側に共感に基づいた支援が可能になる。「何ができるか」の議論ももちろん重要だが、支援が必要であることの本質が議論され、その必要性に支援者が真に納得できるかどうかの議論がもしも本研究にあれば、全国の子育て支援の動向に対しても、より積極的な示唆を与えることができたのではないかと思う。

３.「他の子どもに関わって遊ぶ場の保障」としての子育て支援

満１歳を過ぎる頃から、子どもの育ちには親との関わり合いだけでなく、同じ歳格好の他の子どもとの関わり合いが必要になってくる。しかしながら、核家族化傾向と他の家族との交流の希薄化という現代社会の動向によって、そのことが特に在宅の乳幼児には満たされにくくなってしまった。その残念な動向を少しでも緩和するためには、在宅の乳幼児が集える場、関わり合って遊べる場を保障する必要が生まれる。これが子育て支援が必要になる第１の理由である。在宅の乳幼児の抱えるそのようなニーズに応え、子ども一人ひとりが元気に育つことが、結局は回り回って保護者支援にもなる。それらのことを視野に入れた子育て支援の議論が今回の研究ではまだまだ十分でなかったかもしれない。

そして子どもが満足して遊んでいる姿を保護者と共有して共に喜び、それが子どもに必要なことだという認識が保護者に自然に生まれるようにもっていくことも、「子育ち支援」と「保護者支援」の両方の観点から大事なことになる。またそこから翻って考えれば、通園児の保護者に園での子どもの姿をうまく伝え、保護者が子育てに前向きになるのを促すことも、自園の保護者への子育て支援の意味を持つことが分かるのではないだろうか。

４．保護者の親育ちを支える「子育て支援」

親の抱くさまざまなニーズは、現代社会において、親が親として育つことの困難な状況と結びついて表れることが多い。どの親にとっても親になりたての頃は分からない事だらけで不安が大きい。一昔前であれば子育ては祖父母の世代からの支援、隣近所からの支援があって、親の手だけにすべてが委ねられることは必ずしもなかった。そのような上の世代からの支援や隣近所からの支援が難しくなった現代は、必然的に親に過剰な心理的負担がかかり、その結果、親の子育て不安はもとより、親自身がほっとしたい、自分の時間がほしいといったレスパイトを求めるニーズを生みだす。そのように考えて初めて、多様な保護者ニーズになぜ応える必要があるのかが納得できるものになるはずで、支援する側に一種のカウンセリングマインドが求められる理由も理解できるのではないだろうか。

５．子育て支援の場を保護者主体の子育て井戸端会議に

昔からあった子育ては、同じ子育て中の親たちやそれを取り巻く周辺の人たちの井戸端会議の中で、不安や欲求不満の解消が図られ、また子育てのさまざまな知恵が自然に交換されて進められていた。現代はそれに変わるものが子育て支援の場ということになるのではないだろうか。しかし、行政主導の子育て支援の諸施策は、ややもすればお店を広げてお客を待つかたちになり易い。そして過剰な支援は保護者の依頼心を強め、自らが親としての自覚をもつことをかえって阻害することにもなりかねない。その意味では、最初からは無理だとしても、いずれは保護者が自ら積極的に井戸端会議をもてるように、支援する側がいかにして保護者からその積極性を引き出せるようにもっていくかが、子育て支援の究極の狙いだといっても過言ではない。そのためには、イベント主義に陥らずに、保護者一人ひとりの悩みを真剣に聞き届け、保護者の気持ちが前向きになるような支援が工夫されていかなければならないように思われる。

第3　研究プロジェクトのまとめ

第３　研究プロジェクトのまとめ

１　研究プロジェクト報告会の総括

(1)　日時・内容

開催日　平成 24 年 1 月 27 日（金）

会　場　京都市子育て支援総合センターこどもみらい館

内　容　①保幼小連携研究プロジェクトの報告

京都市御池保育所・京都市立中京もえぎ幼稚園・京都市立御所南小学校グループ報告

京都市錦林保育所・コドモのイエ幼稚園・京都市立第三錦林小学校グループ報告

②子育て支援研究プロジェクトの報告

③両プロジェクトに対する研究プロジェクトアドバイザー鯨岡峻先生からの講評

(2)　報告会の目的

平成 24 年 1 月 27 日に，市内の保育士・幼稚園教諭をはじめ，子育て支援団体の方や京都市内外の行政関係者等の参加者を得て,「研究プロジェクト報告会」を開催しました。

この「報告会」を開催したのは，こどもみらい館での共同機構としての研究を広く発信し，また，参加者の皆様からの御意見を伺い，保幼小連携や子育て支援にこれから積極的に取り組んでいこうとする各園所・関係機関の皆様の一つのきっかけになればと思ってのことです。

(3)　報告会までの経過

「研究プロジェクトの発足」で記したとおり，こどもみらい館における研究は「共同機構」としての取組です。したがって，報告内容も，こどもみらい館単独ではなく，各研究プロジェクトに参加するプロジェクトメンバーの総意であると同時に,「共同機構」としての意見を反映したものでなければなりません。

このため，各研究プロジェクトにおける議論とともに，こどもみらい館企画推進会議（研究・研修部会含む）や企画推進会議座長でもある研究アドバイザーの鯨岡峻先生からの御意見を頂くなかで，報告内容を取りまとめていきました。

平成 23 年 3 月には「保幼小連携研究プロジェクト合同研究会」を，平成 23 年 8 月には「保幼小連携研究プロジェクト第 2 回合同研究会」を行い,「交流をするだけでなく連携につながるためには,一人ひとりの子どもに焦点を当てた研究をするべきではないか」といったアドバイスを頂き，研究の方向性をその都度，再考して進めてきました。平成 23 年 9 月には「子育て支援研究プロジェクト中間報告会」を行い,「親を支援することがひいては“子育ち支援”につながる視点を持つことの大切さ」などのアドバイスを頂きました。親支援と子育ち支援は両輪であるとの思いを持って研究を進めてきました。また，親も子も保育者も主体であり，それぞれの思いを大事にしながら子育て支援していくことの大切さも感じました。

(4)　報告会の成果

以上のような経過を経て1月27日(金)に報告会を持つことができました。他府県からの参加を含め，当日は100名を超える御参加を頂き，保幼小連携や子育て支援に対する関心の高さがうかがわれました。時間の関係上，各プロジェクトともに時間的には短い報告となりましたが，その中で自分たちが研究してきたことをいかに参加者の皆様にお伝えできるか，何度も話し合い報告内容の再考をしてきました。アンケートにはたくさんの御意見や御感想を頂き，今後の保幼小連携や子育て支援の実践の参考になるよう情報発信していきます。

2　研究プロジェクトの総括

(1)　「共同機構」を活かした「実践」に結び付く今日的課題の研究活動

こどもみらい館の「研究機能」については，こどもみらい館の基本理念である「京都市幼児教育センター（仮称）基本構想策定委員会答申（平成８年８月）」に示された「教育・保育内容の向上を図り（中略）実践に結び付ける視点に立ち，調査・研究を行うことが重要」との理念の下に研究を行っています。

こどもみらい館の研究には，以下のような特徴があります。

① 私立，公立，保育園（所），幼稚園の垣根を越えて，共に研究を進めていくことで，それぞれの保育，教育内容を理解し，それぞれが自園（所）の保育，教育について振り返り，保育，教育内容の向上を目指すことができる機会となる。

② 企画推進会議研究・研修部会委員や研究アドバイザーを含めた多くの識者からの御意見をいただき，より今日的な課題を明確にしながら研究を進めていける。

③ 研究の進行や方向性を支えていくために，こどもみらい館の主任主事がコーディネーターとしての役割を果たすことができる。

こうした特徴を活かして，子どもたちを中心に据えた研究を行うことができました。子どもや保護者，一人ひとりの内面（心の成長）に目を向け，保幼小連携研究プロジェクトでは「子どもの育ちの連続性を見通した保育，教育について」，子育て支援研究プロジェクトでは「保育園(所)・幼稚園を核とした地域の子育て支援」を考え取り組んできました。

(2)　到達点と今後の研究活動の展望

ア　「保幼小連携研究プロジェクト」について

京都市御池保育所・京都市立中京もえぎ幼稚園・京都市立御所南小学校グループでは，主体性に着目したことで，安心・安定が基盤となり主体性を発揮していくことや，体験を大切にして子どもたちの学びを支えていく保幼と，達成度を大切にして教科学習を行う小学校の違いを踏まえ，交流を図っていく上で生活科が効果的なことが分かりました。また，子どもたちの主体性が授業の中で発揮されるためには，子どもたちが思いや考えを自分の言葉で表現することが大切で，保幼ではその意欲を育てていくことの必要性を再認識しました。

京都市錦林保育所・コドモのイエ幼稚園・京都市立第三錦林小学校グループでは，大人がつながったネットワークがあり，それを基盤に交流を始めることができました。子どもの心の育ちを大切にした連携を考えることで，既にあったネットワークがより深まりました。また，地域の子ども一人ひとりの育ちを保幼小が理解し，同じ目線で姿を追っていきながら，交流を重ねていくことで，子どもたちの小学校就学への安心感や憧れ・期待につながり，ひいては保護者の安心にもつながりました。

今後も，この 2 グループは子どもの内面や心の育ちに焦点を当てた保幼小の連携を続けるとともに，子どもの育ちを保護者に伝えながら，保護者とより連携を図り，子どものより良い育ちにつなげていくことが重要だと考えます。

また，こどもみらい館においては，研究機能の特色でもある「幼稚園と保育園（所）等が共通するテーマについて共同して研究を行うことを志向」するという研究スタイルを十分に活かし，保育の質をはじめ，今日的な課題に資する研究を進めていきたいと考えています。

イ　「子育て支援研究プロジェクト」について

「保育園(所)・幼稚園だからこそできる子育て支援」を考える一番の要は，子どもにとっても保護者にとっても保育園(所)・幼稚園は安心，安全な場所であるということを保育者が理解し，支援の具体的な内容や方法を考えていくことであると確認しました。また，専門性のある保育者がモデルとなり，保護者の子育てを見守ることで，保護者自身が子どもの育ちや人との関わりに気付き，子育てに活かしていくことができる環境が作れるということも「保育園(所)・幼稚園だからこそできる子育て支援」だと共通理解できました。

こどもみらい館においては，このような到達点と「全職員の理解」「情報発信の具体的な方策」「家から出られない親子への支援」「地域のネットワークを探る」等の今後の課題を踏まえ，これからも子育て支援についての研究を重ねていきたいと考えています。

(3)　結びに

こどもみらい館は,「幼稚園と保育園(所)等が共通するテーマについて共同して研究を行うことを志向し，徐々にその範囲を拡大していく」ことを目指しています。今後も多くの共同機構の保育者の参画を得て，保育実践に結び付く研究をしていきたいと考えています。保育者の専門性の更なる向上と，保育・教育内容の充実，地域の子育て力の向上を目指し,「共同機構」として新たな研究事業を展開してまいりますので，引き続き一層の御支援と御協力を賜りますようお願いいたします。

最後になりましたが，本研究の各々のプロジェクトメンバーを初め，アドバイザーの鯨岡峻先生には，一方ならぬ助力を頂き，深く感謝の意を表します。

研　究　体　制

研究プロジェクトアドバイザー　　鯨岡　峻　中京大学教授

研 究 メ ン バ ー

【保幼小連携研究プロジェクト】

―京都市御池保育所・京都市立中京もえぎ幼稚園・京都市立御所南小学校グループ―

木原　克美	（京都市御池保育所園長）	木原　圭	（京都市御池保育所副園長）
下野　展英	（京都市御池保育所主任）	武生　和佳	（京都市御池保育所保育士）
松尾真由美	（京都市立中京もえぎ幼稚園園長）	塩川　道子	（京都市立中京もえぎ幼稚園教頭）
平松　美和	（京都市立中京もえぎ幼稚園教諭）	藤井真理子	（京都市立中京もえぎ幼稚園教諭）
平田　あや	（京都市立御所南小学校教諭）		

（平成 22 年度メンバー）

松長真由美	（京都市立中京もえぎ幼稚園教諭）	中岡　雄介	（京都市立中京もえぎ幼稚園教諭）
宮川佳代子	（京都市立御所南小学校教諭）		

【保幼小連携研究プロジェクト】

―京都市錦林保育所・コドモのイエ幼稚園・京都市立第三錦林小学校グループ―

永田　知子	（京都市錦林保育所所長）	中澤須美子	（京都市錦林保育所副所長）
小倉　佳澄	（京都市錦林保育所保育士）	府上　征三	（コドモのイエ幼稚園園長）
大賀　祐子	（コドモのイエ幼稚園主任）	藤田　麻美	（コドモのイエ幼稚園教諭）
塚原　優有	（京都市立第三錦林小学校講師）		

（平成 22 年度メンバー）

三宅　文子	（京都市錦林保育所所長）	瀧村　良江	（京都市錦林保育所保育士）
橋爪麻理子	（コドモのイエ幼稚園教諭）	小沢亜季乃	（京都市立第三錦林小学校講師）

【子育て支援研究プロジェクト】

今井みどり	（京都市保健福祉局子育て支援部保育課担当係長）
斉藤真由美	（京都教育大学附属幼稚園教諭）
阪本　文代	（京都市室町乳児保育所副所長）
髙島伊代子	（稲荷保育園保育士）
前川　豊子	（佛教大学附属幼稚園教諭）
向瀬麻由佳	（京都市立明徳幼稚園教諭）
村上　麻里	（京都市修学院保育所保育士）

【こどもみらい館事務局】

黒﨑　徳江　首席主事
吉田　秀子　主任主事
髙橋由記子　主任主事
（平成 22 年度事務局）
柳生　和代　主任主事

京都市子育て支援総合センター

第 2 回こどもみらい館研究プロジェクト報告書

発行日　平成 24 年 3 月
発行者　京都市子育て支援総合センター　こどもみらい館
〒604-0883　京都市中京区間之町通竹屋町下る楠町 601 番地の 1
電話　（075）254-5001　FAX　（075）212-9909